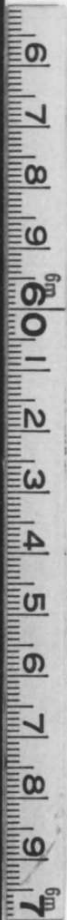


續國譯漢文大成

文學部 七十

309  
65

入



始



續國譯漢文大成

文學部第七十册(第十八帙の二)

王右丞集の一

吉田谷郎氏

寄贈本



309  
65

王右丞集 目次

王右丞集序言……………一

王右丞詩箋注自序……………二

王右丞詩評……………一〇

王右丞本傳……………一四

王右丞年譜……………一五

卷一

古詩

奉和聖製天長節賜宰臣歌應制……………一

登樓歌……………三

雙黃鶴歌送別……………七

贈徐中書望終南山歌……………九

送友人歸山歌二首……………一〇

---

魚山神女祠歌二首……………一五

迎神曲……………一五

送神曲……………一六

白龍渦……………一七

酬諸公見過……………一九

卷二

古詩

目次

蘇園羈集文大如

王右丞集目次

扶南曲歌詞五首……………三  
 從軍行……………二七  
 隴西行……………二六  
 早春行……………三〇  
 贈裴迪……………三三  
 瓜圃詩并序……………三三  
 同盧拾遺韋給事東山別業二十韻……………三六  
 和使君五郎西樓望遠思歸……………四一  
 酬黎居士浙川作……………四一  
 奉寄韋太守陟……………四四  
 林園卽事寄舍弟統……………四四  
 贈從弟司庫員外綬……………四八

卷三

古詩

胡居士臥病遺米因贈……………五  
 與胡居士皆病寄此詩兼示學人二首……………六  
 藍田山石門精舍……………八  
 青溪……………八

座上走筆贈薛璠慕容損……………五  
 贈李頎……………五二  
 贈劉藍田……………五三  
 贈房盧氏瑄……………五五  
 贈祖三詠……………五七  
 春夜竹亭贈錢少府歸藍田……………六〇  
 戲贈張五弟諶三首……………六一  
 至滑州隔河望黎陽憶丁三萬……………六二  
 秋夜獨坐懷內弟崔興宗……………六九  
 贈裴十迪……………七〇  
 華嶽……………七一

崔灑陽兄季重前山興……………八七  
 終南別業……………八九  
 李處士山居……………九〇  
 韋侍郎山居……………九一

丁寓田家有贈……………九二  
 渭川田家……………九四  
 春中田園作……………九六  
 過李揖宅……………九七  
 飯覆釜山僧……………九八  
 謁璿上人并序……………一〇〇  
 送魏郡李太守赴任……………一〇三

卷四

古詩

送張五歸山……………一〇七  
 齊州送祖三……………一〇八  
 送綰雲苗太守……………一一九  
 送從弟蕃遊淮南……………一二〇  
 送權二……………一二三  
 送高道弟軋歸臨淮作……………一二四  
 送別……………一二七  
 送張舍人佐江州同薛據十韻……………一二九  
 送韋大夫東京留守……………一三三

送康太守……………一〇六  
 送陸員外……………一〇九  
 送宇文太守赴宣城……………一一〇  
 送綦母校書棄官還江東……………一一一  
 送六舅歸陸渾……………一一三  
 留別邱爲……………一一四  
 送別……………一一五

賁聖寺送廿二……………一三五  
 留別山中溫古上人兄并示舍弟綰……………一三六  
 觀別者……………一三八  
 別弟緒後登青龍寺望藍田山……………一四〇  
 別弟妹二首……………一四一  
 別綦母潛……………一四二  
 新晴晚望……………一四四  
 晦日游大理韋卿城南別業四首……………一四五  
 冬日游覽……………一五〇



自大散以往深林密竹至黃牛嶺見黃花川... 一五  
休假還舊業使... 一五  
早入榮陽界... 一五  
宿鄭州... 一五

卷五

古詩

濟上四賢詠三首... 一五  
崔錄事... 一五  
成文學... 一五  
鄭霍二山人... 一六  
偶然作六首... 一六  
西施詠... 一七  
李陵詠... 一八  
燕子龕禪師... 一八

卷六

古詩

夷門歌... 一五

渡河到清河作... 一五  
苦熱... 一六  
納涼... 一六

羽林騎閩人... 一八  
冬夜書懷... 一九  
早朝... 一九  
寓言二首... 一九  
雜詩... 一九  
獻始興公... 一九  
哭殷遙... 一九  
歎白髮... 一九

新秦郡松樹歌... 一九

青雀歌... 二〇  
隔頭吟... 二〇  
老將行... 二二  
燕支行... 二二  
桃源行... 二三  
洛陽女兒行... 二三  
黃雀癡... 二四  
榆林郡歌... 二四  
問寇校書雙溪... 二四  
寄崇梵僧... 二五

卷七

近體詩

奉和聖製賜史供奉曲江宴應制... 二五  
從岐王過楊氏別業應教... 二六  
從岐王夜聽衛家山池應教... 二六  
和尹諫議史館山池... 二六  
同崔員外秋宵寓直... 二六  
奉和楊駙馬六郎秋夜即事... 二六

同崔傅答賢弟... 二四  
同比部楊員外十五夜游有懷靜者季... 二六  
故人張諲工詩善易卜兼能丹青草隸... 二四  
答張五弟... 二四  
贈吳官... 二四  
雪中憶李揖... 二四  
送崔五太守... 二四  
送李睢陽... 二五  
寒食城東即事... 二五  
不遇詠... 二五

酬虞部蘇員外過藍田別業不見留之作... 二六  
酬比部楊員外暮宿琴臺朝躋書閣率爾見贈作... 二六  
酬戲少尹徐舍人見過不遇... 二六  
暮容承攝素饌見過... 二七  
酬慕容上... 二七  
酬張少府... 二七

喜福三至留宿.....二五  
 酬賀四贈葛巾之作.....二六  
 寄荊州張丞相.....二七  
 輞川閒居贈裴秀才迪.....二八  
 冬晚對雪憶胡居士家.....二九  
 山居秋暝.....三〇  
 歸嵩山作.....三一  
 歸輞川作.....三二  
 韋給事山居.....三三  
 山居即事.....三四  
 終南山.....三五  
 輞川閒居.....三六

卷八

近體詩

送封太守.....三五  
 送嚴秀才還蜀.....三六  
 送張判官赴河西.....三七  
 送岐州源長史歸.....三八

春園即事.....二八九  
 洪上即事.....二九〇  
 與盧象集朱家.....二九一  
 過福禪師蘭若.....二九二  
 黎拾遺昕裴秀才迪見過秋夜對雨之作.....二九三  
 晚春嚴少尹與諸公見過.....二九四  
 過威化寺曇興上人山院.....二九五  
 夏日過青龍寺謁操禪師.....二九六  
 鄭果州相過.....二九八  
 香積寺.....二九九  
 過崔駙馬山池.....三〇〇  
 送李判官赴江東.....三〇一  
 送張道士歸山.....三〇二  
 同崔興宗送張公.....三〇三  
 送錢少府還藍田.....三〇四  
 留別錢起.....三〇五

送邱為往唐州.....三一五  
 送元中丞轉運江淮.....三一六  
 送崔九與宗游蜀.....三一七  
 送崔興宗.....三一八  
 送平澹然判官.....三一九  
 送孫秀才.....三二〇  
 送劉司直赴安西.....三二一  
 送趙都督赴代州得青字.....三二二  
 送方城韋明府.....三二三  
 送李員外賢郎.....三二四  
 送梓州李使君.....三二五  
 送張五諶歸宣城.....三二六

卷九

近體詩

春日上方即事.....三二七  
 汎前陂.....三二八  
 游李山人所居因題屋壁.....三二九  
 登河北城樓作.....三三〇

送友人南歸.....三三〇  
 送賀遂員外外甥.....三三一  
 送楊長史赴果州.....三三二  
 送邢桂州.....三三三  
 送宇文三赴河西充行軍司馬.....三三四  
 送孫二.....三三五  
 送崔三往密州觀省.....三三六  
 送邱為落第歸江東.....三三九  
 漢江臨眺.....三四〇  
 登辨覺寺.....三四一  
 涼州郊外遊望.....三四三  
 觀獵.....三四四  
 登裴迪秀才小臺作.....三五二  
 被出濟州.....三五三  
 千塔主人.....三五五  
 使至塞上.....三五五

晚春聞思……………三五  
戲題示蕭氏外甥……………三五  
秋夜獨坐……………三五  
待儲光義不至……………三五  
聽宮鶯……………三五  
早朝……………三五  
愚公谷三首……………三五

卷十

近體詩

奉和聖製從蓬萊向興慶閣應制……………三七  
大同殿生玉芝龍池上有慶雲即事……………三九  
敕賜百官櫻桃……………三九  
敕借岐王九成宮避暑應教……………三九  
和賈舍人早朝大明宮之作……………四〇  
和太常韋主簿五郎溫湯寓目……………四〇  
苑舍人能書梵字兼達梵音皆曲盡其妙戲贈……………四〇  
重酬苑郎中……………四〇  
酬郭給事……………四〇

雜詩……………三五  
過秦皇墓……………三五  
故太子太師徐公輓歌四首……………三七  
故西河郡杜太守輓歌三首……………三七  
故南陽夫人樊氏輓歌二首……………三七  
達奚侍郎夫人寇氏輓歌二首……………三七  
恭懿太子輓歌五首……………三六

既蒙有罪旋復拜官伏感聖恩竊書鄙意……………四〇  
酌酒與裴迪……………四〇  
綢川別業……………四〇  
早秋山中作……………四〇  
積雨綢川莊作……………四〇  
過乘如禪師蕭居士嵩邱蘭若……………四二  
春日與裴迪過新昌里訪呂逸人不遇……………四二  
送方尊師歸嵩山……………四二  
送楊少府貶郴州……………四二

出塞作……………四〇

卷十一

近體詩

奉和聖製慶元元皇帝玉像之作應制……………四二  
奉和聖製與太子諸王三月三日龍池春禊應制……………四二  
奉和聖製上巳於望春亭觀禊飲應制……………四二  
奉和聖製幸玉真公主山莊因題石壁十韻應制……………四二  
奉和聖製登降聖觀與宰臣等同望應制……………四二  
奉和聖製御春明樓臨右相閣亭賦樂賢詩應制……………四二  
奉和聖製暮春送朝集使歸郡應制……………四二  
奉和聖製送不蒙都護兼鴻臚卿歸安西應制……………四二  
三月三日曲江侍宴應制……………四二  
奉和聖製十五夜燃燈繼以酺宴應制……………四二  
奉和聖製重陽節幸臣及羣官上壽應制……………四二  
三月三日勤政樓侍宴應制……………四二

卷十一

近體詩

和陳監四郎秋雨中思從弟據……………四六  
和僕射晉公扈從溫湯……………四八  
和宋中丞夏日游福賢觀天長寺之作……………四八  
沈十四拾遺新竹生讀經處同諸公之作……………四八  
贈東嶽焦鍊師……………四八  
贈焦道士……………四八  
投道一師蘭若宿……………四九  
山中示弟等……………四九  
田家……………四九  
過盧員外宅看飯僧共題……………四九  
濟州過趙叟家宴……………四九  
青龍寺曇壁上人見院集并序……………四九

聽百舌鳥……………四二

春過賀遂員外藥園……………四七五  
 河南殿尹弟見宿敵廬訪別人賦十韻……………四七五  
 送秘書見監還日本國并序……………四七五  
 送徐郎中……………四九二  
 送熊九赴任安陽……………四九二  
 送李太守赴上洛……………四九四  
 游感化寺……………四九五  
 游悟真寺……………四九六

卷十三 近體詩

答裴迪……………五三三  
 山中寄諸弟妹……………五四  
 聞裴秀才迪吟詩因戲贈……………五五  
 贈韋穆十八……………五五  
 皇甫岳雲溪雜題五首……………五六  
 鳥鳴磳……………五七  
 蓮花塢……………五七  
 鷓鴣堰……………五八

與蘇廬二員外期游方丈寺而蘇不至因有是作……………五〇一  
 曉行巴峽……………五〇三  
 賦得清如玉壺冰……………五〇四  
 春日直門下省早朝……………五〇六  
 上張令公……………五〇八  
 哭褚司馬……………五一  
 過沈居士山居哭之……………五二  
 哭祖六自虛……………五二六

上平田……………五八  
 萍池……………五九  
 綢川集并序……………五九  
 孟城坳……………五九  
 華子岡……………五九  
 文杏館……………五九  
 斤竹嶺……………五九  
 鹿柴……………五九

木蘭柴……………五五  
 茱萸許……………五六  
 宮槐柏……………五六  
 湖臨亭……………五七  
 南垞……………五八  
 欽湖……………五八  
 柳浪……………五九  
 樂家湖……………五九  
 金屑泉……………五九  
 白石灘……………五九  
 北垞……………五九  
 竹里館……………五九  
 辛夷塢……………五九  
 漆園……………五九  
 椒園……………五九

卷十四

近體詩

田園樂七首……………五三三

臨高臺送黎拾遺……………五四七  
 送別……………五四八  
 別綢川別業……………五四九  
 崔九弟欲往南山馬上口號與別……………五四九  
 留別崔興宗……………五五〇  
 息夫人……………五五一  
 班婕妤三首……………五五二  
 題友人雲母障子……………五五三  
 紅牡丹……………五五五  
 左掖梨花……………五五六  
 口號又示裴迪……………五五七  
 雜詩三首……………五五八  
 崔興宗寫真……………五五九  
 山茱萸……………五六〇  
 哭孟浩然……………五六一

少年行四首……………五六七

寄河上段十六.....五十一  
 贈裴旻將軍.....五十一  
 九月九日憶山東兄弟.....五十二  
 戲題綉川別業.....五十二  
 戲題盤石.....五十二  
 與盧員外象過崔處士與宗林亭.....五十二  
 送王尊師歸蜀中.....五十二  
 送元二使安西.....五十二  
 送別.....五十二

卷十五

外編

東溪翫月.....五十九  
 過太乙觀買生房.....五十九  
 送孟六歸襄陽.....五十九  
 淮陰夜宿二首.....五十九  
 下京口埭夜行.....五十九  
 山行遇雨.....五十九  
 夜到潤州.....五十九

送韋諷事.....五十二  
 靈雲池送從弟.....五十二  
 送沈子福歸江東.....五十二  
 寒食汜上作.....五十二  
 劇嘲史寢.....五十二  
 菩提寺禁婁迪來相看私成口號示婁迪.....五十二  
 涼州賽神.....五十二  
 哭殷遙.....五十二  
 歎白髮.....五十二

冬夜寓直麟閣.....六〇〇  
 賦得秋日懸清光.....六〇一  
 山中.....六〇二  
 從軍行二首.....六〇三  
 游春曲二首.....六〇五  
 相思.....六〇六  
 太平樂二首.....六〇七

送春辭.....六〇九  
 書事.....六〇九  
 塞上曲二首.....六一〇  
 關上行.....六一一  
 閨人贈遠五首.....六一二  
 過友人莊.....六一四  
 賦典.....六一四  
 游春辭二首.....六一五  
 秋思二首.....六一七

秋夜曲二首.....六〇八  
 從軍辭.....六〇九  
 塞下曲二首.....六一〇  
 平戎辭二首.....六一一  
 閨人春思.....六一二  
 贈遠二首.....六一三  
 獻壽辭.....六一四  
 失題.....六一五  
 疑夢.....六一七

王右丞集序言

嘗て聞く、王右丞集を把つて、之を注する者、元の廬陵の劉須溪を以て始めとし、繼ぎて明の武陵の顧元緯、明の旬吳の顧可久、清の吳興の凌初成、清の仁和の趙殿成松谷の五家のみ、此の外に蜀本あり、廣信本あり、維揚本あり、而して其中、劉注本と武陵の顧注本とは、我に傳來の有無は、余の淺學、未だ嘗て知らざるなり、我に傳へて流行せしものは、旬吳の顧注本と爲す、是の顧注本は全十卷を一部とす、文四卷、詩六卷なり、文四卷を除き、詩六卷を繕寫して摹刻したるものを平安の木房祥と爲す、我に於て行はるる右丞集注本は、蓋し是の一部有るのみ、我に此の刻本成りてより後、二十三年を繕て彼に於て出でしものを、趙松谷箋注、二十八卷と爲す、乃ち原本多く傳來せるを以て、我に摹刻の要無しとの考へか、木房祥の顧可久に於けるが如き、忠臣は未だ現はれざるなり、試みに顧本と趙本とを對照するに、顧は略なるのみならず、佛典に就いては臆斷を下すもの多し、趙は詳は論勿し、佛典に就いても曾て臆斷を下さず、良に王右丞に對して、忠臣なるのみならず、後進に對しても、大なる珠玉を賜ふものなり、余が今日、此の和解を爲す、皆松谷の賜なり、松谷微かりせば、余が苦辛、其れ幾何ぞ、余故に云ふ、國譯王右丞集を讀む人は、余が注したるものにあらず、乾



隆の碩學趙松谷が注したるものなりし信じ玉へ、

上元二年右丞、玉樓中の人と爲りてより、正に是れ千二百年、昭和三年秋九月

釋 清 潭 識

王右丞詩箋注 自序

傳に稱す、詩は以て性情を道ふ、人の性情一ならず、是を以て諷吟歌詠の間に發し、亦遂に參差、其れ同じからず、蓋し然る所以を知らずして然るものあり、唐の詩、傳ふる者幾百家、其れ善く行樂を爲すの詞と、工に愁苦を爲すの什と相半なり、性情に於て、各の肖たる所を得と雖も、而も其の夫の溫柔敦厚の教に悖らざる者を求むれば、未だ數數觀易からざるなり、右丞、開元天寶の間に崛起し、才華炳煥、一時を籠罩す、而して又天機清妙、物と競ふ無し、人事の升沈得失を擧げ、以て其の中に膠滯せず、故に其の詩を爲る、興趣洋溢、凡近を脱棄し、麗にして之を浮に失せず、樂んで瀉に流れず、即ち送人遠適の篇、懷古悲歌の作ある、亦復渾厚大雅、怨尤露はれず、苟くも、實に古の詩教の旨を得るものにあらずんば、焉んぞ能く是に至らんや、乃ち論者、其の嶽山の難に死する能はざるを以て、而して遽かに其の詩を譏議し、以爲らく、萎弱にして氣骨少なしと、抑も思ふ、右丞の服藥病を取ると、甄濟の隔りて歎血を爲すと、苦節何ぞ殊ならん、而して一は則ち竟に焚龍を脱し、一は則ち維繫を免れざる者、遇の幸あり、不幸あるなり、普施に拘禁せられ、凝碧に悲歌す、君子其の辭を讀み、而して其の志を原ねて、深く哀しむに足る、即ち謂ふ、之を身を致すの義に投り、尙ほ一

死を少く、辭章の得失に至りては何ぞ與からん、而して亦波及するに微辭を以てするは、乃ち過るなからんか、又、古今來、其の詩を推許する者、或は、趣味澄豊、清流貫達の若しと稱し、或は、秋水芙蓉、風に倚つて自から笑ふ如しと稱し、或は、出語妙處、造物と相表裏すと稱するの類、揚謂するも亦曲當と爲す、其の詩の溫柔敦厚、獨り詩人性情の美を得ること有るが若きは、前人未だ之を發明する者あらざるを惜む、詩注、數家有りと雖も、頗る舛鑿多く、文筆類に至りては、皆缺如せり、鄙心未だ盡さざる所あり、爰に是れ舊文を校理し、浮蔓を芟作し、遺を搜り逸を補ひ、空器の駁を爲すを欲せず、亦敢て深文の説を爲さず、總て作者本來の旨を失ふ無きを期するのみ、獨り是れ、能薄く才調、讀書未だ廣からず、纒ひ一隅の見あるも、之を管窺筐舉に譬ふ、得る所幾何ぞ、幸にして生れて聖世に逢ひ、文教匯に敷き、炳炳麟麟、典籍今に於て大に備はる、而して博物洽聞の彦、武を蘭臺顯閣の間に接ぐ、以て折中して問難すべし、行く將に其の未だ知らざる所を訪ひ、其の未だ合せざる所を訂し、以て斯篇の闕失を定めんとす、其れ或は、雌霓謠呼、金根妄身、薪歌延瀾の未だ詳かならざるものあらん、苟くも見聞あらば、克く以て時に應じて改定せん、是れ固より區區の志なり、乾隆元年歲在丙辰正月望日、仁和趙殿成松谷氏、書圃の目耕堂に漫題す、

王右丞詩評

一、王右丞集十卷、晁氏が曰く、維幼にして能く文を屬し、草隸に工に畫を善くす、安祿山反し、賊中に陥る、賊大に凝碧池に宴す、詩を賦し痛悼す、詩、行在に聞え、後、死を免るるを得、代宗、維が文章を、弟、緝に訪ふ、十卷を哀集して之を上る、李肇記に、維が、漢漢水田飛、白鷺、陰陰夏木、嘯、黃鸝、以爲らく李嘉祐が句を竊むものと、今嘉祐集に之れ無し、豈肇厚く誣ふるや、陳氏曰く、建昌本と蜀本と次序皆同じからず、大抵蜀刻唐六十家集、多く它處の本に異なる、而して此の集編次尤も倫無し、維が詩、清逸、陶謝に追逼す、輞川別墅圖、摹傳して今に至る、嘗て裴迪と同じく各二十絶句を賦す、集中又迪に與ふる書あり、略に曰ふ、夜華子岡に登る、輞水淪漣、月と上下し、寒山の遠火林外に明滅し、深巷寒犬、吠聲豹の如し、郵墟夜春、復疎鐘と相聞はる、此の時獨坐、僮僕靜默、毎に思ふ、曩昔手を攜へて詩を賦せしことを、當に春中、弁木蔓發し、輕僮水を出で、白鷗翼を矯げ、露青阜を濕ほし、麥雉朝雉を待つべし、倘しくは能く我に従つて游ばんか、余之を讀む毎に、人をして飄然獨往の興あらしむ、迪が詩も亦佳、然れども它、世に聞ゆる無し、蓋し亦高人なり、輞川本宋之間が別圖、維後に表して清源寺と爲す、終に其の西に墓す、文獻通考

- 二、王維、王昌齡、儲光羲等三十五人、皆河嶽の英靈なり、聲譽、河嶽英靈集序
- 三、沈宋既に歿して、崔司勳顯、王右丞維、復開元天寶の間に崛起す、獨孤及、左補闕安定皇甫公集序
- 四、王右丞、韋蘇州、澄澹精練、格其の中に在り、豈道舉を妨げんや、司空圖、與李生論詩書
- 五、右丞、蘇州、趣味澄澹、清流の貫達する若し、司空圖、與王駕評詩書
- 六、王右丞が詩、秋水芙蓉、風に倚つて自から笑ふが如し、詩人玉屑
- 七、王摩詰が詩、渾厚閒雅、古今を覆蓋す、但し、久隱山林の人の、徒らに曠澹を成す如きなり、  
西清詩話
- 八、顧長康、畫を善くす、而れども、詩を能くせず、杜子美、善く詩を作る、而れども、畫を能くせず、二子の間に從容するもの王右丞なり、詩話總龜
- 九、孟詩は樂の苗裔、漢の蘇李、魏の曹劉、其の正始を得たり、宋齊より下、其の浮淫流佚を得たり、唐の時、子昂、李杜、沈宋、王維の徒、或は其の淳古澹泊の聲を得、或は其の舒和高暢の節を得たり、歐陽修香梅齋畫後
- 十、右丞、蘇州、皆陶を學び、王其の自在を得たり、後山詩話
- 十一、孟浩然、王摩詰の詩、李杜よりして下、當に第一と爲すべし、老杜の詩に云ふ、不見高人王右丞、又云ふ、吾憐孟浩然、皆公論なり、許彦周詩話
- 十二、詩は苦吟に非ざれば工ならず、信なり、古人、孟浩然眉毛盡く落ち、王維走りて簡覽に入るが如き、皆苦吟するものなり、雲仙散錄
- 十三、韋蘇州の詩、韻高くて氣清し、王右丞の詩、格老いて味長し、皆五言の宗匠、然れども、互に得失あり、優劣無きにあらず、標韻を以て之を觀れば、右丞の詩格老いて味遠きは、蘇州に遠はず、其の詩迫らずして味甚だ長きに至りては、蘇州亦及ばざるなり、歐陽修詩話
- 十四、王維が詩、典重澗深、學者察せず、容冶に失す、木天禁語
- 十五、王維が作、上林春曉、芳樹微烘、百囀流鶯の如きは宮商迭に奏し、黃山紫塞、漢館秦宮の如きは、氣蘊香渺の間に半蘇偉麗なり、真に所謂有聲畫なり、丹青に妙なる者に非ずんば、其れ孰か之を能くせん、矧や陋も辭情閒暢、音調雅馴、今に至り、人之を師とし之を誦し、格式と爲す、史鑑類編
- 十六、詩總て才を離れず、天才あり、地才あり、人才あり、吾天才に於て李太白を得、地才に於て杜子美を得、人才に於て王摩詰を得たり、太白氣韻を以て勝れ、子美格律を以て勝れ、摩詰理趣を以て勝る、太白は千秋の逸調、子美は一代の規模、摩詰は大雄氏の學に精し、句句皆聖教に合す、  
徐而庵說唐詩
- 十七、王維が詩、高きものは禪に似、卑きものは僧に似たり、奉佛の應なる哉、人心保るときは脱し難し、  
空同子

十八、唐詩、李杜の外、孟浩然、王摩詰、大家と稱するに足る、王詩、豊穡にして華麗ならず、孟詩、却つて専心古澹にして悠遠深厚、自から寒儉枯瘠の病無し、儲光羲、孟の古ありて、而して深遠及ばず、岑參、王の綺あり、而して又華麗之を掩ふ、故に子美稱す、吾儕孟浩然、高人王右丞、而して儲岑に及ばず、以あるかな、畫堂詩話

十九、王摩詰、孟浩然、韋蘇州、片言隻字、皆俗に入らず、西齋周氏

二十、晁補之云ふ、右丞詩に妙、故に畫意餘あり、余謂ふ、右丞、畫に精し、故に詩態轉た工、鍾伯敬云ふあり、畫者、煙雲を臂中に養ふあり、此れは是れ性情、文章の助、劉士傑文致

二十一、右丞、遠樹帶行客、孤城當落暉、帶字、當字、極めて佳、畫中三昧を得る者にあらずんば、此の二字を下す能はず、青軒詩解

二十二、王右丞が五言、絶佳なるものあり、瓜圃、贈妻十一迪、納涼、濟上四賢詠、諸篇の如き、格調既に高くして、寄興復遠し、即ち古人詩中、亦多見する能はざるもの、今選詩者、俱に之を取らず、獨、西施詠の類を以て選に入る、此何の謂ひなるを知らず、四友齋叢說

二十三、山谷老人曰く、余、頃年、山に登り水に臨み、未だ嘗て王摩詰の詩、行到水窮處、坐看雲起時を讀まざるあらず、願ふに知る此の老の臂次定んで泉石膏肓の疾あるを、習溪漁叢書

二十四、右丞、終南別業の詩、一唱三嘆、窮むべからざるの妙あり、朝川、孟城坊、華子岡、茶菓

洪、辛夷埜等の詩の如き、五言四句に過ぎずと雖も、幽を窮め玄に入る、學者當に自から細參すべし、則ち之を得ん、瀟湘律韻

二十五、王摩詰が詩を讀み、其の散髮晚未髻、道書行尙把の句を愛す、因つて用つて韻と爲し、古風十首を賦す、放翁劍南詩集

二十六、崔塗が旅中の詩、漸與骨肉遠、轉于三童僕、親、詩話類は之を稱す、然れども、王維が鄭州の詩、他鄉絕二僮侶、孤客親三童僕、已に先づ之を道ふ、且王語渾含、崔に勝る、揚麗華詩品

二十七、王摩詰が燕子龕の詩、雄奇蒼鬱、李咸熙が筆を以て之を寫すにあらずんば、不可なり、芥子園畫傳

二十八、右丞が詩、山林に長ず、河明閭井間の一聯、詩人未だ有らざる所なり、牧童田犬の句、尤も雅淨、瀟湘律韻

二十九、右丞、漢江臨汎の詩、中の兩聯、皆景を言ふ、而して前聯尤も壯、孟杜岳陽の作に敵するに足る、瀟湘律韻

三十、王右丞の詩、江流天地外、山色有無中、是詩家の極俊の語、却つて畫三昧に入る、香州山人叢

三十一、朱叔重、嘗て曰ふ、王右丞の水田白鷺、夏木黃鸝の詩、即ち畫なり、李思訓は數年、吳道玄は一日、其の工夫學力到る所のもの、畫即ち詩なり、續翰理略

三十二、五言絕句、當に王右丞を以て絶唱と爲すべし、四友書畫說  
三十三、摩詰、朝川の詩、余深く之を愛す、毎に以て人に語る、輒ち余が意を解する者無し、

朱子語錄

三十四、朱文公曰く、律詩、王維、韋應物の輩の如き、自から蕭散の趣あり、今日の如きの、細碎卑冗、餘味無きに至らず、公又言ふ、余平生王摩詰の詩に漆固非傲吏、自缺經世具、偶寄一微官、婆娑數株樹と云ふを愛し、以て及ぶ可からずと爲す、擧げて以て人に語る、領解する者少なし、鶴林玉露

三十五、山下孤煙遠邨、天邊獨樹高原、右丞、畫道に工なるに非ずんば、此の語を得る能はず、米元暉、猶は謂ふ右丞の畫は刻畫の如しと、故に余米家山を以て、其の詩を寫す、畫師室圖筆

三十六、六言絕句、王摩詰の桃紅復含宿雨、及び王荆公の楊柳鳴鶯綠暗の二詩の如き、最も警絶と爲す、後繼者難し、王林詩話

三十七、桃紅復含宿雨、柳綠更帶春煙、花落家僮未掃、鶯啼山客猶眠、此の句を啜ふ毎に、人をし

て坐るに朝川春日の勝、此の老、其の間に傲睨閒適するを想はしむ、詩人王屏  
三十八、曾子固謂ふ、蘇明允の文、豊にして一言をも餘さず、約にして一辭をも失はず、春秋の立言と雖も、亦是の如きに過ぎず、樂して之を論すれば、惟明允以て此に當る可し、子固にあらすんば、亦形容此に至る能はざるなり、魯直、摩詰六言の詩を以て、方に其の法を得といふ、乃ち真に摩詰を

知る者、惟其能く之を知り、然る後、能く其の秘要を發明す、須らく咀嚼久しくして、始めて其の難きを信すべし、然らば則ち何ぞ獨り詩のみならんや、凡そ落筆、皆能く明允の如くにして、斯に與に文を論すべきなり、姑養集

三十九、王維云ふ、古の高き者は、許由、瓢を挂く、巢父、耳を洗ふと曰ふ、耳は聲を駐むるの地にあらず、聲は耳を染むるの跡にあらず、外を惡む者は内を垢す、物を病む者は自から戕ふ、此尙は曠士に至る能はず、豈道の門に入らんや、維の名理を談する此の如し、豈晉人に滅せんや、楊升菴文集

四十、余年十七八の時、摩詰が詩を讀み、最も熟す、後遂に之を置くもの幾んど六十年、今年七十

七、永晝無事、再び取りて之を讀む、舊師友を見るが如く、問間の久しきを恨むなり、嘉泰辛酉五月六日龜堂南窓書、陸放翁跋王右丞集

四十一、近體を論する者、必ず盛唐を稱す、王右丞の若き亦其の一なり、其の律絶句を爲る、五七

言を問ふ無く、皆莊重閒雅、渾然天成、古詩に至りては、句本冲澹にして興は則ち悠長、諸詞清婉流

麗、殆んど未だ多贅すべからず、楊伯謙、唐詩を選し、其の尤を論次し、載せて正音に在り、而して晦翁先生、楚辭後語を考定し、亦其の山中人等の作を存す、良に以あり、詩凡そ六卷、並びに斐迪諸人の詩を附し、共に若干卷、劉須溪、嘗て之を校す、宋元の舊刻、歲遠くして存せず、近時蜀に刻す、字畫頗る外謬脱落、變、公暇、特に批閱を加へ、粗精正を爲す、遂に條資の餘を出し、小階に



善き者に命じて之を書せしめ、鐘人翻刻本の如くし、用つて詩壇探覽の便を裨く、廣信呂慶王右丞集序  
 四十二、高棟、唐詩品彙を選し、五古七古、王維を以て名家と爲し、五律七律五排五絶、王維を以て  
 正宗と爲し、七絶、王維を以て羽翼と爲す、其の五古に云ふ、詩は唐より盛んなるは莫く、盛唐  
 より備はるは莫し、論者李杜二家を推して尤と爲す、其の間又名家とす可き者、十數公、子美が贊詠  
 する所の者王維、孟浩然、友と善き所の者、高適、岑參、乾元以後劉(錡)錡(起)頭を按ぎ、草(應)  
 柳(厚)前に光くが如きに至りては、人各の其の長する所に鳴る、今、襄陽の清雅、右丞の精緻、備  
 光藝の真率、王江寧の聲俊、高適夫の氣骨、岑嘉州の奇逸、李頎の冲秀、常建の超凡、劉隨州の閑曠、  
 饒考功の清曠、韋の靜にして深、柳の温にして密なるを觀るに、此皆宇宙山川英靈の間氣、時に萃ま  
 り、人に鍾まるものなり、七古に云ふ、盛唐、七言古調に工なる者多し、李杜より下、論者高(適)  
 岑(參)王(維)李(颀)崔(顒)數家を推して勝れりと爲す、竊に嘗て之を評す、若し夫れ、氣勢を張皇  
 し、始終を踈頓し、古今を綜覈し、其の文辭を博大にするは、李杜尙し、沈鬱頓挫、抑揚悲壯、法度森  
 嚴、神情俱詣、一味妙悟、而して佳句飄ち來りて、遠く常情の外に出づるに至りては、之の數字は、  
 李杜と並び驅つて先を爭ふ、五律に云ふ、盛唐律句の妙なる者、李翰林、氣象雄逸、孟襄陽、興致  
 清遠、王右丞、詞意雅秀、岑嘉州、造語奇俊、高常侍、骨格渾厚、七律に云ふ、盛唐の作者、多か  
 らずと雖も、而も聲調最も遠く、品格最も高きは、賈至、王維、岑參、早朝偕和の作、當時各の其の

妙を極む、王の衆作、尤も諸人に勝る、五言排律に云ふ、開元後、作者の盛んなる、聲律の備はる、  
 獨り、王右丞、李翰林を多と爲す、而して孟襄陽、高渤海、實に相與に並び鳴る、五絶に云ふ、開元  
 後、李白、王維、尤も諸人に勝る、唐人偕和の詩、多く是れ感激、各の其の妙に臻る、早朝大明宮の  
 如き、杜甫、旌旗日暖龍蛇動、宮殿風微燕雀高、王維、九天闔闔開宮殿、萬國衣冠拜冕旒、岑參、花迎  
 劍佩星初落、柳拂旌旗露未乾、登慈恩寺塔の詩、杜甫、高標跨蒼穹、烈風無時休、俯視同一氣、焉  
 能辨皇州、高適、秋風昨夜至、秦塞多清曠、千里何茫茫、五陵鬱相望、岑參、秋色從西來、蒼然滿  
 關中、五陵北原上、萬古青濛濛、此の類甚だ多く、是皆雄渾悲壯、以て百代を凌跨するに足る、唐詩品彙  
 四十三、李林甫、瑤巖應制の詩、雲收二華出、天轉五星來、十月農初罷、三驅禮後開、兩聯皆數目  
 の字を用ふ、法と爲すべからず、王摩詰、送邱爲の詩、五湖三畝宅、萬里一歸人、此の聯、數目の字  
 を疊用す、病と爲さざるなり、詩家直說

四十四、絕句、王摩詰、廣武城邊逢暮春、汶陽歸客淚沾巾、落花寂寂啼山鳥、楊柳青青渡水人、  
 韋應物、雨中禁火空齋冷、江上流鶯獨坐聽、把酒看花想諸弟、杜陵寒食草青青、皆風人の絶響なり、

詩家直說

四十五、詩人の詩、字句苟くもせざるは、王維諸人は是れなり、才子の詩、句字章法、聞知する間き  
 が若きは、李白諸人は是れなり、困學の詩、格調詞意、匠心措置す、杜甫諸人は是れなり、瓊雅



四十六、詩は意を貴ぶ、意は遠を貴んで近を貴ばず、澹を貴んで濃を貴ばず、杜甫、鈞麓宿驚起、丸藥流鶯轉、李白、桃花流水窅然去、別有天地非人間、摩詰、反景入深林、復照青苔上、皆澹にして濃、近にして遠、知者が爲めに道ふべきなり、李杜詩評

四十七、律詩、發端に工なるを貴ぶ、承接二句、尤も勢を得るを貴ぶ、摩詰、萬壑樹參天、千山響社鶻、下即ち云ふ、山中一夜雨、樹杪百重泉、此れ石を萬仞に轉するの手なり、分甘餘話

四十八、玄(兼)肅(兼)以下の詩人、其の數什百、盛唐を語る者、唯高(適)王(維)岑(參)孟(浩然)四家を最と爲す、四家を語る者、唯右丞を最と爲す、其の詩を爲るや、上は騷雅に薄り、下は漢魏を括る、羣籍を博綜し、百氏を漁獵す、又佛理に長ず、故に其の摘藻奇逸、措思冲曠、前案に馳邁し、名儒に雄視す、凡そ今の長老摺紳の屬、工に詩を爲る者、恆に嗟賞して之を雅崇す、殆んど耳食と異なる無し、

顧起經、唐王右丞詩論小引

### 王右丞本傳

王維字は摩詰、太原祁の人、父處廉、汾州司馬に終ふ、家を濡に徒す、遂に河東の人と爲る、維、開元九年の進士、擢第、母崔氏に事へて、孝を以て聞ゆ、弟縉と俱に俊才あり、博學多藝、亦名を著うす、閨門友悌、多士之を推す、右拾遺、監察御史、左補闕、庫部郎中を歴、母の喪に居り、柴毀骨立、殆んど勝へず、喪服闋り、吏部郎中を拜し、天寶の末、給事中と爲る、祿山兩都を陥る、玄宗出幸、維扈從及ばず、賊の得る所と爲る、維、藥を服し病を取り、僞つて瘡病と稱す、祿山素之を憐み、人を遣り、迎へて洛陽に置き、普施寺に拘す、迫るに僞署を以てす、祿山其の徒を凝碧宮に宴す、其の工、皆梨園の弟子、教坊の工人、維、之を聞きて悲惻し、潛に詩を爲りて曰く、萬戶心を傷ましめ野煙を生ず、百官何れの日か再び天に朝せん、秋槐花は落つ空宮の裏、凝碧池頭管絃を奏す、賊平らく、賊に陥る官、三等定罪す、維、凝碧池の詩、行在に聞ゆるを以て、肅宗之を嘉す、會ま縉、己が刑部侍郎を削りて以て兄が罪を贖はんと請ふ、特に之を宥し、太子中允を責授す、乾元中、太子中庶子、中書舍人に遷る、復給事中に拜し、尚書右丞に轉す、維、詩名を以て、開元天寶間に盛ん、昆仲、兩都に宦游す、凡そ諸王、駙馬、豪右、貴勢の門、席を拂うて之を迎へざるは無し、寧王薛王、之を待すること

師友の如し、維尤も五言の詩に長じ、書畫、特に其の妙に樂る、筆蹤指思、造化に參し、而して創意  
 經圖、即ち缺くる所あり、山水平遠、雲峯五色の如き、絶迹天機、繪者の及ぶ所に非ざるなり、人奏樂  
 圖を得るあり、其の名を知らず、維之を視て曰く覺裳第三疊第一拍なり、好事の者、樂工を集め、之  
 を按ず、一も差ふ無し、咸其の精思に服す、維兄弟俱に奉佛、居常蔬食、葷血を茹はず、晚年長齋  
 文綵を衣す、宋之間が藍田別墅輞口に在るを得、輞水舍下を周り、別に竹洲花塢に漲る、道友表迪と、  
 舟を浮べて往來、彈琴賦詩、嘯詠終日、嘗て其の田園爲る所の詩を聚め、輞川集と號す、京師に在るの  
 日、十數の名僧を飯し、玄譚を以て樂と爲す、齋中有る所無し、唯茶鐘藥臼經案繩床のみ、退朝の  
 後、香を焚いて獨坐、禪誦を以て事と爲す、妻亡して再娶せず、三十年一室に孤居、塵累を屏絶す、  
 乾元二年七月卒す、臨終の際、縉鳳翔に在るを以て、忽ち筆を索め、縉に別るる書を作る、又平生  
 親故の與に、別書數幅を作る、多く朋友に奉佛修心の旨を教誨し、筆を捨てて絶妙、代宗の時、縉宰  
 相と爲る、代宗文を好む、常て縉に謂つて曰く、卿の伯氏、天寶中、詩名代に冠たり、朕嘗て諸王の座  
 に於て、其の樂章を聞く、今多少の文集あらば、卿進來すべし、縉曰く臣が兄、開元中の詩、百十  
 餘篇、天寶事後、十に一を存せず、比中外親故の間に於て、相與に編綴し、都て四百餘篇を得、翌日  
 之を上る、帝優詔褒賞す、(劉昫)

王維、字は摩詰、九歲、屬辭を知る、弟の縉と名を齊しくす、資孝友なり、開元の初、進士に擢ん

でられ、大樂丞に調せらる、坐累して、濟州司倉參軍と爲る、張九齡、政を執る、右拾遺に擢んで  
 らる、監察御史を歴、母の喪に、毀幾んど生きざらんとす、服除き、給事中に累遷す、安祿山反す、  
 玄宗西狩、維賊の爲めに得らる、藥を以て下痢し、歸りて瘖と爲る、祿山素其の才を知る、迎へて洛  
 陽に置く、迫りて給事中と爲す、祿山大に凝碧池に宴し、悉く梨園の諸工を召して樂を合はす、諸工  
 皆泣く、維聞きて悲み甚し、詩を賦し悼痛す、賊平らざり、皆獄に下る、或詩を以て行在に聞す、時  
 に縉位已に顯なり、官を削り維が罪を贖はんと請ふ、肅宗亦自から之を憐れみ、下して太子中允に遷  
 す、久しうして中庶子に遷る、三遷して尙書右丞と爲る、縉蜀州刺史と爲り未だ還らず、維自から  
 表す、己五短あり、縉五長あり、臣省月に在り、縉は遠方、願ふ縉をして京師に還らしめんことを、  
 議者之を罪とせず、久しうして縉を召し左散騎常侍と爲す、上元の初卒す、年六十一、疾甚し、  
 縉は鳳翔に在り、書を作りて別を敘し、又親故に書數幅を遺る、筆を停めて化す、秘書監を贈らる、  
 維、草隸に工に盡に善し、名、開元天寶の間に盛んなり、豪英貴人、左を慮しくして以て迎ふ、寧薛  
 の諸王、待すること師友の若し、畫思神に入り、山水平遠、雲勢石色に至りては、繪工以て天機到る  
 所と爲す、學者及ばざるなり、客樂圖を示す者あり、題讀無し、維徐ろに云ふ、此覺裳第三疊最初拍  
 なり、客未だ然りとせず、工を引いて曲を按じ乃ち信す、兄弟皆篤志佛を奉じ、食は葷せず、衣は文  
 綵せず、別墅輞川に在り、奇勝、華子岡、欽湖、竹里館、柳浪、茱萸洲、辛夷塢あり、裴迪と其の中

に遊び、詩を賦して相酬い、以て樂しむ、妻を喪うて娶らず、孤居三十年、母亡す、朝川の第を表して寺と爲し、終に其の西に葬むる、寶應中、代宗、紹に語りて曰く、朕嘗て諸王の座に、維が樂章を聞く、今傳ふる幾何ぞ、中人王承華を遣り往いて取らしむ、紹數十百篇を哀集して之を上る、唐書

王右丞年譜

皇朝紀年	李唐紀年	年齢
文武大寶元年 辛丑	中宗嗣聖十八年	一歲
大寶二年 壬寅	嗣聖十九年	二歲
大寶三年 癸卯	嗣聖二十年	三歲
慶雲元年 甲辰	嗣聖二十一年	四歲
慶雲二年 乙巳	神龍元年	五歲
慶雲三年 丙午	神龍二年	六歲
慶雲四年 丁未	景龍元年	七歲
天聖和銅元年 戊申	景龍二年	八歲
和銅二年 己酉	景龍三年	九歲
和銅三年 庚戌	睿宗景雲元年	十歲
和銅四年 辛亥	景雲二年	十一歲

王右丞年譜

和銅五年壬子	太極元年	十二歲	
和銅六年癸丑	宗元元年	十三歲	
和銅七年甲寅	開元二年	十四歲	題雲母障子詩 過秦王墓詩
元正靈龜元年乙卯	開元三年	十五歲	洛陽女兒行
靈龜二年丙辰	開元四年	十六歲	九月九日憶山東兄弟詩
養老元年丁巳	開元五年	十七歲	哭祖六自虛詩
養老二年戊午	開元六年	十八歲	清如玉潔水詩、桃源行、李陵詩、赴京兆試舉解頭 息夫人詩
養老三年己未	開元七年	十九歲	以進士擢第調大樂丞後坐累請濟州司倉參軍、燕支行、 魚山神女祠詩
養老四年庚申	開元八年	二十歲	
養老五年辛酉	開元九年	二十一歲	
養老六年壬戌	開元十年	二十二歲	
養老七年癸亥	開元十一年	二十三歲	
聖武神龜元年甲子	開元十二年	二十四歲	
神龜二年乙丑	開元十三年	二十五歲	
神龜三年丙寅	開元十四年	二十六歲	

神龜四年丁卯	開元十五年	二十七歲	
神龜五年戊辰	開元十六年	二十八歲	
天平元年己巳	開元十七年	二十九歲	
天平二年庚午	開元十八年	三十歲	
天平三年辛未	開元十九年	三十一歲	
天平四年壬申	開元二十年	三十二歲	
天平五年癸酉	開元二十一年	三十三歲	
天平六年甲戌	開元二十二年	三十四歲	
天平七年乙亥	開元二十三年	三十五歲	
天平八年丙子	開元二十四年	三十六歲	
天平九年丁丑	開元二十五年	三十七歲	
天平十年戊寅	開元二十六年	三十八歲	
天平十一年己卯	開元二十七年	三十九歲	
天平十二年庚辰	開元二十八年	四十歲	
天平十三年辛巳	開元二十九年	四十一歲	

十二月起張九齡為中書侍郎同中書門下平章事，是歲關  
中久雨將稼京師饑  
張九齡執政，擢右拾遺，上張令公詩，京兆尹張公權政碑  
獻給與公詩  
張九齡補知政事，是年以韋濟為尚書戶部侍郎，同盧怡  
選韋給事東山別業二十韻詩  
暮春大師左右丞相贈公子季氏道遊谷燕集序，和尹謙讓  
史館山池詩 讀佛文 雙黃鸞送別

張九齡卒、孟浩然卒、吳孟浩然詩

三月三日曲江侍燕應制詩、春日門下省早朝詩

天平十四年壬午	天寶元年	四十二歲
天平十五年癸未	天寶二年	四十三歲
天平十六年甲申	天寶三年	四十四歲
天平十七年乙酉	天寶四年	四十五歲
天平十八年丙戌	天寶五年	四十六歲
天平十九年丁亥	天寶六年	四十七歲
天平二十年戊子	天寶七年	四十八歲
孝謙天平勝寶元年己丑	天寶八年	四十九歲
天平勝寶二年庚寅	天寶九年	五十歲
天平勝寶三年辛卯	天寶十年	五十一歲
天平勝寶四年壬辰	天寶十一年	五十二歲
天平勝寶五年癸巳	天寶十二年	五十三歲
天平勝寶六年甲午	天寶十三年	五十四歲
天平勝寶七年乙未	天寶十四年	五十五歲
天平勝寶八年丙申	至德元年	五十六歲

陳希烈為左丞相，魏郡太守河北採訪處置使百公德放碑  
五月羅區上章號曰開元天寶聖文神武應運皇帝，奉和聖  
製天長節賜宰臣歌應制詩，奉和聖製登降聖觀興幸日同  
望應制詩  
故太子太師徐公饒歌，送鄭書島監選日本國序并詩，黃  
元元皇帝見風容表

安祿山反陷河北諸郡十二月祿山陷東京，是時拘于蕃提  
寺有口號示衆詩，六月祿山兵陷潼關玄宗出幸蜀  
正月祿山僧獻于東京，六月祿山兵陷潼關玄宗出幸蜀  
山兵入長安，八月甲子太子即位子寶武稱肅宗改元號至  
德元年

天平寶字元年丁酉	至德二年	五十七歲
天平寶字二年戊戌	乾元元年	五十八歲
淳仁天平寶字三年癸亥	乾元二年	五十九歲
天平寶字四年庚子	上元元年	六十歲
天平寶字五年辛丑	上元二年	六十一歲

正月安祿稱殺祿山，郭子儀復西京，夏復東京，張巡許  
遠戰死  
貴授太子中允遷太子中庶子中書舍人復拜給事中，和買  
舍人早朝大明宮之作

轉尚書右丞，為幹和尚進注仁王經表

悲露太子饒歌

送邢桂州詩，謝弟嶠新授左散騎常侍狀，七月辛年六十

王右丞集卷一

釋清潭譯注

古詩 十首

奉和聖製天長節賜宰臣歌應制

聖製天長節宰臣に賜ふ歌に奉和す應制

太陽升兮照萬方

太陽たいやう升のぼりぬ萬方ばんぽうを照す

開闔闔兮臨玉堂

闔闔かいかん開ひらきぬ玉堂ぎよどうに臨む

儼冕旒兮垂衣裳

冕旒べんりゆう儼げんたり衣裳いしやうを垂る

金天淨兮麗三光

金天きんてん淨きよみぬ三光さんこう麗うるかなり

彤庭曙兮延八荒

彤庭とうてい曙あけけぬ八荒はつぱうに延ぶ

德合天兮禮神遍

德とくは天てんに合あひ禮らいは神かみに遍あまし

靈芝生兮慶雲見

靈芝れいし生はえぬ慶雲けいうん見みはる

【注】奉和は玄宗が示せる詩

意を讀和する。聖製は天子が作る詩賦文章をいふ。宰臣は百官と同じ。應制は天子の命にて詩を作る。太陽は日輪、人君の象、闔闔は天中の門、轉じて、人君の在る宮廷の正門を指す。玉堂は天子の在る殿上、冕旒は冕は冠、旒は冠の前後に垂るるもの、天子の冠は十二旒、諸侯は九、上大夫は七、下大夫は五旒、今は玄



唐堯后兮稷禹臣、唐堯の后や稷禹の臣、

匪宇宙兮華胥人、宇宙を匪りの華胥の人、

盡九服兮皆四鄰、九服を盡くしの皆四鄰、

乾降瑞兮坤獻珍、乾は瑞を降しぬ坤は珍を獻す、

方、堯の字を用ふるは純造に及べばなり、德合天兮禮神通、玄宗の德は天と合一なり、玄宗の禮は神と禮通す、靈芝は瑞舞、不祥には生ず、靈芝は邈代に見はるる靈氣、唐堯は古の聖天子、堯の姓は陶唐氏、后は君なり、稷禹は稷と禹と二人、稷は堯帝の臣、禹は舜帝の臣、舜の姓は有虞氏、禹の字普通契に作る、宇宙は天地なり、華胥は無爲にして治まる、國の名、九服は朝服、甸服、男服、采服、衛服、蠻服、夷服、鎮服、藩服なり、王畿即ち天子の居城に接近せる千里以内を中央として、而して此の九服を治む、四鄰、九服の邊きを治む、靈は四鄰の近きを治むるが如きなり、乾は天、靈芝の生えたるは地の珍なり、坤は地、靈芝生えたるは地の珍なり、

【題義】開元十七年秋八月五日は玄宗が生誕の日なり、帝大に酒を華萼樓下に置き、以て羣臣と燕飲し、玄宗八韻の詩先成り、之を羣臣に示す、羣臣各自に和詩を獻す、雜の獻するもの即ち是の詩なり、玄宗は年四十八、右丞は年三十二、此の節を始めは千秋節と稱し、後天長節と改む、  
【大意】玄宗皇帝の德は宛かも太陽が萬方を照すが如く、今正に天門を開いて玉堂に臨御す、而して冕冠も衣裳も儼然として秋天の澄淨なると、冠冕に彫れる三光とが共に其の麗色を争ふ、時に宮庭が第一に曙色を承け、次第次第に八方に其の光彩が及ぶ、良に帝の德は天徳と合ひ、帝の禮は神禮と

遠く、而して地には靈芝を生じ、天には靈雲見はる、帝徳は古の名君に比すべく、臣節は古の名臣に比すべし、而して一般の民は樂國の人にして、憂は無く、中國以外の九夷も皆服して四鄰の如く、乾坤共に祥瑞佳珍を獻する、

【餘論】天子の詩に和する、大底排律を以て常法と爲すものの如きも、是の篇古體を以てす、方堂靈光荒七韻の通見去聲十七、巨人鄭珍の十一真と三度換韻して成る、而して玄宗の原作を見るに五言十六句の排律と爲す、排律なれば七關一韻なること勿論なり、乃ち知る盛唐大家の法、唯意を和するのみ、體と韻とは和する要なきことを、此の詩の如き、句句今の字を拵み、全く楚賦の體なり、楚賦の體を以て唐以後に起りし排律を和す、昭和今日の詩人、此の詩聖に對し、其れ何を言はんと欲するか、

登樓歌

聊上君兮高樓、聊か君が高樓に上れば、

飛薨鱗次兮在下、飛薨鱗次して下に在り、

俯十二兮通衢、十二の通衢に俯し、

綠槐參差兮車馬、綠槐參差として車馬あり、

登樓の歌

聊か君が高樓に上れば、

飛薨鱗次して下に在り、

十二の通衢に俯し、

綠槐參差として車馬あり、

【注】聊上君兮高樓は王榮が登三樓以四冠兮、聊暇日以飲憂の句より來る、聊は姑且と同義、樓は「オカドノ」、二階以上の建物、故に登るなり、飛薨鱗次、薨は「イラカシ」ムナガハラ、其の聲が魚鱗の連文

卻瞻兮龍首。

前眺兮宜春。

王畿鬱兮千里。

山河壯兮咸秦。

舍人下兮青宮。

據胡床兮書空。

執戟疲於下位。

老夫好隱兮牆東。

亦幸有張伯英草。

聖兮。

龍騰虬躍。

擢長雲兮振迴風。

琥珀酒兮彫胡飯。

卻つて龍首を瞻、

前に宜春を眺る、

王畿千里に鬱とし、

山河咸秦に壯なり、

舍人青宮を下り、

胡床に據つて空に書す、

執戟下位に疲れ、

老夫牆東に好隱す、

亦幸に張伯英が草聖あり、

龍騰り虬躍る、

長雲を擢ひ迴風を振らす、

琥珀の酒や彫胡の飯、

して飛ぶが如く、萬戶標比してある  
なり、十二号通駕、通駕は「トホリ  
ミチ」京城の道、區畫を十二に分つ、  
号は詩を讀むとき上の字音を長く引  
く符調なり、獨立の意義を有せざる  
字なり、雙辭、尤も多く此の字を見  
る、龍機參差兮車馬、龍機（エンジ  
ユ）が長短均しからず、其の樹間に  
出没する車馬を見る、却は却の正字、  
龍首は山の名、樓前に直面せる山、  
（樓は長安に在り）山の長さ六十餘  
里、頭は渭水に就し、尾は樊川に達  
す、高さ二十丈、前眺兮宜春、宜春は  
三あり、一は宮、一は苑、一は觀、  
苑は宮に接し、觀は遠し、今眺むる  
は宮と苑となり、王畿鬱兮千里、王  
城地方千里の間を王畿と曰ふ、鬱は  
盛なり、咸秦、咸陽宮は秦の始皇の居  
城、長安は山河壯なるを以て始皇が

君不御兮日將晚。

秋風兮吹衣。

夕鳥兮爭返。

孤砧發兮東城。

林薄暮兮蟬聲遠。

時不可兮再得。

君何爲兮偃蹇。

君御せずんば日將に晚れんとす、

秋風は衣を吹き、

夕鳥は争ひ返る、

孤砧東城に發し、

林薄暮れて蟬聲遠し、

時は再得すべからず、

君何爲ぞ偃蹇する、

書し、唯唯怪事の四字を作るのみ、執戟疲於下位、古代侍郎の職を執戟と言ふ、漢の東方朔の文に官不遇、侍郎位不遇、執戟とあり、魏の曹植が文に、揚子雲先朝執戟之臣耳とあり、奔命の爲め致るるなり、老夫好隱兮牆東、後漢書逸民傳第七十三に王君公、獨不仕、偷牛自隱、時人爲之諺曰避世猶東、王君公とあり、徐母と李子雲の二人は官を辭め、都を去りしも、王は官（侍郎の官）は罷めたるも都を去らず、牛賣買の伴買人と爲りて本の身分を離せしなり、明の顧可久は舍人以下二十五字は右丞が自敘傳なりと言ふが、余は然らずと言ふ、單に此の類の人も有りしとの意ならん、亦幸有張伯英草聖、後漢書列傳第五十五張奐傳に張芝字伯英は奐が長子、文は儒宗と爲り、武は將表と爲る、尤も草書を好み、其の書、世の寶とする所、草仲將、之を草聖と謂ふ、樓中に張が筆蹟を藏するなり、龍騰虬躍、擢長雲兮振迴風、其の筆勢の強健、臂ふるに龍虬長雲迴風を以てするなり、擢は振ふなり、振は戻なり、琥珀酒は酒の色、琥珀の如く美なり、彫胡飯、菖の實、之を彫胡飯、雕胡米とも謂ふ、不御は不食と同じ、飲食の口に入るるを御と曰ふ、君早く食はずんば、日西に沈まんとなり、秋風、夕鳥、西風は寒く、歸鳥は急なるを謂ふ、孤砧、砧を打つの聲、東城の方より

發り、林薄、叢木を林と曰ひ、草木交錯するを薄と曰ふ、時不可分得は全く「楚辭（九歌中の湘君）の句を取る、君何爲兮傷寒、傷寒は多義あり、傲慢の義、高聲の義、屈曲の義、楚辭の義、價倒の義、價倒は低價と同じ、君は落ち著きて居らず、何故に價倒んで居るぞとなり、

【題義】後漢末の王粲が始めて登樓賦（三百三十一）を作る、其の作意は天下の擾亂に會ひ、難を荆州に避け、一日江陵の城樓に登り、因つて故郷の山陽に歸らんことを懐ひ、賦を作り、其の進退危懼の情を述ぶ、右丞が此の詩は乃ち王粲に倣うて作る、但し彼は意故郷に在り、此は意故郷に在らざるなり、【大意】聊か君が高樓に登りて賦れば、飛甍は魚鱗の如く連次して皆下に在り、十二の通衢を俯視すれば、綠槐は長短參差として、其の蔭を車馬が來往す、一面に龍首を瞻、一面に宜春を眺むれば、王畿は千里に鬱たり、山河は咸秦に壯たり、舍人は青宮より退出し來るや、胡床に據つて字を空に書す、執戟の者は下位の職務に疲れを息む、老夫は輪東に好隠して、張伯英が草書の粉本を習ふ、乃ち書きし所の字は龍の騰るが如く、虬の躍るが如く、又雲の長く擺ふが如く、風の廻りて振るが如し、室には琥珀の酒あり、彫胡の飯あり、君よ早く來りて酒を飲み、飯を喫し玉へ、然らずんば、日も西山に傾き、秋風は衣を吹いて寒く、夕鳥は争ひ返り、砧聲は東城より發し、林影も暗くならんとして、蟬聲も遠く去る、君よ早く來れよ、然らずんば時は再得すべからず、君は何ぞ其れ假蹇躊躇するや、

【餘論】此の篇は、四度換韻して成る、題目は王粲より來れども、句法は全く楚辭より來る、調の清く格の高きは、王右丞以外に多得すべからず、

雙黃鵠歌送別

時爲節度判官、在涼州作、雙黃鵠の歌、別を送る

天路來兮雙黃鵠、  
雲上飛兮水上宿、  
撫翼和鳴整羽族、  
不得已忽分飛、  
家在玉京朝紫微、  
主人臨水送將歸、  
悲笳嘹唳垂舞衣、  
賓欲散兮復相依、  
幾往返兮極浦、

天路より來る雙黃鵠、  
雲上に飛びぬ水上に宿す、  
翼を撫して和鳴し羽族を整ふ、  
已むことを得ず忽ち分飛す、  
家は玉京に在りて紫微に朝す、  
主人水に臨んで將に歸らんとするを送る、  
悲歌嘹唳舞衣を垂る、  
賓散せんと欲して復相依る、  
幾たびか極浦に往返し、

古詩 雙黃鵠歌送別

【注釋】鵠は和名「クガケシ」水鳥、形大にして色は白と黄と二種あり、黃鵠は仙人の乗る所、或は鶴、或は鶴皆同じ、善く高く湖海を翔り、江漢の間に之有り、天路來は一面は廣大なる處より來るの意、一面は玉京より此の涼州へ來るの意、雲上飛兮水上宿、雲は天路の字を承け、水は黃鵠の字を承く、撫は和語「ナアル」「サスル」、黃鵠が互に翼を撫り、以て和鳴し、以て羽族を整頓する、不得已忽分飛、羽族が整頓して一處に長く樂しむを得ず、互に分飛するに

尚徘徊兮落暉

尚落暉に徘徊す

岸上火兮相迎

岸上に火あり相迎へ

將夜入兮邊城

將に夜ならんとし邊城に入る

鞍馬歸兮佳人散

鞍馬歸りぬ佳人散す

悵離憂兮獨含情

悵として離憂し獨り情を含む

作る樂器、其の聲悲壯なれば、後世軍樂器と爲す、殊に北地に適し、南地には適せず、嗚咽は多く鳥聲を言ふ、今は猶聲を形容す、垂舞衣、送別宴に歌妓が侍したるなり、實は送らるる者は勿論なるが、宴席の主人以外の人は皆實なり、欲散、相依、往返兮浦浦、別るるに忍びず、是を以て水涯を幾度も徘徊するを謂ふ、落暉は字の如く夕日なり、賓客の家人等、燈火を持ち來り各の其の主人を迎ふ、既にして各の涼州の邊城に歸る、送らるる人の鞍馬も亦歸り、舞衣を棄れたる佳人も亦散す、而して右丞は悵然として離憂し、獨り其の情を含むとなり、離憂の離は「ハナル」にあらす「カカル」なり、

【題義】開元二十五年、右丞年三十九、官、節度判官と爲り、涼州の崔公の幕中に在りし時の作、案するに崔公の幕賓たりし二人の者が京城に歸るに當り、雙黃鶴に託して之を送るなり、

【大意】此に一雙の黃鶴あり、悠かに天路の遠きより來りて、其の飛ぶや雲上、其の宿するや水上、而かも羽族の長として、一般羽族を戒しめ、相争はず相和せしむ、然るに已むを得ざるの事起りて、今日分飛せざるを得ず、其の歸る家は玉京にして朝する宮は紫微なり、是に於ては主人は水樓に臨ん

て送別の燕を設け、送別の悲筋を吹き、送別の舞衣を垂る、而かも送別に忍びざるが故に、衆賓は散せんと欲するも散する能はず、往きつ戻りつ落暉の下に徘徊す、已にして岸上火を點じて相迎ふる者あり、夜に入つて漸く邊城に入る、是の時鶴も飛び去り、佳人も散す、悵として猶ほ離別を痛む情を含む者一人と爲る、

【餘論】此の篇、三度換韻して成る、楚辭の法を學ぶと雖も、別に右丞一家の新創を作す、讀むこと久しくして益す其の深きを覺ゆ、顧可久評して曰ふ、暢洽老勁と、余之に清婉高華の四字を加へんと欲す、

贈徐中書望終南山歌

徐中書に贈る、終南山を望むの歌

晚下兮紫微

晚に紫微を下り

悵塵事兮多違

塵事の多く違ふことを悵む

駐馬兮雙樹

馬を雙樹に駐め

望青山兮不歸

青山を望んで歸らず

しを以て、世に王右丞と稱す、晚は字の如く暈暈する時、紫微は即ち中書省なり、中書省を紫微省とも言ふ、塵事は人事なり、世事

至る、家は送らるる人の家、玉京は山の名、紫微は宮の名、共に仙臺の住する處、今以て長安を玉京に譬へ、宮城を紫微に譬ふ、主人は此の送別會の主となる者、或は右丞自身を謂ふ、臨水送歸は全く楚辭「九辨」の語を取る、悲結、始は蘆葉を捲きて

【注解】徐は姓、中書は官名、魏晉以來、中書省なる官署あり、其の長官を中書令と曰ふ、其の下に中書監、中書舍人あり、而して長官の補翼に、左丞と右丞とあり、宮中の奏事を分擔して執行す、雖は右丞なり

なり、多遊は龍窟が多きを恨むなり、寒事に就いても恨むこと多しとの意も含むならん、駐馬分雙樹、省門外に二本の樹が雙立する、其の間に馬を駐め、青山即ち終南山を望み、中に歸らんと欲する念あるも、雨かも不歸、歸る能はざるなり、終南山、一名太乙山、一名中南山、長安城より南方に位するを以て、終南山の名多く用ひらる、東は驪山と太華山に接し、西は太白山に連なり、隴山に至り、南は楚塞に連なり、而して東は諸山に連屬す、周廻數百里、名けて福地と曰ふ、

【題義】徐中書と相伴うて宮中を退出して來る、其の途中終南山を望み、感想を敘述したるなり、  
【大意】晩暮に臨み紫微宮を退出して來り、フト塵事の違多きことを憶ひ出し之を恨む、是の故に暫らく馬を雙樹の下に駐め、青山即ち南山の青きを望む、望むと雖も、直ちに歸隱せんとの意を起さざるなり、

【餘論】明の高様の「唐詩品彙」(卷十)に此の詩を載せ、望終南山贈徐中書とせり、南山を主とし、徐中書は客なり、明の顧可久、清の趙松谷は共に今の題に作る、顧が評に曰く高古、又曰く若曰欲歸、則意淺氣短矣、是れ眞に右丞の意を得たり、又我が意を獲たり、

送友人歸山歌 二首

友人の山に歸るを送るの歌 二首

山寂寂兮無人、  
又蒼蒼兮多木、

【注解】寂寂は靜の貌、普通の詩人「セキセキ」の音、佛典に關する場合は必ず「シナカワシナカ」の音韻と

羣龍兮滿朝、

羣龍朝に滿つ、

君何爲兮空谷、

君何爲れぞ空谷に、

文寡和兮思深、

文和寡うして思深く、

道難知兮行獨、

道知り難くして行くこと獨り、

悅石上兮流泉、

石上の流泉と、

與松門兮艸屋、

松門の艸屋とを悦ぶ、

入雲中兮養鷄、

雲中に入りて鷄を養ひ、

上山頭兮抱犢、

山頭に上りて犢を抱く、

神與棗兮如瓜、

神棗を與へて瓜の如く、

虎賣杏兮收穀、

虎杏を賣りて穀を收む、

愧不才兮妨賢、

不才の賢を妨ぐることを愧ぢ、

嫌既老兮貪祿、

既に老いて祿を貪ることを嫌ふ、

誓解印兮相從、

誓つて印を解きて相從はん、

す、混同する勿れ、蒼蒼は單に樹木の多きを言ふにあらず、老木の大きな蒼蒼を言ふなり、蒼蒼と混同する勿れ、羣龍は賢臣の多きを謂ふ、滿朝、内閣や宮内省には賢臣が充滿して居るなり、君は友人を指す、空谷は滿朝と反對、寂寂と照映す、ナセ賑かなる處を去つて、寂しき處に入るや、寂處は眞の道な味ひ得ればなり、羣和、俗文は和する者多し、雅文は和する者寡し、(宋玉對、楚王問)思深、思の深きもの和多し、思の深きもの和多するもの無し、道難知兮行獨、山中の道、知り難し、案内する者無し、故に行獨なり、文の道も此の中に含むと知るべし、石上兮流泉、松門兮艸屋、俗人の味ひ得るものにあらず、唯高士の味ひ得るの境、兼蕭、列仙傳(漢劉向撰)に祝融君は浴人なり、尸解



何詹尹兮可卜。何ぞ詹尹に卜す可けん、

北山の下に居り、鐘を養ふこと百餘年、鐘千餘頭あり、皆名字を立つ、暮

に樹上に棲ましめ、晝之を放散す、引かんと欲すれば名を呼ぶ、即ち聲に應じて至る、山中の人、物と我と一體と爲るの意、抱懷、抱は抱持又は抱養、懷は兒牛、古代遊獵者あり、一懷を山上に抱養して養種す、後人此の山を抱懷山と曰ふ、山は直隸省獲鹿縣の西に在り、現に抱懷福地の四字を刺せし碑ありと、神與果兮如瓜、果は「ナツメ」、藥用と爲る果樹、上古に仙人安期生あり、其の食ふ所の菓は巨大にして瓜の如し、虎賁兮收穀、上古に董率なる人あり、仙術あり、人の爲め病を治す、愈ゆる者をして香五株を致しむ、數年にして十萬餘株を得、鬱然として林を成す、而して香を買はんと欲する者、贈するに金を以てせず、穀を以てす、穀を置くこと少く、香を取るに多き者は、虎咆びて之を逐ふ、槐不才兮幼賢、朝廷に在つて在官久しきは、後賢の進路を妨ぐる者なり、我は不才の身之を愧づとなり、後賢老兮食祿、七十八十猶ほ官途に在り、病軀にて事務を執る能はざるに祿を得るは、皆是れ貪徒なり、祿豈人なり、我は之を餘ふ、嘗州印兮相從、辭職すること解印と曰ふ、詹尹は古の善卜者、楚の屈原が屍を實せし人、

【題義】友人は必ずしも其の人あるにあらず、山は必ずしも其の山あるにあらず、假りに友人を設け、假りに山を設けて、我が平生の所懐を敘ぶ、

【大意】山の寂寂たるは無人なるが故なり、山の蒼蒼たるは多木なるが故なり、然るに朝廷には龍の如き賢臣が多く在り、是の羣龍と伍せずして君は何ぞ空谷を慕ふや、君の意を察するに君は言ふならん、世上には白雪の調は和する者寡うして、誰が我が思の深きを知らん、道も亦知り難きを以て獨行するに若かず、石上を流るるの清泉、松間に結ぶの艸屋、耳を悦ばしめ、身を安んず、而して養鶴、抱犢、煮瓜、實杏、收穀、古の高士の所業を我も亦所業とせん、不才の身を以て朝廷に椅子を占むる

は、後進の路を塞ぐのみならず、老いて猶ほ貪祿の罫りを受くるを嫌ふ、是に於てか誓つて官を辭して、歸山の目的に従はん、吉も凶も善卜者に問ふの要無し、

【餘論】此の篇の結句誓解の十二字、或は右丞が誓つて解印の事にも解せるが、余は友人が誓つて解印し去る意を取る、乃ち文寡以下可卜に至る、盡く友人が答辭と見るべきなり、顧可久曰く高古、劉辰翁曰く不用楚詞、自適目前、詞少而意多、尙覺盤谷歌意爲凡、韓昌黎が力も此の詩には及ばざるなり、

山中人兮欲歸、 山中の人や歸らんと欲す、

雲冥冥兮雨霏霏、 雲冥冥として雨霏霏たり、

水驚波兮翠苔靡、 水波を驚かして翠苔靡き、

白鷺忽兮翻飛、 白鷺忽として翻飛す、

君不可兮褰衣、 君衣を褰ぐ可からず、

山萬重兮一雲、 山萬重一雲なり、

混天地兮不分、 天地を混じて分たす、

【注解】欲歸、山中に歸らんと欲するなり、冥冥は雲の多い貌、霏霏は雨の多い貌、驚波は波を驚げるなり、蒼は水潭に生ずる「カヤシ」なり、靡は蒼の性として自然に靡くなり、翠は白鷺の白と對字なり、不可兮褰衣、水深ければなり、山萬重、雲深ければなり、曉曉は曉露と同じ、樹木の繁密なる貌、氣混は天地の氣の盛なる貌、山西兮夕陽、字の如く見る



樹掩曖兮氣氤

樹掩曖として氣氤たり、

猿不見兮空聞

猿見えずして空しく聞ゆ、

忽山西兮夕陽

忽ち山西は夕陽なり、

見東臯兮遠邨

東臯の遠邨を見れば、

平蕪綠兮千里眇

平蕪緑にして千里眇たり、

惆悵兮思君

惆悵として君を思ふ、

【題義】前章と同じく山中の景状を敘するなり、

【大意】山中は市中と異なり、其の晴雨變化窮まらず、忽ちにして雲、忽ちにして雨、水は波を驚げて翠苔は之が爲めに靡き、山は萬重なるも、雲は一樣に懸り、天地も上下も共に分判する能はず、而して樹影は暗く、林氣のみ氣氤たり、猿は幽處に啼くも、形は見る能はず、已にして西方の山に光暉が燦たるを見る、而して東臯に遠邨を發見す、平蕪は一面緑にして千里眇眇たり、惆悵として我が心偏に君を思はざるを得ず、

【餘論】前首は一體到底の作、此の篇は二度換韻して成る、元明の詩人多く後首を以て、前首以上の名篇と爲すものの如し、元の劉辰翁曰く、宋玉之下、淵明之上、甚似晉人、不知者爲氣短、知者以

べし、  
【注】  
樹と爲すといへるに泥むべからず、  
東臯は水田なり、遠邨、平蕪、山の  
高處より見る景、平蕪は平原なり、  
千里眇、蕪一色なればなり、惆悵  
は「カナシミヲラム」なり、君は山  
中人を指す、

爲三琴操之餘音也、明の顧可久曰く、模寫景色、各有三分屬、玄虛、高古俊彩と、余は謂ふ宋玉は此の工あるも、此の品地無し、宋玉之下の四字は右丞に於て一笑を發すべし、

魚山神女祠歌 二首

迎神曲

迎神曲

坎坎擊鼓魚山之

坎坎として鼓を撃つ魚山の下、

下。

吹洞簫望極浦

洞簫を吹いて極浦を望む、

女巫進紛屢舞

女巫進んで紛として屢舞ふ、

陳瑤席湛清醑

瑤席を陳ねて清醑を湛へ、

風淒淒兮夜雨

風淒淒として夜雨、

神之來兮不來

神の來るや來らざるや、

使我心兮苦復苦

我が心をして苦んで復苦ましむ、

【注】魚山は郟州東阿縣に在り、一名は吾山と曰ふ、曲は歌曲、

坎坎は鼓を撃つ聲、洞簫は簫の底無きもの、長さ二尺又二尺五寸、望極浦、魚山の下、水浦に臨むなり、女巫は俗に「ミコ」と稱す、祈る者に代つて神を招致する者なり、紛屢舞は紛華其の舞の「ハアヤカ」なるを謂ふ、瑤席は美麗なる祭席、清醑は清酒、神前に供ふ、湛は風雨の形容、

【題義】魚山の上に道觀(佛徒の寺院)あり、其の道觀に祀る神女に對し、眞に活きて居る神女を我が前に現せしめ、以て種種の幸福を祈るなり、

【大意】坎坎と鼓を撃つ者あり、又洞簫を吹く者あり、是に於て乎、女巫は進んで紛として幾度も舞ふ、神前に布く所の席は瑤の如く、酒は極めて清美なるものを獻ず、忽ちにして風は凄凄として夜に入つて雨あり、而かも神女が來りしや來らざりしや、分明に知る能はず、是を以て我が心をして惱苦の上に惱苦せしむ、

送神曲

送神曲

紛進拜兮堂前、  
目眷眷兮瓊筵、  
來不語兮意不傳、  
作暮雨兮愁空山、  
悲急管思繁絃、  
靈之駕兮儼欲旋、

【注解】紛は前章の如し、進拜する者は誰と定めざるも右丞自身と假りに定む、拜の字、一本舞に作る、拜を可とす、眷眷は心嚮注の貌と注して殷勤に厚く思ふなり、躊躇と同じ、瓊筵は玉の如き席なり、來不語は神に屬す、意不傳は我に屬す、暮雨は迎神の夜雨と對映す、迎神は前日、送神は翌日なり、悲急管、管は竹笛、其

倏雲收兮雨歇

倏ち雲收まり雨歇み、

山青青兮水潺潺

山青青として水潺潺たり、

【大意】前日は神を迎へ來り、今日は神を送る、迎ふるも送るも、目は眷眷として瓊筵を離れず、而かも神は語らざるを以て、我が意を傳ふる能はず、既にして暮雨となり、山は靜かに唯神を送る爲めの急管と繁絃の聲を聞くのみ、是に於て神の靈は車に駕して天上に旋る、是の時雲收り雨歇み、山色は青青と現じ、水聲は潺潺と響くのみなり、  
【餘論】迎神も送神も共に一韻の作、上、楚辭を以て經とし、下、漢魏六朝を緯とし、而して右丞一家の肉と爲り髓と爲つて現はれしもの、是の二曲とす、

の音響響を作す、思繁絃、琴瑟の類、總て是絃なり、繁は聲の細きを言ふ、靈之駕、形無くして神有るものを靈

白龍渦 雜言走筆

白龍渦 雜言走筆

南山之瀑水兮

南山の瀑水、

激石瀾瀑似雷驚

石に激して瀾瀑雷の驚くに似たり、

人相對兮不聞語

人相對して語聲を聞かず、

【注解】白龍渦、渦は水増せ、旋流也と注して、水が「ゲルゲル」旋る處なり、南山之瀑水、終南山より

落下する瀑布なり、其の瀑水の落下

古詩 魚山神女祠歌・送神曲・白龍渦

聲

翻渦跳沫兮蒼苔

翻渦跳沫して蒼苔溼ふ、

溼

蘚老且厚

蘚老いて且厚く、

春艸爲之不生

春艸之が爲に生せず、

獸不敢驚動

獸敢て驚動せず、

鳥不敢飛鳴

鳥敢て飛鳴せず、

白龍渦濤戲瀨兮

白龍渦の濤瀨に戯れ、

委身以縱橫

身を委して以て縱横、

主人之仁兮不網

主人の仁嗣せず釣せず、

不釣

得遂性以生成

性を遂ぐるを得て以て生成す、

【大意】白龍渦は、南山の瀑水落下する處に在りて、水が石に激して宛かも雷の轟く如く、人が對語

する側に渦が在るなり、瀨は水の  
湧いて、石に激する聲、不開雷聲、  
人が瀑前に談話するも、其の聲は開  
えざるなり、跳沫は水の飛沫なり、  
蒼苔はコケシなり、蘚老は苔が時代  
を経たるなり、春艸不生、水氣が一  
年中寒冷なればなり、獸敢不驚動、  
鳥敢不飛鳴、獸類も羽族も活躍せず、  
白龍、濤波のみ活躍す、主人は右丞な  
り、不網不釣、仁者は網て殺しむ、  
捕へて候しまず、遂性、魚族が其の  
性を遂ぐるなり、

するも、水聲の爲め壓せられて、人聲は聞きとること能はず、其の跳沫の爲め力を得るものは蘚苔のみ、草は生せず、獸類は來らず、鳥族も亦飛ばず、年久しく縱横に自恣なるは猛濤のみ、魚族のみ、渦伴の堂主は物の自然を愛するを以て、魚を捕ふるの不自然を嫌ひ、而して各の其の性の自由を遂げしむ、

【餘論】此の篇、題下に雜言走筆とあるは、或は五字句、或は六字句、或は八字句、或は九字句、長短一定せざればなり、而して韻は一韻を以て成る、史傳ふ、雜が畫思は神に入る、山水平遠、雲勢石色に至りては、繪家以て天機の到る所と爲す、學者及ばざるなり、今此の篇、右丞が畫と爲りて見はるるあれば、洵に天下の至寶ならん、而して余最も右丞が仁者の心を失はず、詩人の旨を守るを敬するものなり、

酬諸公見過 時官出在朝川莊

諸公の過ぎらるるに酬ゆ、時に官より出でて朝川の莊に在り

嗟余未喪哀此孤生

嗟余未だ喪びず、此の孤生を哀しむ、

屏居藍田薄地躬耕

藍田に屏居し、薄地を躬ら耕す、

【注解】諸公、誰なるやは明白ならず、必ずしも高官ならず、裴迪や崔季重や皇甫岳の人人ならん、朝川は

歲晏輸稅以奉棗盛  
晨往東臯艸露未晞  
暮看煙火負擔來歸  
我聞有客足掃荆扉  
簞食伊何副瓜抓棗  
仰廁羣賢蹕然一老  
媿無莞篔班荆席藁  
汎汎登陂折彼荷花  
淨觀素鮪俯映白沙  
山鳥羣飛日隱輕霞  
登車上馬倏忽雨散  
雀噪荒邨雞鳴空館  
還復幽獨重秋累嘆

歲晏れて税を輸し、以て棗盛を奉ず、  
晨に東臯に往き、艸露未だ晞かず、  
暮に煙火を看み、負擔來歸す、  
我聞く客ありと、荆扉を掃ふに足る、  
簞食伊何ぞ、瓜を副き棗を抓く、  
仰いで羣賢に廁る、蹕然たる一老、  
莞篔無きを媿ぢ、班荆を藁を席す、  
汎汎として陂に登り、彼の荷花を折る、  
淨く素鮪を觀み、俯して白沙に映す、  
山鳥羣飛し、日輕霞に隱る、  
車に登り馬に上る、倏忽に雨散す、  
雀荒邨に噪ぎ、雞空館に鳴く、  
還つて復幽獨、重秋累嘆す、

110  
陝西藍田縣の西南、商嶺水流れて重  
橋に至り、伏流して欄谷に至る、車  
欄環繞の如く、曇峰より落ちて深潭  
に至る、右丞が別業此に在り、彼の  
廣苑寺即ち是なり、未嘗は未死と聞  
じ、孤生、弟は猶ほ一人あるも、母  
も妻も既に遠く、孤生を喜しむ所以、  
屏居は隱居と同じ、薄地は僅少の田  
地を指す、射鵝に必ずしも鵝や鴈を  
持つてにはあらず、歲晏は歲晩な  
り、輸税は租税を納入するなり、棗  
盛の盛は平聲なれば「サカシ」にあ  
らず「モル」なり、棗は棗と同じ、  
器に盛りて以て宗廟に供す、東臯の  
臯は臯が正しき字なり、本義は長聲  
なりと注して、人が屋上に升り、死  
人の靈に告げて此に復れと呼ぶ聲、  
轉じて潭の義に用ふ、早晨なれば路  
上に露が有るなり、煙火は炊煙に於

燈火を看る、負擔、棗盛を負担して歸る、荆扉は龜位の門扉、簞食は少少の飯、副瓜は瓜を拵くなり、抓棗は棗を切るなり、芻  
圃は牧草を表して主人も芻圃の間に列次するなり、蹕然は頭髪の白き貌、右丞自分を言ふ、莞篔、莞は和訓「マカシ」濕地に生  
ずる一種の草、篔は竹を以て作る席、此の如き藤木の數物すら所有せざるを挽づ、班荆、班は布くなり、荆草を地に布く、席藁、藁を席と  
す、汎汎は水に浮ぶ貌、登陂、陂は陂池なり、登の字は過る意に見ゆ、小舟汎汎として陂池に過るなり、人が汎汎と爲すにはあらず、  
荷花は即ち蓮花、素鮪、鮪は和名「シビ」、體に似て長き尾あり、鮪は和名「オホシビ」、なり、或は曰く「マガロ」、海産の火魚、背に  
蒼黒色、腹は銀白色なり、然るに今海にあらず、陂池に此の火魚あるべからず、「淮南子注」に鮪魚似、鯉而大者と、「マガ  
ロ」とは別種の魚なり、俯映白沙、鮪が俯するにはあらず、人が俯する影が白沙に映するなり、上の仰の字に對す、登車上馬、諸公  
が歸る狀を言ふ、雨散は諸公が散ずる狀を言ふ、眞の雨にはあらず、雞鳴は夕暮の鶏鳴、曉天にはあらず、而して主人は復幽獨と爲  
る、歎も「ナゲクシ」、嘆も「ナゲクシ」なり、

【題義】藍田の欄川莊に在つて已に妻を失ひ、孤居して其の寂寞を歎する際、在官の諸公が慰問せら  
るるに對し、自己の感慨を敘し、以て謝意を表す、  
【大意】妻は已に死す、再び娶らず、是に於て孤生は全く哀し、乃ち藍田に屏居して、僅少の田地を  
耕し、歲晏の租税を納め、又祖先に供する資を取る、晨に東臯に往けば、草上の露は未だ晞かず、暮  
に山邨の煙火を看て、歎に收めたるものを擔うて來歸す、僕人は報すらく貴客ありと、荆扉を掃うて  
之を迎ふ、然るに供するに珍羞佳肴無く、僅かに瓜や棗の如き蠶野なる物を以てす、羣賢は之を嫌は  
ず、白髮の老主人と、座席としても極めて蠶末なる室に坐し、或は陂に登りて荷花を折り、或は素鮪  
の游泳するを觀み、影は白沙に映す、已にして山鳥は宿を求めて歸り、太闕の光は輕霞の中に隱れ、或

は車に登り、或は馬に上り、倏忽にして雨散し、雀は荒郊に噪ぎ、雞は空館に鳴き、將に夜に入らんとす、客は皆歸り盡きぬ、又復故の幽獨と爲る、秋を重ね嘆を累ぬるのみなり、

【餘論】此の篇五度換韻して成る「古今詩話」に王維好取人詩と論じてあるが、右丞決して人の詩を取るものにあらず、學力廣大なるが故に、古句を運用して以て自家の用に供するなり、此の篇の如きも「楚辭」や「左傳」や「漢書」や及び六朝諸大家の集中より獲來るもの多し、余謂ふ、詩人は必ず學者ならざるべからず、學者は必ずしも詩人ならず、右丞は詩人にして學者たる者なり、

王右丞集卷一終

王右丞集卷二

古詩 三十首

扶南曲歌詞 五首

扶南曲歌詞 五首

翠羽流蘇帳、春眠曙不開。

翠羽流蘇の帳、春眠曙開かず、

羞從面色起、嬌逐語聲來。

羞は面色より起り、嬌は語聲を逐うて來る、

早向昭陽殿、君王中使催。

早く昭陽殿に向ふ、君王中使催す、

【注解】扶南は古の國名、今日の暹羅の一部、國の盛時は占婆や眞臘は之に屬せしも、後眞臘の併はず所と爲る、趙松谷が「王右丞集箋註」に「杜氏通典」を引きて曰く、隋煬帝、平林邑國（今日の交趾支那の一部）獲扶南工人、及其樂器等、固不可用、但以天竺樂傳寫其聲、而不尚樂部、樂として傳ふる價值の無きもの如し、蓋し傳來の名は没すべからず、翠羽は水雉の羽、水雉の羽にて帳を製す、而して流蘇即ち房が之に垂る、流蘇は乃ち懸絲繪繡の紐なり、春眠、宮女が春眠なり、曙不開、天門は已に開けたるも、帳は未だ開けざるなり、羞從面色起、天の曙けたるにハッと氣が著いて宮女は羞らふ面色を以て起き出づ、嬌は嬌羞と成語して、俗語の女らしく愛ぐるしく、はじらふ、逐語聲來、甲の帳よりも、乙の帳よりも出で來れば、逐序なり、而して化粧して向ふ所は何處ぞ、皆昭陽殿に向ふなり、前漢の成帝、趙飛燕を昭陽殿に居らしむ、玄宗の華萼樓と麟骨に指すを得ざれば、成帝の昭陽を借用したるなり、中使、天子の私使を中使と曰ふ、昭陽殿に出仕せよと催促するなり、

【題義】扶南より傳來せし所の樂を宮中にて奏す、其の樂歌は即ち是れなり、

【大意】翠羽にて製せし流蘇の帳帷の未だ開かざる所を見ると、宮女等は春眠猶ほ酣ならん、已にして宮女は羞らふ面色を將て漸く起き、嬌びるが如き語聲を以て來り、皆昭陽殿に向つて進む、是れ君王が女官を召す中使が催促し來ればなり、

堂上青絃動、堂前綺席陳、

堂上に青絃動き、堂前に綺席陳ぬ、

齊歌盧女曲、雙舞洛陽人、

齊歌す盧女の曲、雙舞す洛陽の人、

傾國徒相看、寧知心所親、

傾國徒らに相看す、寧ぞ知らん心の親しむ所を、

【注解】青絃は青色の絃、綺席は舞臺、盧女曲、魏の武帝の宮人盧女は、冠軍將軍陰叔之が妹なり、年七歳、漢宮に入り、琴を鼓するを學び、善く新聲を爲す、洛陽人、雙舞する者は洛陽の人なり、傾國は美人の代名詞、徒相看、外面を見て内面を看す、是れ徒爾なり、寧知、曲は何の曲、舞は何の舞と、其の中心の親しむ所を美人は知り得ざるなり、

【大意】堂上に青絃の動くは開設の報なり、堂前に綺席陳するは整頓したるなり、乃ち盧女の曲を歌ふ者、盧女の舞を爲す者、歌ふ者多人、舞ふ者二人、而して觀者は宮中の美人、其の美人の多くは歌者舞者の中心を知らざるなり、

香氣傳空滿、妝華影箔通、

香氣は空に傳はりて滿ち、妝華は箔に影して通る、

歌聞天仗外、舞出御樓中、

歌は聞ゆ天仗の外、舞は出づ御樓の中、

日暮歸何處、花間長樂宮、

日暮れて何處に歸る、花間の長樂宮、

【注解】香氣は花の香氣、妝華は美人盛妝の美、箔は簾なり、箔に影が映るなり、歌聞は歌聲が聞ゆ、仗は兵器の總名、故に兵衛を仗と曰ふ、天仗は近衛兵の護る所、乃ち宮城、塵が宮外に漏れるなり、舞出御樓中、出は在の意義に見る、舞廳みて退出するにはあらず、歌聲に連れて舞ひ出づるなり、歸は美人の歸るなり、長樂宮は、秦の興樂宮なり、漢代、之を修飾し、名を改む、唐時尙存す、天寶以後、廢す、

【大意】鼻に感ずる香氣は空中に一面滿ち、目に感ずる妝華は箔外に影が通る、已にして歌聲は天仗の外に聞え、舞容は御樓の中より出づ、日暮に及んで歌者舞者の歸る所は何處ぞや、花間いて爛漫たる長樂宮に向つて去る、

【餘論】松谷の『王右丞集』此の第三首の詩注に乘恕が説として「樂府詩集」の睦州歌を載す、曰く香風滿空陌、妝華映薄紅、歌聲天仗外、舞態御樓中、七字不同、句調遂劣、松谷曰く唐時の樂曲、多く才人の名句を採りて、之を管絃に被らしめて之を歌ふ、其の聲律諧はざる者は則ち字を改めて之に就く、宮商に叶へば其の句調の雅俗を問はざるを以ての故なり、清潭、今郭茂倩の「樂府詩集」を検するに此の詩を發見せず、故に暫らく其の可否を論せず、



宮女還金屋將眠復畏明 宮女金屋に還る、將に眠らんとして復明を畏る、

入春輕衣好半夜薄妝成 春に入りて輕衣好く、半夜薄妝成る、

拂曙朝前殿玉墀多佩聲 拂曙前殿に朝す、玉墀佩聲多し、

【注解】金屋は「漢武故事」(班固撰の名あるが後人の偽書なり)に昭帝王(武帝の幼弟)數歲長公主抱きて膝上に置き、問うて曰く、兒、婦を得んと欲するや否や、左右の長御百餘人を指す、皆曰く不用と、其の女阿嬌を指し、好むや否やと、笑つて對へて曰く、若し阿嬌を得て婦と作さば、當に金屋を作りて之を貯ふべしと、長明は曉天を心配するなり、春既醒めがたきを畏るるなり、輕衣好、春暖なれば重衣の要無し、半夜薄妝成、文字の如く、夜半に起きて薄化粧を施す、拂曙は拂曉と同じ、夜の明けがたを曰ふ、朝を拂ふにはあらず、長樂宮、建章宮等、皆前殿あり、即ち正殿なり、玉墀は玉階と同じ、多佩聲、已に文武の高官が參内することを知る、

【大意】歌者も舞者も觀者も、皆金屋に還り去る、眠りに就かんと欲して復明の曇起を畏る、幸に春暖夜寒からず、輕衣にして化粧するを得、乃ち拂曙に殿前側用に參朝す、時已に參廷する文武官人の佩聲が多し、

朝日照綺窗佳人坐臨鏡 朝日綺窗を照す、佳人坐して鏡に臨む、

散黛恨猶輕插釵嫌未正 黛を散じて猶輕きを恨む、釵を挿んで未だ正しからざる」を嫌ふ、

同心勿遽遊幸待春妝竟 同心遽かに遊ぶこと勿れ、幸に春妝の竟るを待て、

【注解】綺窗は前に書の前刺ありて綺照なるを曰ふ、散黛、佳人眉を剪り、青黑色を以て眉を造る、之を散黛と曰ふ、適度に化粧が出来ざるを恨む、插釵、カンザシを頭髮に挿む、之も正しく出来ざるを嫌ふ、同心は佳人同志の朋友、  
【大意】朝日が眩暈と綺窗を照し、佳人は化粧せんと坐して鏡に臨む、眉黛の化粧成りしも猶輕く、頭髮に釵を挿みしも是れも正しからず、彼を恨み此を嫌ふ、我より早く化粧の成りし人も得意の態を爲すなく、幸に我が春妝が竟るのを待ち玉へ、  
【餘論】右丞の樂章、總て前人の粕を去つて、其の粹を留む、今此の五章、以て其の得力を見るべし、願可久曰く短章亦自婉麗と、洵に當れり、

從軍行 從軍行

吹角動行人喧喧行人起 吹角行人を動かす、喧喧として行人起つ、

笳悲馬嘶亂爭渡金河水 笳悲んで馬嘶き亂る、争ひ渡る金河の水、

日暮沙漠垂戰聲煙塵裏 日暮る沙漠の垂、戰聲は煙塵の裏、

盡係名王頸歸來獻天子 盡名王の頸を係けて、歸來天子に獻せん、

【注解】角は鳴響、木羌胡の製、後、中土に入る、馬を驚かす爲の器、今、征人の出發を報進する、喧喧は多人数の聲の形容、悲は崩解の形容、金河は山西雲中部の地、上に紫河及び兼水全承け、南流して河に入る、沙浪は流沙なり、飛は邊なり、名王頭、名も無き者の頭は要なし、將に將たる人の頭、

【題義】從軍行は樂府題として漢代よりあり、而して唐人盛んに此を賦す、時代戦亂多ければなり、從軍者辛苦の狀を敘するに、其の辛苦の狀を外面に示さず、其の壯烈の狀を言ふ、

【大意】吹角は頻りに行人の出發を促す、乃ち行人は喧喧として起つ、笳聲は悲壯の音を發し馬は嘶き亂る、從軍者は我先にと金河の水を渡るを争ふ、日暮に及んで沙漠の垂邊にて、大に戦鬪の聲が煙塵の裏に起るを聞く、從軍者は我こそ名王の頸を斬つて以て我が甲冑に保け、歸來以て天子に獻じ、嘉賞に預らんと期す、

【餘論】喧喧の語、亂の字、争の字、一讀すれば如何にも軍規が嚴肅ならざるやの感あり、喧喧は肅肅又は蕭蕭と改め、亂も争も又他の字面が然るべきやとも思へるが、右丞が意は今まで靜肅なりし軍營が、吹角の爲め我後れじと兵士が出發せんと欲する狀を説くのであれば、其の字面此の如くならざるを得ずとならん、顧可久曰く雄渾善模寫と、模寫の工は右丞が獨擅なり、

隴西行

隴西行

十里一走馬、五里一揚鞭、十里一たび馬を走らし、五里一たび鞭を揚ぐ、

都護軍書至、匈奴圍酒泉、都護軍書至る、匈奴酒泉を圍むと、

關山正飛雪、烽火斷無煙、關山正に雪を飛ばし、烽火斷えて煙無し、

【注解】隴西は郡名、秦置く、今日の甘肅蘭州、鞏昌、秦州地方一帯を曰ふ、漢書西域傳補注(卷上七八)に曰く漢興つて孝武に至り、四夷を征し、威徳を廣むるを事とす、而して張騫始めて西域の途を開く、其の後、隴騎將軍、匈奴の右地を擊破し、渾邪休屠王を降す、遂に其の地を望しくし、始めて合陽以西を築き、初めて酒泉郡を置く、補に曰く酒泉郡、武帝、太初元年開き、以て胡と羌との道路を隔絶す、後分ちて武威、張掖、敦煌と四郡を列す、都護も漢初めて西域都護府を置き、諸國を都護す、宣帝の時、衛司馬が以て鄯善以西の數國を護らしめ、及び姑師を分ちて、車師前後と爲し、下山北に及ぶ、六國の時、漢は獨り南道を護る、後、日逐王降る、鄯善以西を護らしむ、都吉をして北道を護らしむ、軍書は軍中往復の報、關山は玉門關外の山、陽關外の山、烽火はノロシ火、

【題義】隴西行は即ち從軍行と同じ、匈奴征伐の狀を敘ぶ、平和の時代を言ふにあらず、交戦中の意味を歌ふ、

【大意】十里の路を一氣に馬を走らし、五里行きて一鞭を加ふ、何故に斯く急なるやと問はば、都護府より頻りに軍書が到達す、其の軍書は他にあらず、匈奴が酒泉郡を包圍するに縁つて援兵を乞ふとなり、而かも關山は飛雪漫漫、烽火を揚ぐるも雪の爲め烽燧揚がらず、騎兵をして軍書を齎らすより

外策無きなり、

【餘論】顧可久評して曰く、極望悽愴之情、不著一字、意氣復自豪雄、起東皆突兀急驟、流麗宏古、短行體如、此、後人短歌短行を作る者、以て法と爲すべきなり、

早春行

紫梅發初遍、黃鳥歌猶澀、

紫梅發きて初めて遍し、黃鳥歌猶は澀る、

誰家折楊女、弄春如不及、

誰が家ぞ折楊の女、春を弄して及ばざるが如し、

愛水看妝坐、羞人映花立、

水を愛して妝を看て坐し、人を羞ちて花に映じて立つ、

香畏風吹散、衣愁露沾溼、

香は畏る風の吹き散せんことを、衣は愁ふ露の霑し溼は

玉閨青門裏、日落香車入、

玉閨青門の裏、日落ちて香車入る、

「さんことを、

游衍益相思、含啼向綵帷、

游衍益相思ふ、啼を含んで綵帷に向ふ、

憶君長入夢、歸晚更生疑、

君を憶うて長く夢に入る、歸ること晚くして更に疑を生ず、

不及紅簷燕、雙棲綠艸時、

及ばず紅簷の燕、雙棲綠艸の時に、

【注解】紫梅、又は紫華と曰ふ、日本には稀なり、水戸の備後園に一樹有り、黃鳥は黃鸝、黃栗、黃雀、黃雀等の多  
名を有す、日本の鶯とは異なる、楊は何柳なり、弄春、愛水、羞人、皆是れ少女の姿態動作を言ふ、香畏、衣愁、少女の心理状態を  
言ふ、青門、三輔黃圖「漢無名氏撰」に長安城東出南頭門を霸城門と曰ふ、民、門色の青きを見て、名けて青城門、或は青門と曰  
ふ、香車は綺羅なる車、游衍は自恣の體を言ふ、紅帷は少女が室の帳帷なり、君は情人を指す、紅簷燕、紅色の簷には、年年初夏、  
燕子來つて雙棲する、

【題義】早春は古曆の正月、今曆の二月、暖にあらず、寒にあらず、人の散策に適する季候、女子  
が情人と共に游衍せんと思ふも、我が意の如くならざるの事を詠するなり、

【大意】紫梅は開いて處處に徧きも、黃鳥は仲春ならざれば聲猶は澀る、誰が家の女なるを知らず、  
折楊して春を弄するが如きも、猶は十分ならざるやの容あり、水に向つて自分の妝を寫して坐し、人  
を羞らふ姿態にて花に映じて立ち、花の香は風の吹き散することを畏れ、私の衣は露の霑はし盡くす  
を愁ふ、然るに他人の家の女子の玉閨青門の裏に、何人か落日に香車に乗つて入るを看る、是に於て  
乎自分の游衍も此の如くならんと相思ふ、暗に人知れず涙を含んで綵帷に向ふ、君を憶うて休まず長  
く夢に入るも、君は容易に歸り來らず、若しや他に心を寄せしにもやと疑を生じ、我ながら紅簷に  
棲ふ燕の、雌雄雙んで綠艸の時を樂しむに及ばずと悲しむ、

【餘論】此の篇、兩度換韻して成る、紫、黃、青、紅、綠、五色を以て全首を飾る所、晚唐李義山の  
喜ぶ所、右丞としての本色にあらず、然りと雖も少女が心理を描寫する者、右丞も亦解意の人ならず

とせず、亦何ぞ詩聖の聖を害せんや、顧可久曰く別是一種纖麗語、

贈裴迪

裴迪に贈る

不相見不相見來久、

相見す相見來らざること久し、

日日泉水頭、常憶同攜手、

日日泉水の頭、常に憶ふ同じく手を攜へしことを、

攜手本同心、復嘆忽分襟、

手を攜ふ本同心、復嘆す忽ち分襟、

相憶今如此、相思深不深、

相憶うて今此の如し、相思深きや深からざるや、

【注解】不相見の語を兩度疊用するは其の相思の情の切なるを表はす、常憶、憶は記憶なり、常想とは異なる、攜手、顧可久本の和訓に、攜ヘシコトナシとあり、攜ヘシコトナシと訓まざるべからず、同心は易象辭に二人同心、其利斷金とあり、分襟は分袂、分手と同じ、人と別れるなり、相思は二人互に相思ふ、「前漢書外戚傳」に上念益相思悲慙すとあり、

【題義】裴迪は右丞が友人中最も知己たりし人なり、其の詩を爲る閑澹幽寂、右丞と調を同じうす、初め右丞及び崔興宗と俱に終南に居る、天寶後、蜀州刺史と爲り、杜甫と交善、

【大意】面晤せん面晤せんと思ふこと随分久し、日日泉水の頭に來り、常に憶ふ曾て此處に同遊せしことを、同遊せる人は本同心の者なればなり、復嘆す忽ちにして分襟せしことを、其の事を憶起して

今日も猶は面晤せざるを嘆く、而かも汝が思は我が思の如く深きや又深からざるや、  
【餘論】此の篇、雜言にして兩度換韻して成る、平平の語、毫も塗澤せず、塗澤せざる所に至情を見る、

瓜園詩 并序

瓜園の詩 并に序

維瓜園高齋、俯視南山形勝、二三時輩同賦、是詩兼命詩、英數公同用、園字爲韻、韻任多少、時太子司議郎薛瓌發此題、遂同諸公云、

維瓜園の高齋、俯して南山の形勝を視る、二三の時輩、同じく是の詩を賦す、兼ねて詩英數公に命じ、同じく園字を用ひて韻と爲す、韻は多少に任す、時に太子司議郎薛瓌、此の題を發す、遂に諸公に同すと云ふ、

余適欲鋤瓜、倚鋤聽叩門、

余適瓜を鋤かんと欲す、鋤に倚つて門を叩くを聽く、

鳴驪導聰馬、常從夾朱軒、

鳴驪聰馬を導く、常從朱軒を夾む、

窮巷正傳呼、故人儻相存、

窮巷正に傳呼、故人儻くも相存す、

攜手追涼風。放心望乾坤。  
 手を攜へて涼風を追はん、心を放つて乾坤を望む、  
 藹藹帝王州。宮觀一何繁。  
 藹藹たる帝王州、宮觀一に何ぞ繁き、  
 林端出綺道。殿頂播華旛。  
 林端綺道を出で、殿頂華旛を播ぐ、  
 素懷在青山。若值白雲屯。  
 素懷は青山に在り、白雲の屯するに値ふが若し、  
 迴風城西雨。返景原上邨。  
 迴風城西の雨、返景原上の邨、  
 前酌盈尊酒。往往聞清言。  
 前に尊に盈つる酒を酌み、往往清言を聞く、  
 黃鸝轉深木。朱槿照中園。  
 黃鸝深木に轉じ、朱槿中園を照らす、  
 猶羨松下客。石上聞清猿。  
 猶羨む松下の客、石上に清猿を聞く、

【注解】瓜圃、維瓜圃の略、瓜は「ハシ」に「ヒヤゴ」にはあらざるべし、高齋、高處に在る書齋なり、南山は終南山、太子司馬師は官名、太子の爲め文書を掌理する役、蘇瓌は河中寶鼎の人、開元十九年の進士、或は曰ふ、蘇瓌と別人なりと、全「全唐詩」を案するに、蘇瓌與王維杜市「最善」とあり、然らば此の蘇瓌其人と思へるなり、蓋し「全唐詩」に蘇瓌ありて、蘇瓌無し、「新舊唐書」にも傳無し、是の故に列する能はず、迴風、瓜圃の入手入れをする、鳴鶴は貴人の從僕、驢馬は貴人の乘馬、常教は今日の秘書役なり、朱軒は貴人の車なり、窮巷は各深き處の巷、又は陋巷の意味、正傳呼、貴人の來りしことを順次に知らずなり、僅は字義多し、余は有くもの詞を取る、故人は舊友なり、放心は孟子に説く放心にはあらず、故は放心、心は心骨、心骨を放開して望むなり、高齋の地然るなり、藹藹は盛んなる貌、帝王州は帝都を指す、宮觀は宮闈と樓觀なり、一何繁は俗語に言へば、非常に立派、非常に繁華なり

り、林端は林頭と同じ、端を「ハシ」と訓ず、頭も亦「ハシ」なり、綺道は織道と同じ、天子の車馬の來往する路道は前稱して「迴風」なり、殿頂、昭陽殿、甘露殿、延年殿、皇居の中で特に高き建物に皆殿なり、華旛は奇麗な旛旗なり、素懷は平生の志懷なり、青山は後の白雲に對す、白雲は前の青山に對す、迴風はケルケル回る風、返景は夕陽、清言は高僧の談話、黃鸝は後の朱槿に對す、朱槿は前の黃鸝に對す、清猿、猿聲の善きを言ふ、

【題義】瓜圃詩の題は良に簡短なれば、小序にて其の意義を見し置けり、瓜圃其のものを詠するにあらず、瓜圃裏の高齋に在つて所見を詠するが、此の詩の主意なり、

【大意】維瓜圃の高齋は、終南山の形勝を俯視する程の高處に在り、乃ち二三の友人と、同じく是の瓜圃の詩を賦す、而して世に名高き詞人數公に是の詩を命示して和を索む、圃の一字を韻の中に收むるを欲するも、字の長短は各自の自由とす、時に太子司議郎薛璠が瓜圃詩と題するを發言せられたるを以て、主人も諸公も同じく是の題にて詩を作る、主人は適ま瓜圃の草を除き、整理せんと鋤を持つて圃に在る、時に門を叩く人の聲を聴く、誰か來りしやと思ふ邊も無きに、從僕やら祕書役の人人が、馬上の人やら車上の人やらを案内して來る、それが窮巷の事なれば相當賑かに傳呼せらる、故人が儒くも相存する以上は、同じく手を攜へて涼風を追うて遊ばん、此の處は頼ひに高處に在り、心骨を放開して上下乾坤を自由に望むを得、第一目に入るものは帝都の藹藹として盛んなるにあり、宮闈も樓觀も一に是れ繁華なり、林端に沿うて一條の綺道を認め、殿頂に當つて美麗なる旛の播がるを見る、

而かも我等が素懐は人間の得意よりも、自然の境の青山、無爲の形の白雲を愛するに在り、斯く觀する中に、廻風が城西より雨を送る、返景は原上の都を照らす、是の自然の變化、賞せざるべからず、乃ち盈樽の酒を酌み、清談淨玄往住口を衝いて出で、黃鸝も我等の樂を和するが如く嗜嗜として深木に囀ず、朱榴も榮榮として中園を照らす、已にして歸を促す客もあれど、猶ほ松下に倚るの客は歸らず、石上に坐して清猿を聞くが爲めなり、

【餘論】一篇、繁華の喜ぶ可きを稱し、又自然の愛すべきを言ふ、顧可久評して曰く彼一時景事、中有三轉換、冲古と、轉換の意義、右丞本心の存する所とす、余、薛據が詩を讀まんを欲し、『全唐詩』を閱す、然るに薛據の此の題の詩無し、但し偶然ならんも、青白黃朱の四色あるも注目せざるべからず、

同盧拾遺韋給事東山別業二十韻給事首春休沐  
維已陪游及乎是行亦預聞命會無車馬不果斯諾

盧拾遺、韋給事、東山の別業二十韻を同ず、給事首春休沐す、維已に陪游す、是の行に及んで、亦命を聞くに預る、會車馬無し、斯諾を果さず、  
託身侍雲陛、昧且趨華軒。身を託して雲陛に侍す、昧且華軒に趨る、

遂陪鷓鴣侶霄漢同飛翻、  
君子垂惠顧期我於田園、  
側聞景龍際親降南面尊、  
萬乘駐山外順風祈一言、  
高陽多夔龍荆山積瓊璠、  
盛德啓前烈大賢鍾後昆、  
侍郎文昌宮給事東掖垣、  
謁帝俱來下冠蓋盈丘樊、  
闈風首邦族庭訓延鄉邨、  
采地包山河樹井竟川原、  
巖端迴綺檻谷口開朱門、  
階下羣峯首雲中瀑水源、  
鳴玉滿春山列筵先朝噉、

古詩 同盧拾遺韋給事東山別業二十韻



會舞何颯踏擊鐘彌朝昏  
 是時陽和節清晝猶未暝  
 藹藹樹色深嚶嚶鳥聲繁  
 願已負宿諾延頸慙芳蓀  
 蹇步守窮巷高駕難攀援  
 素是獨往客脫冠情彌敦

會舞何ぞ颯踏たる、擊鐘朝昏を彌る、  
 是の時陽和の節、清晝猶未だ暝ならず、  
 藹藹として樹色深く、嚶嚶として鳥聲繁し、  
 己を願みるに宿諾に負き、頸を延べて芳蓀を慙づ、  
 蹇歩窮巷を守る、高駕攀援し難し、  
 素是れ獨往の客、冠を脱して情彌敦し、

【注解】盧は姓、拾遺は官名、唐始めて置く、供奉風節を掌る役、盧は判然せざるも盧倫ならん、韋は姓、給事は官名、給事中の時、宮中に在つて尙書の奏事を處理する役、秦漢以來あり、韋の名は嗣立、中宗、之を道彦公と爲す、別業は別荘、田園の業を別地に置くを以て名く、首春は正月、休沐、官吏は五日に一休、以て洗沐するなり、陪遊は同遊を卑下して言ふ、雲陸は雲上と同じ、味且、曉天は色味ければなり、華軒は殿上の曲欄、共に宮禁の出仕を言ふ、鶴鴻侶、行くに列を亂さざるは鶴と鴻となり、以て高官の代名詞と爲す、雲漢は雲上なり、宮中なり、飛鶴、鶴鴻を用ふる故に飛鶴と曰ふ、宮中を往來するに譬ふ、君子は盧と韋の二人を指す、韋蓋、我を氣に傷けて免れるなり、抑我、我が別業に遊びに来玉へと期約する、側聞は直接に聞きしにほあらず、間接に聞きしなり、景龍は中宗の年號、三年十二月に中宗が韋の別業に幸し、詩及び相二千匹を賜ひ、韋を封じて道彦公と爲す、南園、高麗、共に中宗なり、順風は莊子外篇在宥に、廣成子南首而臥、黃帝順下風、膝行而過とあり、中宗の韋に對する、稱は黃帝の廣成子に對するが如しとなり、新言、莊子在宥に、雲漢曰、吾過天籟、聞一音、教一言垂れよと祈るなり、高麗は「左傳」文公十八年に高麗氏有才子八人、善射、隈賁、蒙、大鵬、龜蒙、延蒙、仲蒙、叔蒙、齊蒙、曹蒙、明允、篤蒙、天下之民、謂之八蒙とあり、景龍は英傑を譬ふるなり、別山は今日の河南省開封縣の南に在り、原野は美玉、昔國の寶なり、以て賢人に譬ふ、盛德、前世に於ける古人の盛徳は前烈を啓き、今日の大賢は其の前烈を受けて以て後昆に繼る、侍郎は官名、嗣立の弟韋濟を曰ふ、文昌宮、尙書即ち宮内大臣を美稱して文昌と曰ふ、侍郎は文昌宮に屬する官、給事は嗣立なり、東掖垣、掖門に兩廡あり、東を日華と曰ひ、西を月華と曰ふ、嗣立の出仕するは中央の位地即ち東掖垣なり、冠蓋は勳任、親任としての狀、最丘樊、丘園樊籬と成語して一家一族の意味、國風は古人の解を見ず、案するに少女風の語あり、溫和の風を意味す、開風も亦然らんかと思ふ、首春、我が故國の一族に冠たる意ならん、毛詩小雅祈父に、言旋言歸、復我邦基とあり、庭園、家庭の良園を一帯一壠に及ぼすなり、采地は領地と同じ、采は官地寮官也と注して、天子が諸侯に受封するを曰ふ、包山河、蜀の地、四面山なり、四面河なり、樹井は林樹が井然と整ふを言ふ、竟げ城なり、巖巖、巖石の先端、廻紉、結圓なる欄檻が、巖巖を廻るなり、各口、各の入口に向つて朱門が開きであるなり、階下、家は高處にて臺基の首を見る、雲中、瀑布の聲を聞いて形を見ず、雲中なればなり、鳴玉、貴人が腰の佩玉を鳴らす聲が春山に滿つるなり、朝噴は朝噴と同じ、會舞する狀が舞路として盛なり、琴鐘は會舞には鳴器を主とす、朝賀良に賑かなり、陽和は「史記秦始皇紀」に、時在中春、陽和方起とあり、古曆の二月、清晝は俗語の眞日なり、藹藹は樹色深く纏め、味且、嚶嚶は黃鳥の鳴聲、願已、右丞自身を願慮する、蹇芳蓀、蹇は香草、花萼蒲なり、芳蓀は節を誤らず、自己は宿諾を誤る、花にも及ぼすと慙づるなり、蹇歩は「チンバ」意氣地無く歩む貌、高駕、他の人は招きに應じて往く、自分は攀援即ち隨伴せざるなり、素是は平生是れなり、獨往客、自己を譏り、意志を曲げざる人、脫冠は形式を忘れるなり、

【題義】盧拾遺と韋給事と東山の別業にて二十韻即ち五言四十句、二百字の詩を作る、給事が首春の休日、招待せられたるを以て余も陪遊するの光榮を得たり、然るに二月の仲春にも亦招待せらる、謙みて命を奉じ乍ら、車馬の用意整はず、遂に其の約に背き、列席するを得ず、其の罪を謝して賦するものなり、

【大意】自分等が身を託する所は宮内官にして、日旦早晩に参内する、乃ち高官の人人と同僚と爲るが故に、宮廷を自由に往来して親しむ、殊に盧と韋との二君子は常に惠顧を垂れ、我をして其の別業に來遊することを許さる、側に聞く所に據れば、景龍の年、天子親しく行幸あり、騎乘山外に駐まるの盛んなりしを、且天子が弟子の禮を執つて、教を乞はるるの光榮を有するの君子なるをや、古の高麗氏の部下には英傑多く、荆山には亦美玉を産すること多く、先哲は皆美玉の如き人なれば、今日の君子も亦然り、後昆も亦然り、其の美玉の如き質を以て侍郎は文昌宮に出仕し、給事は東掖垣に出仕し、各の天子に咫尺して來下す、諸民の上に位する、高官指紳が一門に登つるのみならず、淳良の和風も近き邦族を首とし、庭訓も亦遠き郷邦に及ぶ、其の領地は山河を包んで廣大、其の樹井は川原を竟して正整、巖端には綺檻を廻らして造り、谷口には朱門を開きて通じ、階下に羣峯の頂首を見、雲中には瀑水の源を知る、此の如き形勝の處に此の如き貴人の佩玉が鏘鏘と鳴る音が滿つ、而して鐘を設くること早晨、此に會して舞ふの人良に颯踏、擊鐘は朝より昏に及ぶまで絶えず、時節は正に是二月、寒ならず暄ならず、眞に陽和の節なり、藹藹として樹色は深く、嚶嚶として鳥聲は繁し、然るに自己を顧みるに宿諾に負くの誤を致す、良に芳蓀が節に應じて芳しきに惹つるなり、愚圖愚圖して窮巷を守り、揚揚として樊援する能はず、而かも又考ふ、相互に獨往の客、往くと往かざるに於て道に違ふものにあらず、斯く自ら寛うして冠を脱ぐも情は彌々教きなり、

【餘論】此の篇四十句、一韻到底の作、排律に似て而かも古體なり、前半は章が世傳を敘し、後半は章が家世の美と、別業の景狀を敘し、而して早春の休沐、最後は宿諾に負きしことを敘す、作意明白とす、顧可久曰く、麗雅森整、

和使君五郎西樓望遠思歸 使君五郎が西樓望遠思歸に和す

高樓望所思 目極情未畢 高樓に所思を望む、目極まつて情未だ畢らず、  
 枕上見千里 臆中窺萬室 枕上千里を見、臆中萬室を窺ふ、  
 悠悠長路人 曖曖遠郊日 悠悠たる長路の人、曖曖たり遠郊の日、  
 惆悵極浦外 迢遞孤煙出 惆悵極浦の外、迢遞孤煙出づ、  
 能賦屬上才 思歸同下秩 能賦は上才に屬し、思歸は下秩に同じ、  
 故鄉不可見 雲外空如一 故郷見るべからず、雲外空しく一の如し、

【注解】所思は故郷なり、目極は視力の通ずる限り、情未畢は、目に見える部はず、情は何ほ見んと欲す、枕上、心情の目は千里を見るなり、臆中、心情の目は萬室を窺ふを得るなり、悠悠は香遠の貌、曖曖は暗昧の貌、惆悵は「カナシミヲム」なり、迢遞は高遠の貌、能賦は漢の毛萇が詩に升、高麗賦とあり、下秩は下位と同じ、楚辭九歌に「馳下於後堂」とあり、

【題義】使君即ち今日の公使の官たる五郎なる人が、西樓望遠思歸と題し、故郷を思ふ詩を作りて示さる、乃ち其の意を和して作る、

【大意】使君が高樓に登りて其の思ふ所の郷天を望む、目の達する所は極まるも情に於ては極まらず、情極まらざるが故に枕上に於ても千里を見る、胸中に於ても萬室を窺ふ、目は極まりあるも、情は極まりなければなり、而かも身は悠悠たる長路の人、幾度望むも曖曖として遠郊の日は味し、惘み恨むの心情は極浦の外に馳す、極浦の外何物かあるや、追憶として孤煙の出づるのみ、其の孤煙は我が家の孤煙にはあらず、蓋し其の情を歌ふ詩は古の毛萋の如く、上才の人にあざれば能はず、使君は信に上才の人なり、而かも郷に歸らんと思ふ情は、上才の人と雖も下秩と異ならず、如何せん故郷は見るべからず、雲外杳杳として空しく一様なり、

【餘論】此の篇、右丞としては傑作と言ふべからず、而かも漁洋の『唐賢三昧集』之を收む、黃培芳の如きは、胸中窺萬室の五字を以て佳句と爲すのみ、五古仄韻は右丞最も得意と爲す所なり、

酬黎居士浙川作

曇壁上人  
院走筆成

黎居士が浙川の作に酬ゆ

儂家眞箇去。公定隨儂否。

儂家眞箇に去る、公定んで儂に隨ふや否や、

著處是蓮花。無心變楊柳。

著處是蓮花、無心楊柳變す、

松龕藏藥裏。石屑安茶臼。

松龕藥裏を藏し、石屑茶臼を安す、

氣味當共知。那能不攜手。

氣味當に共に知るべし、那ぞ能く手を攜へざる、

【注解】黎は姓、其人不詳、居士は簡短に佛戒を持つ者の稱、曇壁にも通ず、東坡居士、山谷居士の類なり、浙川は縣名、又川名、曇壁上人は青龍寺の僧、走筆成、半爾にして成る意、儂は吳國の俗語、我と同じ、眞箇は俗語の「ホント」に當る、公は黎居士を指す、著處、住著する處は蓮花の如く清淨にして塵氣無しとなり、佛語とす、無心、楊柳固より無心なるも、春秋其の色の変するを言ふのみ、世相は常に變するを意味す、願可久「莊子」の至樂篇を引きて往するは、右丞の意を得ず、松龕は佛家に用ふる厨子と稱する一種の箱、松樹を以て製せし龕、石屑、潭腹石屑と對語して、屑は口の縁なり、

【題義】黎居士が浙川と題する詩を作り示されたるに因つて之を和す、

【大意】儂は家に向つて眞箇に歸り去る、公は儂と伴に儂が家に來らざるや否や、儂は佛典を讀むに依つて著處是れ蓮花の如く清きを知る、而かも人世は變を以て常理とす、無心の楊柳を見て察し玉へ、儂が家の松龕の裏には藥裏を藏してある、又石屑には茶臼を安置してある、仙道も佛道も共に修することを得べし、其の氣味は儂と公と共に之を知るを得べし、同調の友と手を攜ふるにあらざれば、誰と手を攜ふべけんや、

【餘論】此の詩は仙佛融合の氣味を以て作りしもの、信に高古閑澹の作とす、右丞が詩禪一味の境

以て知るべきなり、

奉寄韋太守陟

韋太守陟に寄せ奉る

荒城自蕭索萬里山河空。

荒城自から蕭索、萬里山河空し、

天高秋日迴嘹唳聞歸鴻。

天高くして秋日迴たり、嘹唳歸鴻を聞く、

寒塘映衰艸高館落疎桐。

寒燈衰艸に映じ、高館疎桐落つ、

臨此歲方晏願景詠悲翁。

此に臨みて歲方に晏れ、景を願ひて悲翁を詠す、

故人不可見寂寞平林東。

故人見るべからず、寂寞たり平林の東

【注解】奉寄、長上に用ふる語、韋は姓、太守は官名、陟は名、劉昫の「唐書」九十二に、韋、字は殷卿、代州關中名族たり、陟、書として讀まざるは無く、王維、崔顥、盧象と最も善し、張九齡、尙書と爲るに及んで、陟は中書舍人と爲る、後、吏部侍郎、襄陽、鍾離、河東、吳郡、揚州等の太守と爲る、常に李林甫、楊國忠が天下を亂すを憂へ、歎じて曰く我が道此に窮するかと、上元元年八月、饒州に卒す、年六十五、右丞は此の前年に卒す、但し此の時、韋が何州の太守たりしやは判知する能はず、蕭索は蕭寂、蕭條と同じ、隴の江文通、秋日蕭索とありモノサビシしなり、迴は迴還、迴還と成語して「ハルカ」の意味なり、嘹唳は鴻の鳴聲を形容す、映は映輝、映明と成語して、外物が「ウツリアキラカ」の意味なり、高館、牆上に在るが故に高館なり、晏は晩なり、「漢書」に天清日晏とあり、願景は日影を願ふるなり、悲翁は漢代樂府の題、軍樂隊の歌ふ曲、悲歌慷慨の意を含む、今其の悲翁の思を

詠すとなり、故人は漢の樂府に故人工織素とありて、舊人、舊妻と言ふがごとし、友人の意義に用ふるは六朝以後ならん、

【題義】時節と居處との蕭索たる状と、自己の感慨とを敍し、以て韋太守陟に寄呈するなり、

【大意】亂後の荒城は自然と萬事蕭索たり、目の極まる處、萬里の山河も亦空闊なり、天を望めば高くして秋の日は信に迴還なり、忽ち聞く嘹唳として北歸の鴻聲を、鴻已に北歸の時節、寒塘の上の草も衰色を帯びて日影に映じ、塘上の高館の庭には疎桐の葉が落つ、此の際に臨んで乃ち知る歲も方に晩に向ふを、日影を願ひながら悲翁の流思を詠す、而かも獨詠獨誦、故人の共に興を遣るなし、故人は平林の東に在るなれども、之を望むも見るべからず、寂寞の情に堪へず、

【餘論】此の篇「唐賢三昧集」に載す、明の顧可久曰く、歸絕斬絶、清の黃培芳曰く六朝人名句、足二千古者、莫不自然、月映清淮流、疎雨滴梧桐、不能專美、余曰ふ何遜の露濕寒塘艸、元帝の井上落疎桐、右丞は此等先賢を粉本として學びしことは明白なり、而かも先賢を凌駕して上る、品格の高潔なる、六朝人の及ぶ所にあらず、

林園卽事寄舍弟統

林園卽事、舍弟統に寄す

寓目一蕭散消憂冀俄頃。

目を寓すれば一に蕭散、憂を消するは俄頃を冀ふ、

青艸蕭澄。白雲移翠嶺。

青艸蕭蕭。澄波上。白雲翠嶺。に移る。

後浦通河。渭前山包鄜野。

後浦河渭に通じ、前山鄜野を包む。

松含風裏聲。花對池中影。

松は含む風裏の聲、花は對す池中の影。

地多齊后瘡。人帶荊州瘻。

地は齊後の瘡多く、人は荊州の瘻を帶ぶ。

徒思赤筆書。詎有丹砂井。

徒らに思ふ赤筆の書、詎ぞ丹砂の井あらん。

心悲常欲絕。髮亂不能整。

心悲みて常に絶えんと欲す、髮亂れて整ふる能はず。

青簾日何長。閒門晝方靜。

青簾日何ぞ長き、閒門晝方に靜。

頽思茅簷下。彌傷好風景。

頽思茅簷の下、彌よ傷む好風景。

【注解】當日は日本前方に寄せるなり、蕭散は「モノサビシ」なり、俄頃も暫時と同義、前は蕭瑟、澄波の上に青艸が一面に整ふなり、移は白雲が右嶺より左嶺に飛び移るなり、浦は水濱なり、浦を河に作る本あり、非なり、河渭は黄河と渭水、渭水の源は甘肅より出で、陝西に至りて大川と爲り、洛水と合して黄河に入る、鄜野、鄜は春秋時代、周の名、今の湖北省宜城縣の地、鄜は春秋時代、楚の都、今の湖北省江陵縣の西北、齊后瘡、「晏子春秋」に、齊景公、疥且瘡、期年不已とあり、瘡は熱病なり、荊州瘻、晉の杜預は鎮南大將軍荊州諸軍事と爲る、杜預は頭に瘻ありしなり、共に風土氣候の然らしむるを言ふ、赤筆書、「漢官儀」に尚書令僕丞郎、月給赤管大筆一雙とあり、赤色の管にて製したる筆、丹砂井は晉の葛洪仙人者は「抱朴子」に出づ、彌井得「丹砂」十斛、此の水を飲む者は壽長しとなり、青簾は竹を編みて製せし夏日の敷物なり、頽思は「抱朴子」に憂道者所以含悲而頽思也とあり、

【題義】無事自家の林園に在つて、思ふまま、見たままを記して、以て舍弟の就に寄示したるなり、

【大意】自分の林園中を徜徉して、先づ目を放つて四方を眺むれば、甲地も乙地も一般に蕭索たり、心の憂を暫時でも消散せしめんと思つて見れば、低き處の青艸は蕭たる澄波の上に滿ち、高き處の白雲は次第に翠嶺に飛び移る、林園の後浦は河渭の二水に通じて流は長く、林園の前山は鄜野の二園を包んで廣く、而して松は護護として風裏の聲を爲し、花は艷艷として池中の影、即ち花自身の影に對す、土地の氣候が悪ければ、齊後の如き瘡に罹り易く、又土地の人に荊州の如き瘻の多きも氣候の加減なり、是に於てか赤筆の書を読まんと思ふ念が起り、又丹砂の井水を飲まんと思ふ念が生ず、厭ふべき總ての氣分を轉換せんが爲なり、此の如きことを思ふが爲め、心中絶え入る如きの状態と爲る、頭髮も淋せざるが故に整はず、青簾の上に坐し、唯日の長きを覺ゆるのみ、客も來らざるが故に門も亦晝靜閑なり、此の如く思が頽れるのみにて茅簷の下に立てば、好風景が反つて我が傷懷を増すのみ、

【餘論】即事と題するもの、多くは即景、即情に出で、感慨悲痛に出でず、然るに此の篇、句句感慨ならざるは無し、就に對し言はざるべからざる爲めに然らんかと考ふ、乃ち情を主とし、景は客に屬す、青、白、赤、丹の色彩も亦注意して讀むべし、願曰始中終、文斷意不斷、作法如此、



贈從弟司庫員外綽

從弟司庫員外綽に贈る

少年識事淺強學干名利。

少年事を識ること淺く、強ひて干名利を學ぶ、

徒聞躍馬年苦無出人智。

徒らに聞く躍馬の年、苦む出人の智無きことを、

卽事豈徒言累官非不試。

卽事豈徒言ならんや、累官試みざるにあらず、

既寡遂性歡恐招負時累。

既に遂性の歡寡し、恐らくは負時の累を招かん、

清冬見遠山積雪凝蒼翠。

清冬遠山を見れば、積雪蒼翠を凝らす、

皓然出東林發我遺世意。

皓然として東林を出で、我が遺世の意を發す、

惠連素清賞夙語塵外事。

惠連素清賞、夙く語らん塵外の事、

欲緩攜手期流年一何駛。

手を攜手するの期を緩うせんと欲す、流年一に何ぞ駛き、

【注解】從弟、年下の「イトコ」なり、司庫員外、軍事を處理する役を兵部尙書と曰ふ、庫部は其の下に屬して、軍督の會計を處理す、初め庫部員外郎と稱す、後改めて司庫と爲す、綽は名、少年、二十歳前後を曰ふ、強は俗語の無理と同じ、干は犯すなり、求むなり、自ら進みて犯し求むるなり、躍馬年、史記列傳十九、范雎齊澤列傳に、齊澤者燕人也、躍馬疾驅、黃金之印、結綽綽於要、綽、漢人主之前、食肉高貴、四十三年足矣とあり、從言は從言と同じ、累官、大業系に始まり、司倉參軍、監倉御史等と種種の官を經たるなり、遂性歡、本性を遂行する中心の歡、負時累、「漢書手武紀」に士或有負俗之累而立功名とあり、遺世意、世事紛紜を絶

て「アスル」の意なり、惠連は晉人謝靈運の弟、右丞自ら靈運に比し、綽を惠連に比す、塵外事、「晉謝安傳」に、始居塵外高僧人間とあり、駛は馳念、駛走なり、

【題義】從弟に贈るに、我が少年時代よりの志を敍べて、以て從弟と我とは、其の本性出世間にあるを言ふなり、

【大意】少年の時は萬事に於て識が淺く、無理なる事を仕ても名利を干犯するに至る、古人にも已に揚揚と得意に馬を躍らせ走りし人あり、我も斯くの如くならんと思へども、彼は出人の智あり、我は出人の智無し、率直に口に出すことも空言にはあらず、必ずや遂げんと欲す、是の故に頻りに考試を受けて種種の官を經來れり、而かも今日に至りて顧みれば總て性を遂ぐるの歡喜にはあらず、本性に背きてまで世事に營營としては、時代にも負き、又天時にも負くの累を招かん、時節今や冬なり、平生は蒼翠の遠山も、只今は白雪皓然、惠連が昔游賞せし東林の清素を見る、是に至りて、我をして遺世の意を發せしむ、惠連は昔自然を清賞せし人、兄の靈運と共に塵外の事を話せし人なり、今、我と君と手を攜手して、緩緩と此の期を賞せんと欲するも、考ふる邊も無きうちに年華は電光の如く匆匆去つて駛走する、

【餘論】此の篇、前半は塵中事を敍し、後半は塵外事を敍し、右丞が平生の志、全く此の八十字を出でず、顧可久曰く、翻淺意而置之深、結句明用「蔡澤語意」、古雅醇澹と、良に我が意を獲たり、



諸家の選本、此を録せざるは何ぞや、

座上走筆贈薛璩慕容損

座上筆を走らし、薛璩、慕容損に贈る、

希世無高節、絕跡有卑棲。

希世高節無く、絶跡卑棲あり、

君徒視人文、吾固和天倪。

君徒らに人文を視る、吾固より天倪に和す、

緬然萬物始、及與羣物齊。

緬然たり萬物の始、羣物と齊しきに及ぶ、

分地依后稷、用天信重黎。

地を分けて后稷に依り、天を用つて重黎を信す、

春風何豫人、令我思東溪。

春風何ぞ人を豫ましむる、我をして東溪を思はしむ、

艸色有佳意、花枝稍含蕤。

艸色佳意あり、花枝稍蕤を含む、

夏待風景好、與君藉萋萋。

夏に風景の好きを待つて、君と萋萋を藉まん、

【注解】座上、三人對坐の席上にて筆削賦するもの、希世は二義あるが、今は「莊子」を意を以て、「世ニオモレル」の義なり、絶跡、人に知られざる處に身を過る、人文、「周易」に、聖乎人文、以化成天下、人文とは詩書禮樂を謂ふ、天倪、「莊子寓言」に和之、以天倪とあり、倪は弱小の義、臂膊の氣を受けざるもの、自然の分際を謂ふ、緬然、茫々たる貌、萬物始、「老子」に無名者萬物之始とあり、羣物、萬物と字義同じ、后稷、上古聖人の名、民衆の爲め封疆を畫したる人、重黎、上古聖人の名、民衆の爲め天文を安排

したる人、豫人、豫は逸豫と成語して樂の義なり、東溪は西溪にあらず、春日なればなり、萋萋、草の盛なり、

【題義】三人が對坐しての席上にて作り、薛璩と慕容損の二人に贈る、薛璩の事は前章に示せり、慕容は姓、名は損、此の人傳不詳、

【大意】世に希る人に高節の人は無く、塵事に跡を絶つ人には、卑しく棲むの士あり、君等は徒形の上には表はれたる人文のみを熟視するが、僕は未だ形として表はれざる天倪を高和せんと欲す、乃ち緬然たる萬物の始めて起るを考へて見て、人文は紛然としてあるが、それは時代降下したのちの事、根本は固より一、一なれば總て齊しからざるべからず、上古に后稷なる聖人出でて、封疆を列し、界畔を畫し、以て土地の宜しき所を分配し、土を開き、穀を殖え、又重黎なる聖人出でて、地と天とを分判して、天は地の如く下に在ること無からしむ、而して今や春風の吹き満つるとき、自然は人を豫ましむるの期なり、東溪の遊びの可きを思はざるを得ず、艸色は萋萋として良に佳意あり、花枝も亦枝葉を生せんとするの態を含む、只今直ぐ遊ぶも可いが、夏に仲春風景の好期を待つて、二君と共に草の萋萋たる上を踏んで遊ばん、

【餘論】此の篇、一韻到底の作、前半は其の人の平生志す所を敘し、後半は其の時の賞すべきを敘す、願可久曰く、用韻好有筆力、高古、語有含蓄、蓋言欲隱居以事澹淡也、

贈李頎

李頎に贈る

聞君餌丹砂。甚有好顏色。  
不知從今去。幾時生羽翼。  
王母翳華芝。望爾崑崙側。  
文螭從赤豹。萬里方一息。  
悲哉世上人。甘此羶腥食。

聞く君が丹砂を餌とすと、甚だ好顏色あり、知らず今より去つて、幾時か羽翼を生せん、王母華芝を翳して、爾を崑崙の側に望まん、文螭赤豹を従へ、萬里方に一息、悲しい哉世上の人、此の羶腥の食に甘んずることを、

【注解】李頎は東川の人、開元十三年の道士、詩集三卷あり、丹砂は前に併べり、餌は食物の總稱、好顏色、丹砂を服する者は紫の如き顔色と爲る、羽翼、鶴の文帝、身輕生羽翼の句あり、王母は「山海經」に出づ、崑崙芝、嶺は嶽すなり、華芝は美麗なる蕨なり、羶腥にはあらず、爾は李頎、崑崙、「山海經」に西海之南、流沙之濱、赤水之後、黑水之前、有大山、名曰崑崙之邱」とあり、文螭、龍の角なきものを螭と曰ふ、文は麟の美なるを曰ふ、赤豹、「楚辭」に乘赤豹一分從文狸」とあり、赤は豹の毛色を曰ふ、羶腥、漢武帝外傳に、組五穀去羶腥」とあり、羶腥はなまぐさ肉なり、

【大意】李頎が近來口にするを、右丞が聞きしに因つて此の詩を贈る、近來君は仙人の靈藥たる丹砂を服餌するが爲めに、甚だ顔色が美好と爲ると、計るに今日より後、仙人の如く羽翼を生じて、西王母と稱する靈女が住する崑崙の側に行くならん、王母の方でも華芝を翳して以て君の來るを望

み見ん、而して君は文螭なる靈龍に乗り、赤豹なる靈獸を従へて、崑崙まで萬里なるも一息に飛んで往かん、然るに悲しい哉、世上の人間は、臭氣堪へ難き肉類を食うて、此を甘しと心得て居る、  
【餘論】李頎は道士や高僧と方外の交多く、真に右丞と思想を一にせし詩人なり、其の作る所、王母歌、百七十字の時は真に精妙を極む、又、始知物外情、管絃同芻狗の句あり、其の人右丞稱する所に違はざるなり、願可久曰く高古、

贈劉藍田

劉藍田に贈る

籬中犬迎吠。出屋候荆扉。  
歲晏輸井稅。山邨人夜歸。  
晚田始家食。餘布成我衣。  
詎肯無公事。煩君問是非。

籬中犬迎へ吠ゆ、屋を出でて荆扉を候ふ、歲晏れて井稅を輸し、山邨人夜歸る、晚田始めて家食、餘布我が衣を成す、詎ぞ肯て公事無けん、君を煩はして是非を問ふ、

【注解】荆扉は道注、籬注、劉注の三本、樊扉に作る、余は「唐賢三集集」河岳英靈集の荆扉を取る、荆扉明の句に、白日掩荆扉」とあり、歲晏は歲晚、井稅「禮記」に六十四井出田稅」とあり、家食「易」に大畜不家食吉」とあり、餘布、漢の揚雄「羽獵賦」に、女有餘布、男有餘粟、國家殷富、上下交足」とあり、公事「史記仲尼弟子傳」に、子羽行不由徑、非公事不見、荆大夫」とあり、

是非「莊子」に彼亦一是非、此亦一是非とあり、

【題義】劉は姓、藍田は縣名としては京兆府に屬す、縣の知府の敬稱語なるや、劉の號なるや未詳、  
【大意】右丞が近況を敘して、劉の意見を徵するなり、誰人かが家に來る時には離の中から犬が迎へて吠ゆ、因つて主人が屋を出でて荆扉の傍に候ふ、時正に歳晚なれば稅務累に國稅を納めて人が歸り來る、山邨として夜の路閉なり、稅納米は早稻にて、家食する米は晚稻なり、布類も賣れるものは賣り、餘布を以て我が家人の衣を製る、良民の業は是れにて足る、然るに公事も往往起る、自分は其の是非を判斷するに苦しむ、因つて君が意見を教へて呉れよ、

【餘論】漢士の詩は、漢詩、六朝詩、唐詩、宋詩、乃至元明清を問はず、名篇と稱せらるるもの、多く其の意味に於て解すべく、解すべからざる所に其の妙を存するもの如し、文章の如く、次第順序ありて、甲より乙、乙より丙と、日常の用談を爲す如きものにあらず、是の故に名篇に至りては、詩意を記する條下に於て、大に備まざるを得ざること往往あり、是れは余一人のみならず、他諸君子も此の感を懐かると思ふ、乃ち此の篇の如きも然り、前半は信に山邨の事情を敘して明白なれど、後半に至り、又無きが如く、解釋を二三にするも亦通ずるなり、要するに漢士の詩は、詩其のもの然るにて、作者自身も自作を明白に注する能はざるべし、況んや千年後の人が焉んぞ明白に開示するを得んや、讀者も有意無意の間に其の妙味を嘗めんことを要す、此の篇漁洋の「唐賢三昧

集」開卷第一に置く、漁洋の傾倒知る可し、顧可久曰く、字字含意、急微繁苦之意、見於言外、後半に重きを置いての評洵に然るべし、

贈房盧氏瑄

房盧氏瑄に贈る

達人無不可忘己愛蒼生。  
豈復小千室絃歌在兩楹。  
浮人日已歸但坐事農畊。  
桑榆鬱相望邑里多雞鳴。  
秋山一何淨蒼翠臨寒城。  
視事兼偃臥對書不簪纓。  
蕭條人吏疎鳥雀下空庭。  
鄙夫心所向晚節異平生。  
將從海岳居守靜解天刑。

達人は不可無し、己を忘れて蒼生を愛す、  
豈復千室を小なりとせんや、絃歌兩楹に在り、  
浮人日に已に歸り、但坐して農畊を事とす、  
桑榆鬱として相望む、邑里雞鳴多し、  
秋山一に何ぞ淨き、蒼翠寒城に臨む、  
事を視て兼ねて偃臥し、書に對して簪纓せず、  
蕭條として人吏疎なり、鳥雀空庭に下る、  
鄙夫心の向ふ所、晚節平生に異なり、  
將に海岳の居に従つて、靜を守りて天刑を解かんとす、

或可累安邑茅茨君試營

或は安邑を累はす可し、茅茨君試みに營せよ、

【注解】達人、偉人、五人と同義なり。買置職試に達人大觀分、物無不可とあり、蒼生、人民百姓を謂ふ、草木の葺蒼然として、兼きに備ふ、千室は千戸程度の小郡を謂ふ、兩楹、階間也と注して、キザハシ、堂に登る道なり、浮人、浮浪人、四方に流離せし人、但坐、坐は坐臥の坐にあらず、專心に耕作すれば可となり、桑榆は落日と晩年の意義に多く用ふるが、今は字の如く桑と榆なり、蒼翠、前の桑榆の韻然たるに對す、視事、前漢書七十六の王莽傳に今太守視事已一月とあり、政事を監視するなり、僎臥、アナムケニネルなり、『列子』に、紀昌師、僎臥其妻之機下とあり、不體、體は「カンザシ」、體は「カンムシ」なり、官吏としての威儀を整へざるなり、人吏、役所に充の役人が居らぬなり、空庭、役所として空庭なるは事を断へる人なければなり、陽夫、右丞自分を諷して謂ふ、晩節、晩年を謂ふ、守節、晉書七十五、王涯傳に開門守節、不交當世とあり、天刑、天罰と同じ、安邑、高士傳(卷)太原閻仲叔、博士に徵さるるも至らず、安邑に各居す、老病家貧し、肉を得る能はず、日に積貯一片を買ふ、屨者與ふることを得んぜず、安邑の令、聞いて吏をして常に給せしむ、仲叔、之を知つて曰く、豈口腹を以て安邑を累はさんや、遂に去る、茅茨、茅を以て屋を覆ふなり、茅茨不剪、土階三等、

【題義】房瑄と稱する人、盧氏縣の知事と爲つて、善政を行ひ、縣民皆其の徳に服するを聞いて、右丞が房が事を嘆じ、并せて自分の情懷を敍して以て之に贈る、

【大意】天下の達人は、爲す所、何事も不可なるもの無し、己を忘れて人を愛するの情あれば、盧氏縣の如き所謂千室極めて小縣なれども、小縣と云ふ様な氣持は少しも持たぬ、但治めんことのみ勞す、而して自分を慰め且つ人を乗げる絃歌は常に兩楹に在り、縣外に流浪せし人も、良長官あると

聞いて、日々に皆歸り來り、安心して農耕を事とす、既にして桑榆も鬱鬱然として繁茂するに至り、從つて邑も里も餘裕を生じ、家家に雞鳴を聞くの繁榮を見るに至る、秋日になれば房君は秋山の清淨なるを味ひ、而して山の蒼翠は滴ることと寒城に臨むの美あり、政事を監視するにも餘裕多ければ、僎臥の悠悠たる狀もあり、書物を讀むの暇を惜む爲め鬱鬱なぞも修整する邊も無し、而して官署には役人が多く入用ならざれば、從つて蕭條たる景色なり、蕭條たる景色なるが故に、空庭には鳥雀が啾啾として來る、僕の事を考へて見れば、今日心の向ふ所、即ち晩年の考へは平生の如くならず、是に於て所謂海嶽の如き自然の境に住して、靜趣を味ひ、以て天罰を解かんことを思ふ、昔仲叔なる人は知事を累はすを氣の毒に思ひしが、僕は君を累はすやも料られず、請ふ、君は我が爲めに、茅茨即ち疎造なる家を營んで呉れ玉へ、

【餘論】此の篇、一韻到底の作、但し九青と七陽とを同用し、前十四句は房氏が人物の潔白を敍し、後六句は自身の心懷を敍す、右丞平生の志、彰彰として視るが如し、秋山十字、殊に住句とす、

贈祖三詠

祖三詠に贈る

蟪蛄挂虚牖蟋蟀鳴前除

蟪蛄虚牖に挂り、蟋蟀前除に鳴く、

歲晏涼風至，君子復何如。

歲晏れて涼風至る、君子復何如。

高館閑無人，離居不可道。

高館閑として人無し、離居道ふ可からず。

閒門寂已閉，落日照秋艸。

閒門寂として已に閉ぢ、落日秋艸を照らす。

雖有近音信，千里阻河關。

近音信有りと雖も、千里河關を阻つ。

中復客汝穎，去年歸舊山。

中復汝穎に客たり、去年舊山に歸る。

結交二十載，不得一日展。

交を結ぶ二十載、一日も展ぶるを得ず。

貧病子既深，契闊余不淺。

貧病子既に深し、契闊余淺からず。

仲秋雖未歸，暮秋以爲期。

仲秋未だ歸らずと雖も、暮秋以て期と爲ん。

良會詎幾日，終日長相思。

良會詎ぞ幾日ぞ、終日長く相思ふ。

【注解】蠅蚋、『詩經東山篇』に蠅蚋在戸とあり、蜘蛛の小ましくして、脚の長さも、俗呼んで蠅子と爲す、虛屬、壁にあけたる窟なり、蟋蟀、『詩經唐風』に蟋蟀在堂とあり、俗に香露殿と稱する蟲、『詩經注』にも光澤如漆とあり、前除キキダハシナリ、歲晏は秋晩なり、歲除、歲終にはあらず、涼風至、『禮記月令』に、孟秋之月涼風至とあり、秋七月以後の風なり、君子、男兒の美稱、閒、閑寂と成語して、人の氣配の無きを謂ふ、離居、漢の古詩に、同心而離居とあり、閒門、人の出入劇しからざる門、阻、阻隔なり、汝穎、汝州の臨汝郡と潁州の汝陰郡、去年、何年なるや判然たらず、契闊、『詩經邶風』に、生死契闊、與子成說とあり、勤め

苦むなり、又平生の無沙汰なも意味す、仲秋、八月なり、暮秋、九月なり、良會、曹子建が『洛神賦』に、悼良會之永絕一兮とあり、

【題義】祖詠は洛陽の人、開元十二年の進士、三は祖家親族の順序から稱する、乃ち敬稱語なり、祖詠の詩は『全唐詩』卷五に在り、

【大意】蠅蚋が網を張りて壁の側に挂る、又蟋蟀が前除の下に鳴く、春も夏も已に過ぎ、歳は正に晏に向ふ、乃ち孟秋にて涼風至るの期、君子の起居は何如である、君が舊居なりし高館を窺へば、閑寂として人影無し、君と我と離居して居る我が心思は道ふべき辭なし、閒門は人の出入少きを以て開かず、落日の斜輝のみ秋草の上を照らす、近來君の音信には接したれども、千里の遠き、對面する能はず、然のみならず僕は汝穎の兩地に客寓して居りしが、去年漸く舊山に歸るを得たり、思へば君と結交の久しき二十載に及ぶ、而かも一日として悠悠と厚意を展べしこと無し、君も貧と病とが附き纏ふ、僕も勤苦頗る淺からず、而かも君は仲秋に歸らずと言はるるが、暮秋の九月には必ず歸り玉へ、良會は思ふに幾日にあるや、只今は長く相思に耽るのみ、

【餘論】此の篇、五度換韻して作る、節序の變動、殊に秋日の蕭條たるに感じ、而して友を懷ふの情に至る、深情遠意、餘韻窮り無し、漁洋の歸命頂禮する所、誰人も亦排除すべからず、黃培芳曰く、取三材三百篇、便覺色味俱高、此不可不知、此の評能く當る、願可久が此の詩を重視せざる如き口



物なるは、疑ふ可し、

春夜竹亭贈錢少府歸藍田 春夜竹亭に錢少府が藍田に歸るに贈る

夜靜羣動息時聞隔林犬 夜靜にして羣動息み、時に聞く林を隔つる犬を、

却憶山中時人家澗西遠 却つて憶ふ山中の時、人家澗西に遠きを、

羨君明發去采蕨輕軒冕 羨む君が明發に去り、蕨を采りて軒冕を輕んずるを、

【注解】錢は姓、少府は官名、一縣の長の次官なり、藍田は縣名、羣動息、羣明の時に、日入羣動息とあり、人寐るが故に東聲も馬聲も皆息なり、山中、城中に於て羣動息、乃ち山中の靜閑を憶ふなり、明發、孔穎達の『毛詩正義』に、夜地面開、至、且而明、明地發後、日之明發とあり、采蕨、蕨は「ワラビ」、山野に自生する草、詩經「采芣苢」、言采、其蕨とあり、軒冕、軒は大官の車、冕は大官の冠、

【題義】春夜竹亭に會して、錢起と云ふ友人が藍田縣に歸るに就いて此の詩を贈る、人の歸に對する多くは送の字を以てす、今贈とあるも意味に於て異なる所なし、錢は吳興即ち今日の浙江省の人、而して藍田は陝西省、故に歸と曰ふも故郷に歸るにあらず、藍田に歸任することならんと思はる、蓋し史に明記無し、斷言する能はず、

【大意】竹亭に會する今夜は實に靜かにして、晝間聞く所の總ての音響は全く息む、但時ありて犬が猶猶と吠ゆる聲を聞くのみ、此の犬聲を聞いて憶ひ出すことは、曾て山中に於て今夜の如き景色を知る、山中にて犬の吠ゆる人家は何處であると尋ねれば、則ち澗の西方に在つて遠きなり、君は明日早晩に此の地を去つて、閑寂の處に歸り、蕨を采つて以て悠悠、彼の屑屑たる顯官高位の類を輕んずるは良に羨むに勝へざるなり、

【餘論】此の篇、短古として最上乘の作なり、此の詩を讀む者、兩目を閉ぢ、但口に誦し、心に會すれば、幽景と遠情と無盡の味あるを覺らん、蓋し一言附加せざるべからざるは、前に或は歸任にあらずやと述べしも、結句の意味を三思すれば、一野人と爲つて官吏を罷めたる如くにも想像が出来る、然りと雖も、題目に少府の官名を用ふるに依つて、之を案すれば、官を罷めたとも思はれず、官吏と爲つて居つても官吏の臭味無き人と見れば、何等の支障無しと亦解し得るなり、諸本皆錢起の詩を附して載す、除くを得ず、茲に掲ぐ、山月隨客來、主人興不淺、今宵竹林下、誰覺花源遠、惆悵曙鶯啼、孤雲還絕巖、酬王維春夜竹亭贈別、譯は、山月客に隨つて來る、主人興淺からず、今宵竹林の下、誰か覺えん花源の遠きを、惆悵す曙鶯啼き、孤雲絶巖に還る、右丞が詩を距ること遠し、



戲贈張五弟諶 三首

戲れに張五弟諶に贈る 三首

吾弟東山時心尙一何遠

吾が弟東山の時、心尙一に何ぞ遠き、

日高猶自臥鐘動始能飯

日高くして猶自ら臥し、鐘動きて始めて能く飯す、

領上髮未梳牀頭書不卷

領上髮未だ梳らず、牀頭書卷かす、

清川興悠悠空林對偃蹇

清川興悠悠、空林對して偃蹇、

青苔石上淨細草松下軟

青苔石上に淨く、細草松下に軟かなり、

窗外鳥聲聞階前虎心善

窗外鳥聲聞、階前虎心善、

徒然萬像多澹爾太虛緬

徒然萬像多し、澹爾として太虛緬なり、

一知與物平自願爲人淺

一知物と平かなるも、自願するに人と爲るの淺きを、

對君忽自得浮念不煩遣

君に對して忽ち自得す、浮念遣ることを煩はさす、

【注解】戲、長上に對しては、戲贈せざるも、友人以下に對しては文辭戲を爲す。張は姓、五弟、張家の五番目の弟なり、諶は名、吾弟、右丞が弟と曰ふにあらす、親しく交はる年少を總て吾弟と稱す、東山、吾の謝安が住せし山、會稽の地、髮未梳、漢の揚雄の文に、頭蓬不<sub>レ</sub>自梳とあり、興、韻本に興に作るは誤る、偃蹇、傲世の態度を謂ふ、郭璞が「寄傲」に、莊周偃蹇於漆園とあり、虎心善、南齊の高僧宏明、早晨に坐禪す、虎、嘗に室内に臥すと、遺世の「法苑珠林」卷五にあり、徒然、動かさざる貌、何事し無き

貌、無益の貌、三義を有するが、今は動かさざる貌を取る、澹爾、靜かに安き貌、太虚は天なり、「莊子」に、道不<sub>レ</sub>游<sub>二</sub>太虚<sub>一</sub>とあり、浮念、浮世塵念と成語して佛語なり、

【大意】吾弟が東山に住居せし時の心尙を僕は能く知つて居る、君の心尙は吾の謝安が東山の石室に坐して、股の伯夷を慕うて嘆じて何ぞ遠きやと曰ひしが如く、君は其の謝安を欽慕する、欽慕するが故に當時謝安が行跡を其のまま實行する、乃ち東山に日高く登るに猶臥褥に在り、東山に鐘の聲が動くを聞いて始めて食膳に就き、領上に亂れ垂れる頭髮も梳を入れず、牀頭に讀み残したる書物も巻かず、門を出で去つて或は清川に俯瞰して悠悠と興懷を遣り、或は空林に長嘯して偃蹇の態度を爲し、或は青苔の滿つる石上の淨きに坐し、或は細草の多き松下の軟かきに坐す、人は無心なるが故に鳥聲は啾啾として聽外に悠閒なり、人に害心無きが故に虎の如き猛獸も階前に善柔なり、眼を轉じて萬像を観れば、各の其の動かざる徳を具す、天を仰げば太虚は終古も安く靜かな徳を具す、唯一の理を知れば、萬物總て平和なるを知る、君は此の如く通達なるが、僕が自身を顧みるに良に人間が淺薄であつた、君に對面してから忽然として自得した、浮世の塵念を自然に任せて別に消遣せんと煩勞する要なし、

【餘論】此の篇も一韻を以て成る、張が東山に臥す所以は、謝安が東山に臥せし同一なりと云ふの主旨より、謝安に關する故事を運用して、而かも痕跡を表現せず、全體張を敍し、結末の三句のみ自

分の事を敍す、淨、軟、閒、善、細、平等の字、移して以て此の詩の品格を評すべし、爲人淺の古訓に「人ノ爲ニ淺シ」とあり、余は用ひず、願評に、佛氏平等正覺意とあり、平等圓融意と改むべきなり、

張弟五車書、讀書仍隱居。

張弟五車の書、書を讀んで仍隱居す、

染翰過草聖、賦詩輕子虛。

翰を染めて草聖に過ぎ、詩を賦して子虚を輕んず、

閉門二室下、隱居十年餘。

門を閉ざす二室の下、隱居十年餘、

宛是野人也、時從漁父魚。

宛として野人なり、時に漁父に從つて魚とる、

秋風日蕭索、五柳高且疎。

秋風日に蕭索、五柳高くして且疎なり、

望此去人世、渡水向吾廬。

此を望んで人世を去り、水を渡りて吾廬に向ふ、

歲晏同攜手、只應君與予。

歲晏に同じく手を攜ふるは、只應に君と予となるべし、

【注解】五車書、莊子「天下三十三」に、惠施多方、其書五車とあり、五輛の車に積載する程度に書の多きを曰ふ、染翰、染は墨汁、翰は筆、草聖、晉の張伯英を指す、子虛、漢の司馬相如、上林子虚賦を爲る、二室、嵩山の東を太室と謂ひ、西を少室と謂ふ、五柳、陶淵明に五柳先生傳あり、

【大意】張弟は書物を多く藏して居る、其の多くの書を讀破するも世に賣るのではなく、仍隱れて居る、時ありて字を書けば晉の張伯英の如き草聖を凌ぐの妙あり、又詩を賦すれば漢の司馬相如の如き文章を輕んずるの概あり、而して門を閉ちて嵩山の下を離れず、此の處に隱居してより十年餘を経、宛然として一野人の觀あり、時ありては漁父に從つて魚を捕へて江に向ふ、今や秋風も日に蕭索と爲り、門前の五柳も葉が落ちて骨高く枝は疎と爲る、此の五柳を望みつつ漁父の人世と別れ、水を渡り吾が嵩山下の廬に歸り向ふ、歲晏に若し手を攜へて遊ぶ者あらば、それは君と予との二人なり、

【餘論】此の篇も一韻の作、前の十八句に對し、此は十四句なり、前の詩を以て、佛菩薩の格に譬ふれば、此は辟支佛、聲聞に譬ふべし、「唐賢三昧集」前詩を採つて、此を取らず、漁洋の目高しと謂ふべし、

設置守兔兔、垂釣伺游鱗。

置を設けて兔兔を守り、釣を垂れて游鱗を伺ふ、

此是安口腹、非關慕隱倫。

此は是口腹を安んず、隱倫を慕ふに關するにあらず、

吾生好清靜、蔬食去情塵。

吾が生清靜を好む、蔬食情塵を去る、

今子方豪蕩、思爲鼎食人。

今子方に豪蕩、思ふ鼎食の人と爲らんことを、

我家南山下。動息自遺身。

我は南山の下に家し、動息自ら身を遺る、

入鳥不相亂。見獸皆相親。

鳥に入りて相亂れず、獸を見て皆相親しむ、

雲霞成伴侶。虛白侍衣巾。

雲霞伴侶と成り、虛白衣巾に侍す、

何事須夫子。邀予谷口眞。

何事ぞ夫子を須つて、予を邀ふ谷口の眞、

【注解】設置、置は阿、俗に兎智と稱す。詩周南に、東君見置とあり、後見、詩小雅に、躍躍見兎とあり、置は彼と同じ、大ルキ見なり、環の曲曲の詩、伐木清江置設置守、置見、此の句を用ふ、游、水中を浮游する魚族、隱、世を逃れて山水に游ぶ人、蔬食、野菜を曰ふ、情塵、佛語なり、人間の煩惱を謂ふ、齋、菜蔬せんと欲する態度を謂ふ、期食、美食なり、漢の主父偃云ふ、生不五期食、死即五期菜と、動息、日常の生活なり、入鳥、莊子外篇山木二十に、入獸不亂、入鳥不亂、行鳥獸不惑、況人乎とあり、虛白、莊子人間世に、唯夜則者虛室生白とあり、心が虚なるときは純白自から生じて福あるに喩ふ、夫子、先生、長者の尊稱、谷口眞、高士傳に、鄭模、字は子眞、各日の人、修道靜默、世其の清高に服す、漢の成帝の世、元舅大將軍王鳳、體を以て之を稱す、遂に屈せず、揚雄盛んに其德を稱して曰く、各日の鄭子眞、巖石の下に居し、名、京師に振ふと、

【大意】置を設けて置きて兎兎の入るのを守つて居り、或は釣竿を垂れて魚族の躍るを伺うて居る、此は一身を保つ爲めの生計である、他の隱倫の如く清閑の具に供するとは異なる、而して吾は生來臭穢を嫌うて清静を好む、是の故に肉食より専ら菜食を好む、菜食すれば自然と人欲特に性の欲を去る、然るに君の今日は世榮に向つて意氣の盛んなる状を見る、思ふに必ず君は肉食の出來る人と爲ら

ん、僕が今日の現状を説かば、家は終南山の下に在りて、入にも出にも、動にも息にも、何の求むる所無く、無我の境界に處す、無我の境の人なればこそ、鳥羣の中に入るも、鳥は驚き亂るること無く、獸羣に入るも亦同機、皆相親しむを得、遊ぶには朱門綺閣ならずして、山水に雲霞を伴侶と爲す、是の故に虛白光明正大、此の身の衣巾を離れず、僕が平生の志は此の如し、何事あつてか夫子長者の予を邀へて、古の鄭子眞を將軍王鳳が聘せし如きを須たんや、

【餘論】此の篇も一韻の作十六句、今子方の二句十字は張が事を敘し、他の十四句は皆自家の事を敘す、且此の篇を讀む者は第一と矛盾する點に疑を抱くべし、顧可久已に疑問を解決して曰く、上篇は張が清素にして道氣あることを説き、下篇は張が仕進を思樂し、乃ち純ばらる是恬澹なる者にあらざるを説き、排斥の意あり、故に題を名けて戲贈と爲す、趙殿成評する所も、顧と大同小異なり、是に於て遂に矛盾にあらざるを知る、

至滑州隔河望黎陽憶丁三寓

滑州に至り河を隔てて黎陽を望み丁三寓を憶ふ

隔河見桑柘。藹藹黎陽川。河を隔てて桑柘を見る、藹藹たり黎陽川、

望望行漸遠孤峯沒雲煙

望望行漸く遠く、孤峯雲煙に没す、

故人不可見河水復悠然

故人見る可からず、河水復悠然、

頼有政聲遠時聞行路傳

頼ひに政聲の遠きあり、時に聞く行路の傳ふるを、

【字解】滑州、唐代河南道靈昌郡、民國、河北道滑縣の地、河は黄河、黎陽、唐代河北道衛州、民國河北道汲縣の地、丁は姓、三は歌稱、高は名、桑柘、山桑なり、『禮記月令』に、季夏之月、命野虞、毋伐桑柘とあり、藟、葛、草木の繁茂する貌、望望、字を重ねるは意を強めるなり、悠然、水流がゆつたりとしたる貌、政聲、善政の譽なり、『後漢書』杜根傳にあり、

【題義】右丞が道中して滑州に至り、一水黄河の流を隔て、黎陽の街を望み、丁寓が此の街に住することを憶ふ、

【大意】黄河を隔てて桑柘の藟藟として繁茂せる所を見る、乃ち知る是れ黎陽川なることを、望みながら行けば漸漸に遠くなる、遠くなるに従つて今眼前に在りしと思ふ孤峯が雲煙の中に没す、丁寓が居は其の邊なりと知れども、故人は到底見るを得ず、唯見る河水の悠然として流るるを、故人は見ざるも、頼ひに君が善政を施して居ることを、此の行路にて聞き、中心に喜ぶものなり、

【餘論】此の篇直寫して真率、右丞に在りては、極めて意を用ふるものにあらず、行漸遠、政聲遠、僅僅四十字の中、此の同字を使用する例を見ず、後世の寫謾にあらずんば、右丞が不用意たるを免れ

ず、願可久評して古雅正大と曰ふ、右丞知るあらば九泉の下に一笑すべし、

秋夜獨坐懷內弟崔興宗

秋夜獨坐、內弟崔興宗を懷ふ、

夜靜羣動息蟪蛄聲悠悠

夜靜かにして羣動息み、蟪蛄聲悠悠、

庭槐北風響日夕方高秋

庭槐北風響き、日夕方に高秋、

思子整羽翮及時當雲浮

思ふ子が羽翮を整へ、時に及んで當に雲に浮ぶべきを、

吾生將白首歲晏思滄洲

吾生將に白首ならんとす、歲晏れて滄洲を思ふ、

高足在旦暮肯爲南畝儔

高足旦暮に在り、肯て南畝の儔と爲らんや、

【注解】内弟、偏體偏注に、姑の子は外兄弟なり、舅の子は内兄弟なり、右丞の母は崔姓、興宗、是其の内弟、興宗は盧士の崔興宗なり、宰相の崔興宗とは別人とす、蟪蛄、夏の蟬、楚辭に、蟪蛄鳴兮啾啾とあり、日夕、晝夜と同じ、日の暮にはあらず、整羽翮、興宗の學業成就に譬ふ、當雲浮、高位高官を得るに譬ふ、滄洲、滄海洲渚と成語して、神仙の住處を指す、高足、漢の古詩に、何不乘高足、先據要路津とあり、高足は逸足なり、南畝儔、農家の隱居なり、『詩經』に、同我婦子、饁彼南畝とあり、

【大意】秋夜靜かなるは聲の耳に入るもの盡く息めばなり、唯畫間の餘聲あるものは蟪蛄の悠悠なるのみ、時に庭槐に響きあるを覺ゆれば、これは北風が來つて槐に當る音なり、此の響きを聞けば、

日に夜に時節が高秋に向ふことを覺る、是に於て憶ひ出したるは、君が平生志す所を達せんと欲する時期に到りしことを、僕は君と反對に首髪は將に白からんとし、此の歳晏に遇うて滄洲に遊ばんことを思ふ、君の高足榮達の途に就く、且暮の間に在り、南畝に耕すの備と爲らざらん、

【餘論】崔興宗が右補闕と爲りしは、此の詩の成りし後ならん、崔が詩風は全く右丞と同調、唐賢三昧集、崔が詩二首を載す、右丞が手に出でしにあらすやと疑はしむ、顧評も此の詩を評して清古とあり、洵に然り、

贈裴十迪

裴十迪に贈る

風景日夕佳、與君賦新詩、  
澹然望遠空、如意方支頤、

風景日夕佳し、君と新詩を賦せん、  
澹然として遠空を望み、如意方に頤を支ふ、

春風動百草、蘭蕙生我籬、

春風百草を動かし、蘭蕙我が籬に生ず、

暖暖日暖閨、田家來致詞、

暖暖日閨に暖なり、田家來りて詞を致す、

欣欣春還臯、澹澹水生陂、

欣欣春臯に還り、澹澹水陂に生ず、

桃李雖未開、萋萋滿其枝、

桃李未だ開かずとも、萋萋其の枝に滿つ、

請君理還策、敢告將農時、

請ふ君還策を理せよ、敢て告ぐ將に農時ならんとす、

【注解】裴は姓、十は尊稱、迪は名、關中の人、右丞、崔興宗、杜市、李頤と友と善し、『唐賢三昧集』詩十二首を取る、風景、潤明の詩に、山氣日夕佳とあり、澹然、靜かに安き貌、楊子雲の賦に、海内澹然とあり、如意、佛徒の具、骨、角、竹、木を以て作る、長さ三尺許、背懸き所あり、手到らざる所、用て以て搔爪、人の意の如きより名く、支頤、如意を以て頤の下を支へるなり、蘭も蕙も共に香草、暖暖、日光の味き貌、『晏子春秋』に、星之昭昭、不如三月之暖暖とあり、欣欣、喜ぶ貌、『詩大雅』に、旨酒欣欣とあり、臯は水邊の陸地、阜に作るを可とす、和語の「サマ」なり、澹澹、水の平らかに滿つる貌、萋萋、柔かき花房なり、策は杖策なり、

【大意】風景は日を追ひ夕を逐ひ次第に佳となる、君と共に詩を賦せんと欲する念起るが故に、澹然と坐して君が住する方を望む、僕が望む状は如意を以て頤を支ふ、是の時に當りて春風は習習として百草を動かし、蘭蕙は畦畔として我が籬に生じ、暖暖たる日光は我が閨を暖かにし、田家の農人は來りて春景の佳きことを話す、其の話す言は、欣欣と春景は澤臯に還り、澹澹たる水は陂塘に生ず、桃や李は未だ開かざるも、其の開かんとする萋萋は枝に滿ちてある、農人が此の如く話すに由つて、僕は君に傳へる、早く策を田園に還す様にし玉へ、敢て告ぐ將に農時の多忙ならんとする期と、

【餘論】此の篇全く潤明を學んで、其の骨髓に入るもの、日夕佳、暖暖、欣欣、田家、敢告、此等の文字悉く潤明が田園の詩に於て用ひし所の文字なり、『唐賢三昧集』に此を採らざるは何ぞや、顧評に、



華嶽

西嶽出浮雲、積翠在太清。  
連天凝黛色、百里遙青冥。  
白日爲之寒、森沈華陰城。  
昔聞乾坤閉、造化生巨靈。  
右足踏方止、左手推削成。  
天地忽開橋、大河注東溟。  
遂爲西峙嶽、雄鎮秦京。  
大君包覆載、至德被羣生。  
上帝佇昭告、金天思奉迎。  
神祇望幸久、何獨禪云亭。

華嶽

西嶽浮雲を出で、積翠太清に在り、  
天に連りて黛色を凝らし、百里青冥に遙なり、  
白日之が爲に寒し、森沈たる華陰城、  
昔聞く乾坤閉ち、造化巨靈を生ず、  
右足踏んで方に止り、左手推して削成す、  
天地忽ち開橋し、大河東溟に注ぐ、  
遂に西峙の嶽と爲り、雄鎮秦京を鎮す、  
大君覆載を包み、至徳羣生に被らす、  
上帝昭告を佇ち、金天奉迎を思ふ、  
神祇望む久し、何ぞ獨云亭に禪せん、

【注解】華嶽、一名西嶽、又太華山、華州華陰縣の南八里に在り、遠くして之を望めば華の如き狀あり、故に名く、太清、元氣の清むもの、即ち蒼天を曰ふ、青冥、「楚辭」に、據青冥而據紅兮とあり、青冥、青天と同じ、蓋此、樹木繁くして蒼鬱たる貌、造化、自然の神を曰ふ、巨靈、巨大なる靈力を有する人、河神是なり、右足、華嶽と首陽は本一山なり、巨靈出でて右足を以て中條太一を踏み、左手を以て太華を推し、遂に開山と成る、東溟、東海なり、秦京、關中は本秦の地、漢に在つて京師と爲す、故に秦京と稱す、大君、天子を曰ふ、覆載、天地を覆ふ、「禮記」に、天の覆ふ所、地の載する所とあり、上帝は天帝、金天、先天二年、華嶽の神を封じて金天王と爲す、禪云亭、禪は祭の名、云亭、云云亭亭と曰ふ、華陰縣の東北に在り、云云山と亭亭山となり、

【大意】西嶽は浮雲の上に高く出で、嶽の樹木の鬱蒼たるは雲の上に在りて見る、天半に在りて連連として黛色を凝らし、百里の間に連りて青冥の遠きに遙かなり、白日も嶽威の爲に氣の寒きを覺ゆ、嶽姿の森沈たる狀は華陰城を壓するが如し、余聞く、上古に乾坤閉ざして開かざる時、造化の神は巨靈の人を生じて、乾坤を開かした、右足の力にて一方の山に踏み止まり、左手の力にて一方の山を削り成す、是に於て天地は忽ち開橋し、大河の水は東溟に向つて注ぎ、盛り揚げられた土は西峙の嶽と爲り、其の雄雄たる山勢は秦京を鎮護する、而して代代の天子は天地を統御し、其の廣大の徳は衆民に被らしむ、而して天上の天子は地上の天子の昭告あることを佇つ、嶽神は是の嶽に天子の行幸を迎へんと思ふ、一般の神祇も亦行幸を望むこと久し、上古は天子云云と亭亭との二山に禪し玉ふが、華嶽に於て禪し玉ふも然るべし、

【餘論】此の篇、八庚と九青とを通韻として用ふ、嶽の高秀にして靈なるを敘し、而して天子禪する



王右丞集卷二  
に東秦を以てするも、西嶽も亦以て禱するに可なりと結ぶ、

王右丞集卷二終

王右丞集卷三

古詩二十三首

胡居士臥病遺米因贈

胡居士病に臥す、米を遺り因つて贈る

了觀四大因根性何所有。  
妄計苟不生。是身孰休咎。  
色聲何謂客。陰界復誰守。  
徒言蓮華目。豈惡楊枝肘。  
既飽香積飯。不飲聲聞酒。  
有無斷常見。生滅幻夢受。  
卽病卽實相。趨空定狂走。  
無有一法眞。無有一法垢。

四大の因を了觀するに、根性何の所有ぞ、  
妄計苟くも生ぜずんば、是身孰か休咎せん、  
色聲何ぞ客と謂はん、陰界復誰か守らん、  
徒らに言ふ蓮華目、豈惡まんや楊枝肘、  
既に香積飯に飽く、聲聞酒を飲まず、  
有無斷常の見、生滅幻夢の受、  
卽病卽實相、空に趨りて定んで狂走せんや、  
一法の眞有ること無し、一法の垢有ること無し、

居士素通達、隨宜善抖擻、  
 居士素通達、隨宜善抖擻、  
 牀上無氈臥、鑪中有粥否、  
 牀上氈無くして臥す、鑪中粥有りや否や、  
 齋時不乞食、定應空漱口、  
 齋時乞食せず、定んで應に空しく口を漱ぐべし、  
 聊持數斗米、且救浮生取、  
 聊が數斗の米を持して、且く浮生の取を救はん、

【注解】了、明觀と同じ、四大、地火と水大と風大となり、人間の身は是の四大を因と爲してあり、根性、實性と解すべし、顯可久が六根を以て解するは謬る、妄計、眞理以外の空論妄想を皆妄計と謂ふ、休管、吉凶と同じ、休は吉、管は凶、北史李士謙傳に、士謙善く玄理を講ず、嘗て坐者あり、佛家應報の義を信ぜず、士謙、之を喻して曰く横善餘慶、讀惡餘殃、豈休管にあらずや、色聲、目を迷はすものば色、耳を打すものは聲、客は外物なり、陰界、陰は蘊とも書す、色と受と想と行と識と之を五陰と謂ふ、界は欲界と色界と無色界との三界なり、護守、定んで主たる者無きを謂ふ、蓮華日、菩薩の日は青蓮花臺の如しと『法華經』にあり、楊枝肘、支離叔と滑介叔と、黃帝の休する所に遊ぶ、俄にして柳其の左肘に生ずと『莊子』にあり、香積飯、大乘の法味、之を味ふ者は大智人なるなり、聖開酒、小乘の法味、之を味ふ者は小智人なるなり、共に『維摩經香積品』に評説せり、見は定見、有と定め、無と定め斷と定め常と定めて見取する、小乘以下の機類を謂ふ、受は領受、生と領受し、滅と領受し、幻と領受し、夢と領受するなり、是も小乘以下の機類を謂ふ、即病、即の字は「ツノママ」の義は無し、病は實相にあらずと觀するは小乘の機類、病其のままは實相と觀するは大乘の機類なり、虛空、大乘の眞理を會せずして、幻想を近ぶもの、一法眞、菩提本非樹の意、一法垢、明鏡亦非臺の意、居士、出家以外に佛敎を修習して、清淨自居する者の稱、通達、眞理に通達する智慧、隨宜、眞にも垢にも執着せざるの謂ひ、抖擻、梵語なり、譯して杜多、又は修治、又は弃除、身心を修治し、貪欲を去斷するの義なり、編は三足の鼎、譯は「カユ」、佛敎に之を小食と曰ふ、齋時、齋正時の略稱、食時と云ふと同じ、今日の午前十一時前後を食の正時とす、十二時後を食の非時と爲す、不乞食、分衛を乞食と云ふ、分衛は即ち托鉢なり、空漱口、食後口中に食氣の残るを許さず、故に食後必ず口を漱ぐ、然るに居士は午時食はずして、而かも漱口す、究しき所以なり、浮生取、四大衆會の身は即ち浮生取なり、浮生を救ひ取るにはあらず、

二時後を食の非時と爲す、不乞食、分衛を乞食と云ふ、分衛は即ち托鉢なり、空漱口、食後口中に食氣の残るを許さず、故に食後必ず口を漱ぐ、然るに居士は午時食はずして、而かも漱口す、究しき所以なり、浮生取、四大衆會の身は即ち浮生取なり、浮生を救ひ取るにはあらず、

【題義】胡居士が病に臥すと聞いて、米を遺る、因つて此の詩を贈る、  
 【大意】人間が地水火風の四大を以て一身を作る因を了觀して見るに、其の實質は是と定めしもの決して有ること無し、地水火風の結合を分解すれば留まるもの何もなし、是だの非だの愛だの憎だのと妄計の念生ぜざるものは、是の身孰か何ぞ休とせん答とせん、目に入る色欲も、耳に入る聲欲も、是外客と定まりしものにあらず、五陰だの三界だのと云ふも復主として守るものあるにあらず、目は蓮花の葉の如く美麗なりと云ふも、是徒らに言ふのみ、楊枝が肘に生じたのを病と稱して惡むのも、是眞に惡むに足らざるなり、居士は既に大乘香積の飯を飽くまで食ふ、聲聞小乘の惡酒を飲まず、世界に惡むに足らざるなり、居士は既に大乘香積の飯を飽くまで食ふ、聲聞小乘の惡酒を飲まず、世界の幻相を有と定め無と定め、斷と定め常と定むる小智の者も有り、又生だの滅だの幻だの夢だのと心に領受する小智の者も有り、小智の者は即病即實相なる眞理を知らざる故に、病を空ならしめんと欲して狂走する、眞理は融通なり、此の一法が眞と定めるもの無し、此の一法が垢と定めるもの亦無し、居士は箇中の消息に通達せる人、是の故に隨宜に善く抖擻する、聞く病牀には氈無くして臥すと、氈無き位であれば、鑪中に粥も或は無けん、齋時に乞食するが奉佛の則なるに居士は乞食せず、

而かも漱口の戒法は嚴守せらるることと思ふ、僕聊が數斗の米を遣り、以て居士が浮生取を教はんと欲す、

【餘論】此の篇は上聲一韻を以て成る、句句佛語を運用して、辭工理正、淨名經一部十四品の玄趣を深會する者にあらざれば、到底此の作を爲す能はず、右丞が大乗佛教に於て領解此の如きは、唐三百年の詩人に於て唯一人のみ、

與胡居士皆病寄此詩兼示學人二首

胡居士と皆病む、此の詩を寄せ、兼ねて學人に示す 二首

一興微塵念、橫有朝露身、  
如是觀陰界、何方置我人、  
礙有固爲主、趣空寧舍寶、  
洗心詎懸解、悟道正迷津、  
因愛果生病、從貪始覺貧、  
色聲非彼妄、浮幻即吾眞、

一たび微塵の念を興し、横に朝露の身を有す、  
是の如く陰界を觀、何の方か我人を置かん、  
礙有固に主と爲す、趣空寧ろ寶を捨てんや、  
洗心詎ぞ懸解するや、悟道正に迷津、  
愛に因して果は病を生じ、貪に從つて始めて貧を覺る、  
色聲彼妄にあらず、浮幻即吾眞、

四達竟何遺、萬殊安可塵、

四達竟に何ぞ遺らん、萬殊安んぞ塵す可けん、

胡生但高枕、寂寞與誰鄰、

胡生但枕を高うし、寂寞誰と鄰らん、

戰勝不謀食、理齊甘負薪、

戰勝つて食を謀らず、理齊しうして薪を負ふことを甘んず、

子若未始異、詎論疎與親、

子若し未だ始より異らずんば、詎ぞ疎と親とを論せん、

【注解】皆病、胡居士も病み、又一般の人も病あり、に皆病と謂ふ、學人、佛學を修める人、微塵念、無明の妄念を塵程與すなり、横有、正道に循はざるを横と謂ふ、至上の物に比較して我等の身を有するを謂ふなり、陰界、至上の覺者の住する處以外は皆陰界なり、置我人、我人は一人稱にも用ひ、二人稱にも用ふ、菩薩瓔珞經に虛觀世界、空無我人とあり、礙有、男とか女とか形の有るものに執着して主と爲す、趣空、太空の一切無きが如きものを眞理と執着するものも不可なり、寶は主の字に對して言ふのみ、洗心、清淨心を謂ふ、懸、否定の詞なり、懸解、莊子郭注に、繫者有るを以て懸と爲し、繫者無きを解と爲す、生は懸なり、死は解なり、清淨心なる者も、生死を解脱する難しとなり、迷津、佛道に於て悟入せりと稱する者も亦正に是迷津なり、因愛、愛は生の因にして、生の果欲は病なり、從貪、貪欲增長なる者に於て始めて貧を覺るなり、彼妄、耳目を迷はす色聲も畢竟は外界の妄にはあらず、吾眞、色の浮なる、塵の幻なる即吾眞であるなり、四達、生老病死の四苦に於て通達するなり、萬殊、種種の萬物殊異あるなり、高枕、病苦を苦と觀ぜざればなり、戰勝、子夏、曾子に見ゆ、曾子曰く何ぞ戰勝するが故に肥ゆるなり、曾子曰く何の謂ぞ、子夏曰く吾入りて先王の義を見るときは菜とし、出でて富貴の樂を見る又羸とす、兩者皆中に戰ひ、未だ勝敗を知らず故に戰す、今先王の義勝つ、故に肥ゆ、不謀食、道を謀つて勝ちたるが故に食を謀らざるなり、前の覺貧の字に對應す、理齊、萬物形は異なるも理は齊し、甘負薪、汲水採薪は佛道修人の尋常事なり、

【題義】胡居士の病を聞くと共に、世人一般に皆病人なるを知る、其の意義を敍して此の詩を作り、居士に示すと同時に、佛道を修學する人に寄與するなり、

【大意】人は一たび無明の妄念を興して、此の世に生じ、而して何時病を受くるや又死するやを知らざる朝露の如き身を持つ、我は此の朝露の如き身であると観すれば、一刻も安心して我人を置くべき處あらんや、形を有するものは總て真心を迷はせて道に於て障礙と爲る、然りと雖も形を有せざるも所謂空なる道に越くも、形を有する外物(質)も又含つべからず、又、清淨心、清淨心と執著する者も生死を解脱する能はず、道を悟ると稱する者も、正に是津に迷ふなり、悟と云ふものに執著あればなり、生は愛に原因して、結果は病と爲る、食欲増長する者は停止する所を知らず、是に於て始めて貧を知る、目を迷はす色も、耳を汗す聲も、畢竟は妄にあらず、又色の浮なるも、聲の幻なるも、要するに即吾が眞なるなり、生老病死の四苦は、通達して見れば畢竟真空であるなり、色の聲のと、耳目を迷はすものも、畢竟は真空を塵すべからず、胡生は佛道修業して此の道を知る、故に病に罹ると雖も、平心に枕を高くして臥す、其の寂寥の情、誰か其の鄰する者ぞ、古の達人は戰勝ちて食を謀らず、古の高僧は理齊しうして薪を負ふことを甘んず、子も古の達人や高僧と斯道に於ては始より異ならず、詎ぞ色身の疎と法身の親とを論せんや、

【餘論】此の篇一韻の作、前作と同じく佛語を以て充滿し、所謂尋常の詩を以て見るべからず、又尋

常の偈を以て見るべからず、佛敎特に天台圓融の理に一一契當するもの多し、

浮空徒漫漫、汎有定悠悠。  
 無乘及乘者、所謂智人舟。  
 詎舍貧病域、不疲生死流。  
 無煩君喻馬、任以我爲牛。  
 植福祠迦葉、求仁笑孔丘。  
 何津不鼓棹、何路不摧輜。  
 念此聞思者、胡爲多阻修。  
 空虛花聚散、煩惱樹稀稠。  
 滅想成無記、生心坐有求。  
 降吳復歸蜀、不到莫相尤。

空に浮んで徒らに漫漫、有に汎んで定めて悠悠、  
 乘及び乗する者無し、謂はゆる智人の舟、  
 詎ぞ貧病の域を捨て、生死の流に疲れざらんや、  
 君を煩して馬に喻ふること無し、我を以て牛と爲すに任す、  
 福を植えて迦葉を祠り、仁を求めて孔丘を笑ふ、  
 何れの津か棹を鼓せざらん、何れの路か輜を摧かさらん、  
 念す此の聞思の者、胡爲ぞ阻修多き、  
 空虛花聚散し、煩惱樹稀稠す、  
 想を滅して無記を成じ、心を生じて有求に坐す、  
 吳に降り復蜀に歸る、相尤むる莫きに到らず、

【注解】浮空、無形に迷ふ者を戒しむ、汎有、有形に迷ふ者を戒しむ、無乘、彼我色身皆無し、智人舟、無形有形に執著せざるが

哲人なり。嗚呼、佛教の意にて嗚へしはあらず、莊子の意にて嗚へしなり。爲牛、是も佛教の牛王にはあらず、莊子の意なり。植樹、釋迦の大弟子を植樹と曰ふ、前生の植樹に因つて今生身は金色なり、求仁、佛教にも亦仁あるを言ふ、聞思修、聞慧、思慧、修慧、佛教に之を三慧と曰ふ、空虛花、目に病あるの人、虚空に花を生ずと看る、煩惱樹、前の空虛花と字を對するなり、空虛花も亦煩惱なり、誠想、妄想を除滅する、成無記、心無記に至りて法を成ずるの謂ひなり、生心、染心即ち煩惱心を生ずるなり、坐有求、道に於ての有求にあらず、染境の有求なり、降伏復歸期、「獨志實權傳」に、吳に降るは不可、蜀に還るは路無しとの語あり、

【大意】形の無き空を真理なりと心得て執著するも徒爾なり、有形の物が真理なりと心得て執著するも亦定んで徒爾なり、共に漫漫、共に悠悠、空にも著せず、有にも著せず、而して生死苦海に自由なる人は、是智人の舟あるのみ、詎ぞ貧病の域を捨て去つて、生死の流に泳いで疲れざるを得んや、又君を煩はして馬に喻へる必要も無し、我を呼んで牛と爲す者には甘んで受ける、福の因と爲る徳を植ゑて以て迦葉を祀るも可なり、仁を求めて孔丘を笑ふも可なり、自由の人は何れの津に於ても棹を鼓すべし、何れの路に於ても轡を推くべし、念ふに聞思を修する者、安穩なるべきに、胡爲ぞ阻修の多きや、目を擧げて見れば空中に幻華が聚散し、或は煩惱樹が稀處と稠處とあり、宜しく妄想を滅除して無記を成すべきなり、勞心を生じて有求に坐するなれば、吳に降るも蜀に歸るも、相尤むる莫きに到らず、いづれも不可なり、

【餘論】此の篇亦一韻の作、奇想變幻愈々出でて愈々奇、韻文を以て佛理を説かんと欲す、大に妥當ならざる所あり、是の故に如何に佛學に精通せる者と雖も、解すべく亦解すべからざる點無きにあらず、明の顧可久、心經を引き、楞嚴を證とし、金剛經、維摩經、大婆娑論を據として緣密に注すと雖も、一として要領を得るもの無し、所謂徒らに漫漫、定んで悠悠たる者は顧注是なり、

藍田山石門精舍

藍田山の石門精舍

落日山水好、漾舟信歸風。  
玩奇不覺遠、因以緣源窮。  
遙愛雲木秀、初疑路不同。  
安知清流轉、偶與前山通。  
舍舟理輕策、果然愜所適。  
老僧四五人、逍遙蔭松柏。  
朝梵林未曙、夜禪山更寂。  
道心及牧童、世事問樵客。  
暝宿長林下、焚香臥瑤席。

落日山水好し、舟を漾はして歸風に信す、  
奇を玩んで遠きを覺えず、因つて以て源に緣つて窮む、  
遙に愛す雲木の秀づるを、初め疑ふ路の同じからざるを、  
安んぞ知らん清流轉じ、偶ま前山と通するを、  
舟を捨てて輕策を理し、果然適する所に愜ふ、  
老僧四五人、逍遙松柏に蔭ふ、  
朝梵林未だ曙けず、夜禪山更に寂たり、  
道心牧童に及ぶ、世事樵客に問ふ、  
暝宿す長林の下、香を焚いて瑤席に臥す、



潤芳襲人衣。山月映石壁。

潤芳人衣を襲ひ、山月石壁に映す。

再尋畏迷悟。明發夏登歷。

再尋迷悟を畏る、明發夏に登歷す。

笑謝桃源人。花紅復來覲。

笑つて謝す桃源の人、花紅復來覲せん。

【注解】淡舟、晉の謝靈運の詩に、淡舟兩高月とあり、淡は即ち泛なり、歸風、晉の木華の賦に、或因歸風以自反とあり、  
蘇淵、晉の謝靈運の詩に、蘇淵殊未極とあり、蘇は尋なり、輕策、輕便なる策杖なり、果然、想像した如くの意義、松栢、松と栢と二  
木あり、又松栢樹あり、今孰れと定めがたし、朝梵、朝日の禮經を謂ふ、夜禪、夜課の禪定を謂ふ、道心、世事の反對、佛道を修習  
するの心なり、世事、道心の反對、世上の雜事を謂ふ、暝宿、晚日に宿泊するなり、瑤席、精舍の淨席を謂ふ、明發、前の暝宿と文  
字を對す、聖朝出立するを謂ふ、桃源、『搜神記』に出づ、後章詳説す、來覲、覲は會見なり、

【題義】藍田山は陝西省西安府藍田縣に在り、美玉を産するを以て、一名、玉山と曰ふ、秦の虐  
政を避けて、退去せし四皓の住せし山、是の山中石門に精舍あり、右丞は是の精舍に一宿して歸るに  
臨み、其情趣を歌うて山僧に贈りしものなり、精舍は佛家儒家共に用ふと雖も、今は寺の異名と心得  
べし、

【大意】落日の山水は殊に好愛すべし、是を以て舟を濼はして風の歸る方角に信す、山中の奇景を探  
らん爲であれば、それからそれと遠方まで行く、因つて以て水源の窮まる處に至る、是に於て舟中よ  
り遙かに雲木の清秀なるを愛觀す、初めには疑ふ路同じからずと、而して我ながら知らざりき、清流

轉じ、偶ま前山と通すること、自分の目的は前山に行くにあらざれば、此に舟を捨てて陸を行かざ  
るべからず、輕策を恃みとして緩緩行けば、果然として目的とする所に慨ふを得たり、老僧は四五人、  
經行逍遙して松栢の下に蔭ふ、朝梵には林が未だ曙けず、夜禪の時は山が一層に寂定なり、道心は  
老僧や幽人のみ起るにあらず、牧童も亦之を持す、老僧は世事を知らざるが故に却つて之を機客に問  
ふ、乃ち暝色に及んで長林下の房に宿を求む、宿すと雖も直ちに寢に就くならず、香を焚いて以て清  
淨の席に臥す、乃ち覺ゆ潤芳の氣が人衣を襲ふかと、起つて看れば山月は石壁に影を映す、再尋する  
とき今日去來の路に迷ふを畏るる故に、明晨出發に際し、前來の路を要に經歷せんと思ふ、笑うて  
厄介になりし事を謝して桃源中の人に言ふ、花の紅色を呈する時節復ねて來り會見せん、

【餘論】此の篇、前八句四十字は一東の韻、舍舟以下十六句八十字は十一陌の韻、山水好を寫すを以  
て主として爲し、勃率たる佛語を用ひず、右丞の異境是に於て見るべし、殷璠云ふ、維詩、詞秀調雅、意新  
理愜、在泉爲珠、著壁成繪、一句一字、皆出常境、至如落日山水好、淡舟信歸風、潤芳襲人衣、山月  
映石壁、豈肯慚於古人也、黃培芳云、擷康樂之英一と、此等の評、洵に信なるを覺ゆ、此の篇「唐賢  
三昧集」に收む、



青溪

青溪

言入黃花川。每逐青溪水。

言に黃花川に入る、毎に青溪の水を逐ふ、

隨山將萬轉。趣途無百里。

山に隨つて將に萬轉せんとす、途に趣いて百里無し、

聲喧亂石中。色靜深松裏。

聲は喧し亂石の中、色は靜なり深松の裏、

漾漾泛菱荇。澄澄映葭葦。

漾漾として菱荇を泛べ、澄澄として葭葦に映す、

我心素已閒。清川澹如此。

我心素已に閒、清川澹として此の如し、

請留盤石上。垂釣將已矣。

請ふ盤石の上に留まりて、釣を垂れて將に已みなんとす、

【注解】言入、言は語辭とす、『詩』に『言出遊』とあり、黃花川、陝西漢中府鳳縣東北一十里に在り、『水經注』に、大數水流入黃花川とあり、聲喧、水聲喧洶するなり、色靜、水色靜淨なり、菱荇、「ヒシ」と「アサザ」なり、共に水草、葭葦、「アシ」、葭は葦の未だ秀でざるもの、荇は葦の大なるもの、水邊に生ずる宿根草、盤石、大なる一枚石なり、

【題義】青溪は溪の名なるも、水色の青碧なるより名けしもの、顧本に清溪とあるは誤る、此の青溪に沿うて行く狀景を敘述するものなり、

【大意】言に來りて黃花川に入れば、毎に青溪の水を逐うて行く、山路に隨つて左曲右折殆んど萬轉せしかと思へども、其の途に趣く里程は百里に足らず、水聲は漾漾として亂石の中に、喧しく、水色

は湛湛として深松の裏に靜なり、又漾漾として泛ぶものは菱と荇なり、澄澄として映するものは葭と荇なり、我心は平素より已に閒なり、今清川を見るに自然の閒澹此の如し、乃ち請ふ溪邊盤石の上に留まりて、釣を垂れて吾が生を終りたきなり、

【餘論】此の篇、上聲一韻の作、溪に沿うて陸行する狀を敘し、山水の自然、人の情思を移すもの多し、『河嶽英靈集』『唐賢三昧集』共に之を收む、右丞が本宗茲に在るを以てなり、

崔濮陽兄季重前山興

崔濮陽兄季重が前山の興

秋色有佳興。況君池上閒。

秋色佳興あり、況んや君池上閒なり、

悠悠西林下。自識門前山。

悠悠たり西林の下、自ら識る門前の山、

千里橫黛色。數峯出雲間。

千里黛色を横へ、數峯雲間に出づ、

嵯峨對秦國。合沓藏荆關。

嵯峨秦國に對し、合沓荆關に藏る、

殘雨斜日照。夕嵐飛鳥還。

殘雨斜日照らし、夕嵐飛鳥還る、

故人今尙爾。歎息此顏顏。

故人今尙爾り、歎息す此の顏顏、

【注解】秋色、獨明の詩に、秋菊有佳色の句あり、悠悠、夢遊無期の貌、又開眼の貌、今は開眼の貌を謂ふ、自謙、自對と言はす、自謙と言ふ、妙姦に在り、秋色、山色の鬱蒼たるなり、嵯峨、山の高き貌、合香、山の高き貌、殘雨、願本殘雲に作る、興る、夕嵐、斜日の山氣なり、霜、衰頹と同じ、

【題義】崔灑陽兄季重が住處の南山が如何にも興趣多きを賞し、乃ち此の詩を歌ひしものなり、崔は灑、灑陽の太守、兄は尊稱、季重は名、

【大意】秋色は一般に只今佳興の有る時なり、況して君が住み玉ふ池上は殊に開興あらん、俗事に礙眼せずして悠悠と西林の下に徜徉し玉ふに於ては、門前の山の状態を自識し玉ふならん、而して山の状態は如何、嶺となるものは千里に連亘して黛色を横へ、峯と爲るものは雲間に高く聳ゆ、一面嵯峨たる山勢は秦國即ち陝西の方面に對し、一面合沓たる山勢は荊州の關門を蔽して居る、一過したる雨の餘殘は斜日が兩脚を照らし、又雨後の夕嵐に向つて飛鳥が還る、此等の景色を故人は昔より今に至るまで賞觀するも、僕は歎息す此の顔面に及んで永賞する能はざることを、

【餘論】此の篇も一種の作、陶淵明を學んで、別に右丞の心境を發するもの、清の黃培芳は千里以下二十字を以て闊大と稱し、全體として李太白に近しと評するも、余は寧ろ陶淵明に近しと言はん、唐賢三昧集之を收む、

終南別業

終南の別業

中歲頗好道、晚家南山陲。

中歲頗く道を好み、晩に南山の陲に家す、

興來每獨往、勝事空自知。

興來れば毎に獨往す、勝事空しく自ら知る、

行到水窮處、坐看雲起時。

行いて到る水の窮まる處、坐して看る雲の起る時、

偶然值林叟、談笑無還期。

偶然林叟に値へば、談笑還期無し、

【注解】中歲、定義無し、右丞が三十歳前後と見るべし、頗、「スコアル」と訓を施す多し、余は「ヨケ」の意義を取る、好道、道に佛道あり、仙道あり、儒道あり、今は單に塵外の道を謂ふ、勝事、塵外の道は即ち勝事なり、偶然、期せずして遇ふ、

【題義】終南山の別莊に於て、其の真情を發せしものなり、

【大意】中年の頃より、吾は塵外の道に遊ぶを好み、晩年に及んで、終南山の麓に別莊を設けて茲に住す、而して興情が生じ來りしときは門を出でて獨往す、而して佳勝の事項は、空しく唯自ら知るのみ、乃ち水の流窮極する處まで行き、疲れし時は坐して以て雲の起る状を見る、又、若し偶然にして林中の叟に値へば、之と談笑して家に還るの期を忘る、

【餘論】此の篇、右丞集中尤も傑出せるもの、今、顧可久の評を借りて以て其の妙品たる所以を看ん、興來の十字は情興を寫して包蓄盡くること無く、行到の十字、景色を點出して亦此の如し、其の承接

相當、不折不窒、作法の妙處を知るべし、偶然の十字、夏に上景を置き、情と相忘る、意緒繪を事とせず、直寫して悠然自得の趣あり、「詩人玉屑」云ふ、造意の妙、造物と相表裏す、豈直詩中に畫あるならんや、「唐賢三昧集」收めざるは怪しむべし、

李處士山居

李處士の山居

君子盈天階。小人甘自免。

君子天階に盈つ、小人自免を甘んず、

方隨鍊金客。林上家絶巖。

方に鍊金の客に随つて、林上絶巖に家す、

背嶺花未開。入雲樹深淺。

嶺に背いて花未だ開かず、雲に入りて樹深淺、

清晝猶自眠。山鳥時一囀。

清晝猶ほ自ら眠る、山鳥時に一囀、

【注解】處士、官吏と爲らざる人の稱、天階、宮中の右省閣を謂ふ、小人、右丞、自身を謂ふ、自免、顔延之陶徵士誄に、長卿素の官、種資自免とあり、鍊金客、金丹を鍊る客、即ち仙道を修むる人、絶巖、險崖を謂ふ、

【大意】國家の治を謀る君子は天階に盈ち満つ、僕の如き者は自ら官を去ることに甘んず、唯方に處士の如く鍊金の客に随つて遊ばんと思ふ、處士の家は絶巖に在りて林上に出づ、嶺を背面に控へて花は未だ開かざるも、雲中に入りて樹の深淺は頗る趣致あり、處士は人事に營營せず、白晝に自から眠る、山鳥が一囀する聲にて目が覺めるなり、

【餘論】此の篇は、閒澹清寂、韋蘇州と相近きものなり、

韋侍郎山居

韋侍郎が山居

幸忝君子願。遂陪塵外蹤。

幸に君子の願を忝うし、遂に塵外の蹤に陪す、

閒花滿巖谷。瀑水映杉松。

閒花巖谷に滿ち、瀑水杉松に映す、

啼鳥忽臨澗。歸雲時抱峯。

啼鳥忽ち澗に臨み、歸雲時に峯を抱く、

良游盛簪紱。繼跡夔龍多。

良游簪紱盛ん、繼跡夔龍多し、

詎枉青門道。故聞長樂鐘。

詎ぞ青門の道を枉げん、故に長樂の鐘を聞く、

清晨去朝謁。車馬何從容。

清晨去つて朝謁す、車馬何ぞ從容たる、

【注解】簪、髮冠を止める爲め髮に挿すもの、紱は冠の「ヒモ」なり、轉じて官位の義とす、夔龍、虞舜の二臣の名、轉じて賢臣の義とす、青門道、天子四門の一、長樂鐘、長樂宮中より出づる鐘聲、

【大意】僕は幸にして君が如き君子人の眷顧を忝うするが故に、此の塵外の高蹤即ち山居に陪

游する光榮を蒙る、山居の好景は如何、閒花は今方に満開、巖谷に満ち、而して瀑水は杉松の間に挂りて白と翠と相映す、啼鳥は啼啼として忽然として湖に臨み、歸雲は時に來りて峯を抱くの状あり、且良友として游ぶ人は高位高官なり、古の虞舜の時代の慶龍の如き賢臣は、跡を繼ぎて、今日猶ほ多く茲に在り、參内するに必ず青門の道よりするを以て、故に長樂宮より出づる鐘聲を聞く、清晨に去つて朝調する折は、車馬の威儀ただ從容たるものあり、

【餘論】此の篇、排律なるが如く、又、古體なるが如く、先輩多く古詩に收む、余は寧ろ排律に收めんと欲す、閒花以下二十字、景を敘し、良游以下、人を敘す、作法分明なり、

丁寓田家有贈

丁寓が田家贈る有り、

君心尙棲隱久欲傍歸路

君が心棲隱を尙ぶ、久しく歸路に傍はんと欲す、

在朝每爲言解印果成趣

朝に在りて毎に言を爲す、印を解いて果して趣を成す、

晨雞鳴鄰里羣動從所務

晨雞鄰里に鳴き、羣動務むる所に從ふ、

農夫行餉田閨婦起縫素

農夫行いて田に餉し、閨婦起きて素を縫ふ、

開軒御衣服散帙理章句

軒を開いて衣服を御し、帙を散じて章句を理す、

時吟招隱詩或製閒居賦

時に吟ず招隱の詩、或は製す閒居の賦、

新晴望郊郭日映桑榆暮

新晴郊郭を望めば、日は映す桑榆の暮、

陰盡小苑城微明渭川樹

陰は盡く小苑の城、微明渭川の樹、

揆予宅閭井幽賞何由展

揆予閭井に宅す、幽賞何に由りて展せん、

道存終不忘迹異難相遇

道存して終に忘れず、迹異にして相遇ふ難し、

此時惜離別再來芳菲度

此時離別を惜しむ、再び來りて芳菲度らん、

【注解】棲隱、閒隱居なり、欲傍、近からんと欲する意、解印、官を罷むるなり、羣動、羣生の活動なり、散帙、散開經帙、書物を開き看るなり、招隱詩、晉の左思に招隱詩二首あり、閒居賦、晉の潘岳に閒居賦一篇あり、桑榆、日西に垂れ、景樹端に在る、之を桑榆と謂ふ、小苑城、異説あるが曲江の芙蓉園、之を小苑城と曰ふ説信に近し、渭川、關西の鼻風同穴山より出でて京兆に入る、揆予、楚辭に、皇覽揆予於初度とあり、閭井、宋の何承天の傳に、故二踐禾稼、於二蔭閭井とあり、「マチ」と「ムラザト」なり、

【題義】丁寓と稱する人、官を罷め田家に起居せるを、右丞が之を訪ひ、以て此の詩を贈るなり、

【大意】君は平素閒隱居を尙ぶの心を持ち、田家に歸るの路を近きに求むることや久し、朝廷に在りし日、常に人に向つて此の事を言ふ、已にして辭職して歸るや、田園に手入するを以て、田園は好趣を成す、晨雞は喧嘩として鄰里に鳴き、諸人は欣欣として各の其の所務に従ふ、農夫は外に行きて畦

作に従事し、閨婦は家に在りて絲織に従事す、君は晨起するや先づ軒を開いて衣服を整へ、机に對し書物を開き其の章句を注す、時ありては左太沖に倣うて招隱詩を吟じ、或は又潘安仁に擬して閉居賦を製す、新晴の日に當つて郊郭を望観すれば、日影は扶桑樹の影に入らんとす、而して小苑城の方面は自から暗色となる、渭川の方の樹木は尙微しく明色を留む、君の田家の成趣此の如く佳なるに、予自分の事を揆るに、閨井に宅を構ふるに依つて、此に來りて屢ば幽賞する能はず、而かも棲隱の道は心に存して忘れず、如何せん朝と野と迥異なれば、相遇ふことは難事とす、君が家を離し去らんとして、而かも離別を惜しむ、再來の時は恐らくは芳菲度るの春晩ならん、

【餘論】此の篇も、仄一韻の作、丁寓が人と爲り、田家の趣の狀、我が志と、字字句句明白に次第せり、而して左思の影響なく、潘岳の習述なく、獨り陶家の筆致を學ぶものなり、顧可久曰く古澹と、  
「唐賢三昧集」之を收む、

渭川田家

渭川の田家

斜光照墟落 窮巷牛羊歸  
野老念牧童 倚杖候荆扉

斜光墟落を照し、窮巷牛羊歸る、  
野老牧童を念ひ、杖に倚りて荆扉に候す、

雉鳴麥苗秀 蠶眠桑葉稀

雉鳴きて麥苗秀で、蠶眠つて桑葉稀れ、

田家荷鋤至 相見語依依

田夫鋤を荷うて至り、相見て語依依たり、

即此羨閒逸 悵然歌式微

即ち此に閒逸を羨み、悵然として式微を歌ふ、

【注解】斜光、斜陽に作る本あり、墟落、墟落なり、窮巷、深巷に作る本あり、雉鳴、雉は野禽、キジなり、蠶は鳴と同字、  
「毛詩箋」に「雉鳴也」とあれば、雉以外の鳥には用ひざるものか、荷鋤、陶詩に、帶月荷鋤歸とあり、式微、詩の舊風に、式微式微胡不歸とあり、王宣の表微する義、

【大意】斜陽の光が墟落を照して明かなり、邸中の窮めて寂しき巷に向つて牧童が牛羊を引いて歸る、野老は其の牧童の歸るを氣づかふが爲に、杖を力に倚りて以て荆扉を出でて以て之を候つ、野外雉が鐘く邊には麥の苗が秀で、屋内蠶の眠る、側に桑葉は食はざるが故に稀なり、時には田夫が鋤を荷うて至れば、相見て互に盛んに語る、此等の生活情狀を看れば閒逸良に羨むべきもの、我は今田家の人ならず、悵然として式微の詩即ち歸田の詩を吟せざるを得ず、

【餘論】此の篇は、全く淵明の歸去來辭より脱化し來るもの、語語自然、味澹澤せざる所に在り、田家の題目に於て式微の語を用ふ、聊か惟しむべしと雖も、歸を意味するにあれば亦妨げず、「唐賢三昧集」之を收む、

春中田園作

春中田園の作

屋上春鳩鳴。邨邊杏花白。  
持斧伐遠揚。荷鋤覘泉脈。  
歸燕識故巢。舊人看新曆。  
臨觴忽不御。惆悵遠行客。

屋上春鳩鳴き、邨邊杏花白し、  
斧を持って遠揚を伐り、鋤を荷うて泉脈を覘ふ、  
歸燕故巢を識り、舊人新曆を看る、  
觴に臨んで忽ち御せず、惆悵す遠行の客、

【注解】春中、史記始皇本紀に、時在春中とあり、仲春二月なり、春鳩、魏の曹子建、春鳩鳴飛棟の句あり、遠揚、詩經に、豐月條桑、取彼斧斯、以伐遠揚とあり、毛萇傳に、遠枝遠也、揚條揚也、孔穎達正義に、謂長枝去人遠也、謂長條揚起者也、皆手所不及、故枝落之、而採取其葉とあり、泉脈、晉の謝朓の詩に、泉脈見泉脈とあり、

【大意】屋上には春の鳩が頻りに鳴き、邨邊には杏花の花が開いて白し、一人は斧を持って遠揚を伐り、一人は鋤を荷うて泉脈を覘ふ、歸燕は仲春已に來りて故巢を能く識る、舊人即ち老人は今年の新曆を看る、時に客あり、之に酒を勸む、乃ち觴を手にするも飲むの邊無く、直ちに去る、惆悵せざるを得んや、

【餘論】此の篇、屋上以下の六句は、敘景敘事、七八の二句、上の句を結束するならんが、讀者直ちに其の意を解する能はず、願可久曰く、此有所思而作者と、或は然らん、清の黃培芳曰く、神境高極と、又曰く、結末從嗟我懷人、冀彼周行と化出と、「唐賢三昧集」之を收む、

過李揖宅

李揖が宅に過ぎる

開門秋草色。終日無車馬。  
客來深巷中。犬吠寒林下。  
散髮時未簪。道書行尙把。  
與我同心人。樂道安貧者。  
一罷宜城酌。還歸洛陽社。

開門秋草の色、終日車馬無し、  
客は來る深巷の中、犬は吠ゆ寒林の下、  
散髮時に未だ簪せず、道書行くゆく尙ほ把る、  
我と同心の人、道を樂み貧に安んずる者、  
一たび宜城の酌を罷め、還洛陽の社に歸らん、

【注解】道書、老子及び仙道の書、樂道安貧、後漢書「後漢書」韋彪傳に、安貧樂道、恬於進退とあり、宜城、太平寰宇記に、襄州の宜城縣、美酒を出す、俗、竹葉杯と爲す、洛陽社、晉の置京、洛陽に至り、被髮して行き、逍遙吟詠し、常に白社に宿す、吳均の詩に、予爲關西使、寓居洛陽社とあり、

【題義】李揖なる人の宅を訪過して作る所、李揖は「全唐詩」に於て見る能はず、其の傳を知るに由なし、

【大意】李が家の開門は秋草の色蒼蒼たり、乃ち知る車馬の客來りて草を踐む者なきを、我は今客となし、



爲りて此の深巷の中に来れば、夫が唯寒林の下に吠ゆるを聞く、時に遇ふ散髮蓬蓬として亂れしまま、道書を手にして行くゆく之を讀む人に、乃ち思ふ我と同調同心の人あることを、道を樂み貧に安んずる者、真に我と同心なり、是に於てか相共に宜城の酒を酌み、飲み罷んで還洛陽の社に歸る、

【餘論】此の篇も亦、陶柴桑の家風、澹雅悠遠、真率の語にして、而かも品地の高き、此の如きは無し、「唐賢三昧集」之を收む、我が意を獲たり、

飯覆釜山僧

覆釜山の僧に飯す

晚知清淨理日與人羣疎

晚に清淨の理を知り、日に人羣と疎なり、

將候遠山僧先期拂敝廬

將に遠山の僧を候せんとし、期に先づて敝廬を拂ふ、

果從雲峯裏顧我蓬蒿居

果して雲峯の裏より、我が蓬蒿の居を顧みる、

藉艸飯松屑焚香看道書

艸を藉きて松屑を飯し、香を焚きて道書を看る、

燃燈晝欲盡鳴磬夜方初

燃燈晝盡さんと欲す、鳴磬夜方に初

一悟寂爲樂此生閒有餘

一悟寂を樂みと爲す、此の生閒餘り有り、

思歸何必深身世猶空虛

歸を思ふて何ぞ必ず深からん、身世猶は空虛、

【注解】清淨理、佛法の玄理なり、遠山、覆釜山なり、敝廬、敝茅廬なり、蓬蒿居、「三輔決錄」に、張仲蔚、所居蓬蒿茂、人とあり、庭に「蒿」の生ひ茂りたる住居なり、松屑、屑は齧なり、松屑を以て飯に和して食ふなり、江文通の文に朝餐松屑、夜讀仙經とあり、道書、必ず仙書と曰はす、佛書をも意味す、燃燈、燈を燃して佛に供するは佛家の常なり、夜方初、初夜と後夜と中夜は「遺教經」に説く所なり、寂爲樂、「涅槃經」に寂滅爲樂とあり、

【題義】覆釜山の僧を招致して淨飯を供するなり、覆釜山は山の名か、寺の山名か未詳、

【大意】晩年に及んで佛法の清淨の理を知り、日に俗人羣衆と疎遠と爲る、俗人と疎遠となる反對に、清淨なる僧人と親近せんことを思ふ、故に行いて遠山の僧を候せんと欲したるに、我が期に先づて僧が敝廬に臨まる、果然僧は雲峯の裏を出て、以て我が此の蓬蒿の居を過ぎらる、是に於て葦酒の反對に清淨なる松露飯を供養する、僧は香を焚いて道書を看讀す、是の間の燃燈も晝の中に光は盡さんと欲す、既にして鳴磬夜は方に初夜と爲る、寂滅爲樂の偶意を一悟すれば、此の生萬事に於て閒餘りあるを覺ゆ、師も亦歸を思ふこと何ぞ必ず深からんや、歸も來も身世は猶は空虛であるなり、【餘論】此の篇を以て、前の胡居士臥病と與胡居士皆病の詩と比較して見る、余は寧ろ此を取りて彼を取らず、其の故何ぞ、彼は偶に近く、此は全く詩なればなり、

調璿上人 并序

璿上人に調す、并に序

上人外人内天。不定不亂。捨法而淵泊。無心而雲動。色空無得。不物物也。默語無際。不言言也。故吾徒得神交焉。元關大啓。德海羣泳。時雨既降。春物俱美。序於詩者。人百其言。

上人は外人内天、不定不亂、捨法にして淵泊、無心にして雲動、色空得ること無きは、不物の物なり、默語無きは、不言の言なり、故に吾徒神交を得たり、元關大に啓き、德海羣泳、時雨既に降り、春物俱に美なり、時に序するもの、人其の言を百にす、

少年不足言。識道年已長。

少年言ふに足らず、道を識りて年已に長す、

事往安可悔。餘生幸能養。

事往いて安んぞ悔ゆべき、餘生、幸に能く養ふ、

誓從斷葷血。不復嬰世網。

誓つて葷血を斷ずるに従つて、復世網に嬰らず、

浮名寄纓珮。空性無羈鞅。

浮名纓珮に寄す、空性羈鞅無し、

夙從大導師。焚香此瞻仰。

夙に大導師に従つて、香を焚いて此に瞻仰す、

頽然居一室。覆載紛萬象。

頽然として一室に居す、覆載萬象紛たり、

高柳早鶯啼。長廊春雨響。

高柳早鶯啼き、長廊春雨響く、

牀下阮家屐。牕前筇竹杖。

牀下阮家の屐、牕前筇竹の杖、

方將見身雲。陋彼示天壤。

方に將に身雲を見、彼を陋として天壤に示さんとす、

一心在法要。願以無生獎。

一心法要に在り、願はくは無生を以て獎めん、

【注解】璿上人、開元末年の高僧、外人内天、外形は人間なるも、内心は天道なりとの意味、『莊子』を以て注するは右丞の意にあらず、不定不亂、『淨名經』に我觀如来、不定不亂とあり、捨法、世間の法を捨つるなり、淵泊、奥深きなり、色空無得、色も空も元來固定のものにあらず、執れし得ること無し、不物物、定まりし物體無きものが即ち定まりし物體なり、默語無際、黙するも不言にあらず、語るも言にあらず、不言言、言はざるものが、即ち言ふものなり、神交、至誠を以て交際するを言ふ、元關、支圖なるべきを清の聖祖の跡を避けて元關と書き、普朝の書往往之あり、佛法支理の關門を啓く、即ち璿上人の説教を言ふ、葷血、總て臭氣を有するもの、酒肉の類、世網、世間の愛網、我を縛して自由ならしめざるもの、羈鞅、高位高官を指す、空性、高位も高官も本來は空性なり、大導師、人天の大導師、即ち持戒の高僧を言ふ、覆載、天地なり、阮家屐、晉の阮孚、性履を愛し、常に屐を穿り之を履く、今以て璿が著くる所の屐に譬ふ、筇竹杖、漢の張翥が河渾より得來る所の竹にて製る、之を筇竹杖と曰ふ、方將、願本に方狀に作るは非なり、身雲、此の身を以て人間以上の法雲地に置くなり、陋彼、彼の神聖などの説を陋とするなり、天壤は天地なり、無生、大乘究竟の理を無生と曰ふ、

【大意】上人は外形は人間であるが、内心は天道に契ふの人なり、是の故に居常不定不亂にして、世

の俗法を捨てて其の心太だ淵泊なり、而かも無心にして雲動き、色空の無得にして得なるを覺り、不物にして物なるを知る、或は黙し或は語るも、亦不言の言なるを悟る、是の故に吾徒も外形を以て交はらず、神交を以ての故に交る、上人は大に玄關を啓きて吾徒に眞理を教ふ、其の徳海は大に闊く、羣衆も其の中に游泳するを得、今や時雨既に降りて、陽春の風物良に美なり、詩に序する所以は、詩百言の中に更に至信を致ふ、『少年時代は總て言ふに足らず、年長するに至りて始めて道なるものを識る、而かも少年時代の往事は悔ゆるも及ばず、幸にして餘生を保つが故に道を修養することを得、道は特に出世の道なり、出世の道は誓つて葦血の類を食はざるに在り、食ふものは世網に苦しむ人、世網に苦しめられざるは即ち斷肉の人なり、世の浮名を好む人は高位高官に寄意すれども、佛に於ける空性は毫も羈執すること無し、吾は夙に早く大導師に従うて教を受く、乃ち今日來謁して香を焚いて上人の威儀を瞻仰す、上人は吾と共に頽然として一室に居り、觀察するに天地は今や春物具に美にして、萬象紛然たり、高柳の上には早鶯が啼き、長廊の邊には春雨が響き、牀下には阮家の履あり、牕前には筇竹の杖あり、上人は自分の身を法雲地の上に置き、彼の怪事を説く天巫などの説を陋しとして以て天壤間の人間に示さんとす、吾が一心は法門の要諦を聞くに在り、吾も願はくは無生の理を説いて羣生を獎勵せんと欲す、

【餘論】此の篇も、事、佛典に關するを以て、各家の選本、一も之を採りしもの無し、高柳早鶯啼、長廊春雨響の二句を除く外、詩句と爲して採らざるものならん、安んぞ知らん、右丞が道に於て得る所の力、此等の詩に於て其の半面を表現せしことを、序の如きも餘人の言ふを欲せざる所、又言ふ能はざる語なり、是れ右丞たる所以なり、

送魏郡李太守赴任

與君伯氏別、又欲與君離。

君行無幾日、當復隔山陂。

蒼茫秦川盡、日落桃林塞。

獨樹臨關門、黃河向天外。

前經洛陽陌、宛洛故人稀。

故人離別盡、淇上轉驂駟。

企予悲送遠、惆悵睢陽路。

古木官渡平、秋城鄴宮故。

魏郡の李太守が任に赴くを送る

君が伯氏と別れ、又君と離れんと欲す、

君が行、幾日も無し、當に復山陂を隔つべし、

蒼茫として秦川盡き、日は落つ桃林の塞、

獨樹關門に臨み、黃河天外に向ふ、

前に洛陽の陌を經、宛洛故人稀なり、

故人離別し盡く、淇上驂駟を轉す、

予を企んで遠きを送るを悲しむ、惆悵す睢陽の路、

古木官渡平かに、秋城鄴宮故りたり、

想君行縣日其出從如雲。想君が行縣の日、其の出づるとき従ふもの雲の如きを、遙思魏公子復憶李將軍。遙かに思ふ魏の公子、復憶ふ李將軍、

【注解】伯氏、伯兄に同じ、「毛詩小雅」に、伯氏吹嘯とあり、山陵、山と陵なり、漢の古詩に悠悠隔山陵とあり、秦川、「方輿紀要」に、陝西謂之秦川とあり、今日の陝西と甘肅の二省を謂ふ、水則ち甘肅の清水縣湯峪より出で、西南して渭に注ぐ、桃林塞、陝西省桃林縣より西、潼關に至る皆桃林塞と爲す、宛洛、宛陽と洛陽なり、淇上、淇水の上、淇水は一名清水、河内の共縣より出づ、魏郡、魏は三馬を駕するなり、魏は魏の傍馬なり、魏陽路、河南の開封府魏陽郡なり、官渡、魏郡は河南開封道に屬す、舊河南省中牟縣の地、三國の世、曹操と袁紹と並を築き防禦せし處、鄴宮、今の河南臨漳縣の地、魏の曹操、之を鄴都と稱す、行縣、一縣を巡視し、良政を行ふの意味なり、如雲、徳を慕うて從者の盛んなるを言ふ、魏公子、曹操の子の曹丕を謂ふ、顧可久、無忌と言ふは漢の李將軍、曹操の臣の李典を謂ふ、顧可久、前漢の李廣を以て注す、誤りにあらずが、第二義に屬す、

【題義】此の題を説明するに判然と言斷する能はず、松谷曰く、唐、天寶元年を以て、相州魏郡を改めて鄴郡と爲し、魏州陽武郡を改めて魏郡と爲す、時中に云ふ所の官渡鄴城は、則ち是れ相にして魏にあらず、是の詩の作、當に開元の時に在るべし、或人劉昫の『唐書』を引きて曰く、楊國忠、政を秉り、郎官、己に附せざる者、悉く外に出す、李暉は考功郎中より出でて、睢陽太守と爲る、尋いで弟の暉、出でて魏郡の太守と爲る、兄弟、河を夾みて郡を典り、皆以て理行す、右丞が與君伯氏別、又欲與君離と稱するは、正しく顧魏兄弟を指す、松谷案するに國忠の秉政は天寶の時に在り、是の

時相州已に鄴州に改む、仍は魏號を稱するを得ず、蓋し是別に一人、李暉にあらざるなり、清潭案するに、或人の説は時中の意に依り、松谷の説は題の魏郡に重きを置けばなり、而も今日に於て兩説を是非する、作者右丞以外の者の判する能はざるものなれば、余は姑らく松谷の説に従つて、李暉以外の人ならんと定め置くなり、民國河南省開封道開封縣即ち是れなり、

【大意】昨日は君が伯兄と別を告げ、今日は又君と離れんとす、君が魏郡に赴任の日も還つて居る、君が此を去れば山陵を隔てて復見る能はず、思ふに君が征路は蒼茫として秦川の盡くる邊にて、桃林塞に到る時は日正に落つるべし、其の支路に當りて獨樹が聳ゆる邊即ち關門に臨む、此より黄河に沿うて段段と天外に向ふ、前面は洛陽の街陌に當る、而して宛陽にも洛陽にも故人は稀なり、舊は故人も居りしが、今や四方に離別して盡く、然らば君は淇上に騶駢を背轉して、登る所の故人即ち子を企んで其の送遠の厚情を悲しまん、夏に睢陽や官渡や鄴城等の行路を経過し、古木を看、舊史を憶ひ、惆悵の意を發するならん、余は想ふに君が役所に入りて政治を觀るの日、又其の一縣を巡視するの時、君の徳を慕うて従ふもの定んで雲の如くならん、是に於て又古の魏の二世や、魏の將軍の其の地に長く功績を餘されしことを思憶せざるを得ざるなり、

【餘論】此の篇は、四支と九秦と五微と七遇と十二文と五度換韻して作る、右丞の五古一韻なるもの多し、換韻此の如く玄妙なるもの其例少なし、景と情と相稱ひ、虛と實と相當る、六朝人の疊を摩し、

直ちに漢魏に駕するもの、香石山人曰く、言有盡而意無窮と、権評と謂ふべし、「唐賢三昧集」之を  
收む、眼ありと謂ふ可し、

送康太守

康太守を送る

城下滄江水、江邊黃鶴樓。

城下滄江の水、江邊黃鶴の樓。

朱欄將粉堞、江水映悠悠。

朱欄と粉堞と、江水映じて悠悠、

鏡吹發夏口、使君居上頭。

鏡吹夏口に發し、使君上頭に居る、

郭門隱楓岸、候吏趨蘆洲。

郭門楓岸に隱れ、候吏蘆洲に趨る、

何異臨川郡、還來康樂侯。

何ぞ異ならん臨川郡、還來る康樂侯、

【注釋】黃鶴樓、湖北武昌府城西兩隅に在り、黃鶴山に在るが故に名く、又、古仙人此に來り遊ふが故に名く、又、仙人此の處より黃鶴に乗つて去る、故に名く、孰れか眞を知り難し、朱欄、樓の欄干、朱を以て塗る、粉堞、樓の周圍の堞、粉を以て塗る、鏡吹、軍樂器なり、古、之を吹けば、行軍、行軍に及ぶ、今太守の出發を報するなり、夏口、武昌府の水に臨む處、今の漢口なり、居上頭、多人の中にて康は第一人者との意なり、楓岸、地名なり、蘆洲、地名なり、臨川郡、晉の謝靈運が宋の世に移り、宋の朝廷より内史を授けられし地なり、康樂侯、靈運、晉の世に於ては康樂公に封ぜらる、宋に至り侯に爵位を降さる、

【題義】黃が武昌を去つて他行するなりや、又他より武昌に赴任するなりや、題目のみにては判然せず、時に依つて之を案すれば、武昌を發して鄰縣に赴くを送るが如し、

【大意】城下を流るるは是れ揚子江の水なり、江上に聳ゆる閣は是れ黃鶴樓なり、黃鶴樓の朱色の欄干と粉壁の堞とが水に映じ、而して水の流れば悠悠たり、今や太守が出發を報する鏡吹は夏口より響き度る、多人數赴く中にて太守即ち使君は一番の上座たり、既にして夏口の郭門は萼萼と楓岸に隱れ、江水を候ふ官吏は匆匆と蘆洲に趨る、意ふに晉の代に康樂侯が臨川郡に赴く時の狀と此と比較して其れ異ならざるなり、

【餘論】此の篇は、右丞集中に在りて傑出せるものにはあらず、康其の人他に言ふべきもの無しとすれば、乃ち是れにて足る、但し康を送るに因りて康樂侯を假る、意義ありと謂ふべし、今人陶姓にあらざる人に對し、單に菊を愛する故を以て陶令を出して其の人を稱揚す、古人の詩を精讀せざるの失なり、右丞が此の詩以て法と爲すべし、

送陸員外

陸員外を送る

郎署有伊人居然古人風、

郎署伊人あり、居然たり古人の風、



天子顧河北詔書隸征東。  
拜手辭上官緩步出南宮。  
九河平原外七國薊門中。  
陰風悲枯桑古塞多飛蓬。  
萬里不見虜蕭條胡地空。  
無爲費中國夏欲邀奇功。  
遲遲前相送握手嗟異同。  
行當封侯歸肯訪南山翁。

天子河北を顧み、詔書征東を隸す、  
拜手して上官を辭し、緩歩して南宮を出づ、  
九河平原の外、七國薊門の中、  
陰風枯桑悲み、古塞飛蓬多し、  
萬里虜を見ず、蕭條として胡地空し、  
無爲にして中國を費し、夏に奇功を邀へんと欲す、  
遲遲として前みて相送る、手を握つて異同を嗟す、「んや、  
行く當に侯に封せられて歸るべし、肯て南山の翁を訪はし

【注解】郎署、侍郎、郎中、廣の世皆稱して郎官と稱す、唐以後専ら郎中員外を指して郎官と稱す、乃ち此の人の控へる官者、伊人、「詩經」に多く用ふる字、是人と同じ、居然、「ソノマ」云ふ義なり、天子、玄宗ならん、河北、今日の直隸省山東省一帶の地を謂ふ、征東、松谷の説に、開元天寶の間、征東の事蹟無し、征は安の誤にて、安東都護府を平壤城に置きしは、應元元年九月なり、是の説信に近し、拜手、禮に稽首、頓首、拜頭、而して拜手とあり、辭上官、上官を辭するにばあらず、諫が上官に別を致するならん、南宮、尚書省を南宮と曰ふ、九河、上古の黄河、孟津よりして北、分ちて九道と爲す、直隸の滹河間天津二府、山東の舊武定府等の處、皆九河の故道なり、七國、范陽國と燕國と北平郡と上谷郡と廣輿郡と代郡と遼西郡となり、皆薊州に屬す、薊門、薊州の北に在り、奇功、奇異殊功、敵の首を斬る等の功を指す、南山翁、右丞自身を謂ふ、終南山下の人なればなり、

【題義】陸は姓、員外は員外郎の略稱、官名なり、天子の命にて塞外に之く、右丞、之を送る時なり、

【大意】郎署に陸の如き人あるは、漢代の馬融其の儘の風あり、今天子は河北の地をも顧念し、又詔書を降して安東地方をも隸撫せしめらる、君は乃ち勅使と爲りて彼に赴く、是に於て上官に拜辭して、緩歩と歩して南宮の役所を出づ、向ふ處は何ぞや、古の九河を平原の外に觀、今の七國を薊門の中に察し、是の時や陰風吹いて枯桑悲しむが如く、古塞は今兵の守る用無きを以て飛蓬が多きのみなり、萬里の外、虜兵の影を見ず、寂寞蕭條として胡地の方兵塵空し、中國の兵力や財力を費して、彼等と戦ひ以て奇功を邀へんと欲するの心は、曾て爲すこと無し、余は君を送るに當り、遲遲として行く、戦亂の世の送りならば急を要するが、今は世は太平、之を送る遲遅たる所以、乃ち手を握りて古と今との異同を嗟歎す、太平の使者は太平の使者として功を樹て、侯に封せられて歸り來れよ、歸り來りしときは肯て是の南山の翁を訪ひ玉へ、

【餘論】此の篇、一韻の作、邊境の靜謐を敍し、事を敍し、別を敍し、句として掬むべき雄句は無きも、篇として完好なる大家の技倆自から彰彰たり、顧可久曰く宏古、



送宇文太守赴宣城

宇文太守が宣城に赴くを送る

寥落雲外山迢遙舟中賞

寥落たり雲外の山、迢遙として舟中に賞す、

鏡吹發西江秋空多清響

鏡吹西江に發し、秋空清響多し、

地迴古城蕪月明寒潮廣

地迴にして古城蕪れ、月明かにして寒潮廣し、

時賽敬亭神復解罟師網

時に賽す敬亭の神、復解す罟師の網、

何處寄相思南風吹五兩

何の處に相思を寄せん、南風五兩を吹く、

【注解】 寥落、靜かにして空し、迢遙、遠くして音かなり、敬亭神、敬亭山に祀る神、山は宣城郡の北十里に在り、神名華府君、罟を所り罟ありと爲す、五兩、旋後風、楚人、之を五兩と謂ふ、

【題義】 宇文太守が宣州宣城郡に赴くを送るの詩なり、

【大意】 舟中より雲外の山を望めば良に寥落たり、又舟中より之を賞すれば良に迢遙たり、鏡吹の響

を聞いて西江を發すれば、鏡吹の清響は秋空に入りて多きを覺ゆ、土地は清迴にして古城は荒蕪せり、天を仰げば月光は明明として寒潮の廣きに映じ、時ありては敬亭山の神に賽講し、時ありては罟師が魚を網することを學ぶ、相思の信を寄するに今後其れ何れの處にかせん、南風は五兩を吹いて翳まらざるなり、

【餘論】 此の篇の如きは、右丞集中最下なるものに屬す、『唐賢三昧集』之を收むるは何ぞ、

送綦母校書棄官還江東

綦母校書が官を棄てて江東に還るを送る

明時久不達棄置與君同

明時久しく達せず、棄置君と同じ、

天命無怨色人生有素風

天命怨色無し、人生素風有り、

念君拂衣去四海將安窮

念ふ君が衣を拂うて去ることを、四海將に安にか窮めん

秋天萬里淨日暮澄江空

秋天萬里淨く、日暮澄江空し、

清夜何悠悠扣舷明月中

清夜何ぞ悠悠たる、舷を扣く明月の中、

和光漁鳥際澹爾兼葭叢

和光漁鳥の際、澹爾兼葭の叢、

無庸客昭世衰髮日如蓬

庸無うして昭世に客たり、衰髮日に蓬の如し、

頑疎暗人事僻陋遠天聰

頑疎人事に暗く、僻陋天聰に遠ざかる、

微物縱可採其誰爲至公

微物縱ひ採る可きも、其れ誰か至公と爲る、

余亦從此去歸咩爲老農

余も亦此より去りて、歸咩老農と爲らん、

【注解】棄置、官を去るも官に在るもの意なり、天命、自然に一任する意なり、素風、生來の素質を謂ふ、拂衣去、人が留むるも肯かざるを謂ふ、扣舷、舷は船の邊を言ふ、和光、「老子」に和其光同其塵とあり、蕭蕭、恬靜と同じ、無庸、無用と同じ、頑疎、頑冥疎簡なり、天聰、天子聰明なり、

【題義】 恭母が校書郎の官を罷め、以て江東に歸隱するを送るなり、

【大意】 此の文明の朝に仕へて久しく志を達せず、棄つるも置かるるも惜念なきことは我も君と同じ、孰れにしても天命を知るもの怨色なぞは無し、人生は朝に可きも野に可きも各の性質がある、念ふに君は今官を罷めて去り、茫茫たる處に向つて何を頼めんとするや、秋天は萬里碧淨なり、日暮に及んで澄江は寥空たり、清夜の遊は何ぞ其れ悠悠たる、舷を扣いて以て歌ふ、天に明月あり、此の身を漁鳥の際、兼霞の叢に託して、彼等と和光し、彼等と澹爾たり、我も畢竟無庸の身を以て昭世の客と爲り、在官中に衰衰日蓬の如くに變ず、而かも頑疎人事に於て暗昧なり、僻陋の質、天子の聰明と遠ざかる、而かも我に於て探る可き所の能あらば、何人か薦達して然るべきも、至公と爲るべき人は無し、是の故に余も亦此より去つて、歸耕して老農と爲らん、

【餘論】 此の篇、一韻を以て成る、明時の四句は彼我に就いて言ひ、念君以下八句は校書が事を敘し、無庸以下の八句は自家の志を敘して結ぶ、

送六舅歸陸渾

六舅が陸渾に歸るを送る

伯舅吏淮泗卓魯方喟然

伯舅淮泗に吏たり、卓魯方に喟然、

悠哉自不競退畊東臯田

悠なる哉自ら競はず、退いて畊す東臯の田、

條桑臘月下種杏春風前

桑を條す臘月の下、杏を種う春風の前、

酌醴賦歸去共知陶令賢

醴を酌んで歸去を賦す、共に知る陶令が賢、

【注解】 伯舅、禮に、古の天子、男姓の諸侯に對して、稱して伯舅と云ふ、今は單に敬稱語と見るべし、淮、淮水は源、河南の桐柏山より出で、安徽江蘇の間を流れ、黃河に入る、泗水は源、山東の泗水縣陪尾山より出で、遂に淮と合して黃河に入る、卓魯、漢の卓茂と魯恭なり、二人共に徳化を以て人を信服せしめしなり、條桑、桑樹に手入れするなり、條桑は臘月に限らざるなり、臘月、冬至後、三戌を臘と爲す、酌醴、醴は甜酒、之を酌す一宿して成るものなり、

【題義】 六舅は何人なるを詳かにせず、陸渾は河南省の河南府陸渾縣なり、

【大意】 伯舅が官吏と爲りて淮泗地方を治めし時、古の卓茂や魯恭の如き善政を施したるも、一朝喟然として歎す、久しく在官すべからざることを、久しく在官するの非なるを覺らば、官の進級するなぞの事は競ふ要なし、乃ち悠哉を歌うて東臯の田に退耕するに及かず、臘月には桑樹を新條し、春風には杏樹を培種し、而して醴を酌みながら歸去來の辭を賦す、君も我も陶令の賢なるを固より知る

ものなり、

【餘論】此の篇、右丞に於ては眞に責を塞ぐの作、口に信せて章を作すものなり、

留別邱爲

邱爲に留別す

歸鞍白雲外、繚繞出前山。

歸鞍白雲の外、繚繞として前山を出づ、

今日又明日、自知心不閒。

今日又明日、自ら知る心閒ならざることぞ、

親勞簪組送、欲趁鶯花還。

親しく簪組を勞して送る、鶯花を趁うて還らんと欲す、

一步一回首、遲運向近關。

一步一回首、遲運として近關に向ふ、

【注解】特、管輅組、乃ち有位の人を謂ふ、近關、左傳に、襄伯玉遂行從近關出とあり、

【題義】邱爲も官を辭し、右丞も亦歸意あり、是に於て此の詩を作りて留別す、邱爲は蘇州嘉興の人、繼母に事へて孝、常に靈芝ありて堂下に生ず、官は太子右庶子となる、時に年八十餘にして母も亦恙無し、俸祿の半を母に給す、初めて郷に還る、縣令も之に謁して敬を致す、卒する年九十六、

【大意】白雲の外に向つて馬鞍を歸向す、繚繞旋回して前山を出づ、今日も明日も山又山と旋回すれ

ば、自分ながら心の閒ならざるを知る、高位の人も勞とせずして之を送る、余も亦鶯花の節を逃うて還らんと欲す、是の故に君と別れて一步しては背面を見、又一步しては背面を見る、近關に向ふに信に遲運たるものあり、

【餘論】此の篇は、短古として誦すべきものなり、願可久曰く、文斷意不斷、極婉戀宛曲冲澹、

送別

別を送る

下馬飲君酒、問君何所之。

馬より下して君に酒を飲ましむ、君に問ふ何にか之く所ぞ、

君言不得意、歸臥南山陲。

君は言ふ意を得ず、南山の陲に歸臥すと、

但去莫復問、白雲無盡時。

但去つて復問ふこと莫れ、白雲盡くる時なし、

【題義】送別の題は假りに設けたるものにして、必ずしも其の人あるにあらず、蓋し右丞自身のことを見るも可なり、

【大意】送る人が送らるる人を馬より下して之に酒を飲ましめ、且問うて曰く、君は匆匆として何くに之き玉ふや、送らるる人は曰ふ、余は世上に於て吾が意を達せず、是に於てか終南山の陲に歸臥せんと欲するのみ、君も早く歸去して重ねて問ふ莫れ、世上の榮は盡きる有るも、白雲は決して盡き

る時無し、

【餘論】此の篇、短古中の最上乘のもの、顧可久曰く、上の問答の意を承けて再び之を反して歸臥と開ふ、獨樂言ふべからざるなり、極めて婉轉含蓄高古、黃培芳曰く、此の種斷えて説盡せざるを以て妙と爲す、『唐賢三昧集』之を收む、真に神韻宗の究竟せるものなり、

王右丞集卷三終

王右丞集卷四

古詩 二十九首

送張五歸山

張五が山に歸るを送る

送君盡惆悵復送何人歸

君を送りて盡く惆悵す、復た何人の歸るを送らん、

幾日同攜手一朝先拂衣

幾日か同じく手を攜へて、一朝先づ衣を拂ふ、

東山有茅屋幸爲掃荆扉

東山茅屋あり、幸に爲に荆扉を掃へ、

當亦謝官去豈令心事違

當に亦官を謝して去るべし、豈心事をして違はしめん、

【大意】

張君が歸るを送りて惆悵の心情を盡す、復何人の歸るを送らんや、幾日も同じく手を攜へて遊びし人、一朝にして先づ衣を拂うて去る、僕も亦東山に茅屋あり、久しく歸らざる故に塵埃が滿ちたるならん、君幸に我が爲に荆扉を掃除して呉れ玉へ、僕も當に亦官を謝して去るべし、其の心事は決して違ふこと無し、

【餘論】此の篇、平語話の如し、願評の如く冲澹高古と云ふの外無し、

齊州送祖三

齊州に祖三を送る

相逢方一笑。相送還成泣。

相逢うて方一笑、相送りて還泣を成す、

祖帳已傷離。荒城復愁入。

祖帳已に離を傷み、荒城復入るを愁ふ、

天寒遠山淨。日暮長河急。

天寒うして遠山淨く、日暮れて長河急なり、

解纜君已遙。望君猶佇立。

纜を解いて君已に遙かなり、君を望んで猶佇立す、

【注解】祖帳、即ち祖席設くる所の帳、解纜、纜は船を繋ぐの索なり、題の齊州は河南道の濟南郡なり、

【大意】相逢ふときは一笑、相送るときは泣く、祖帳の席上にては離別を傷む、荒城の中には復入ることを愁ふ、而して是の時や、天寒うして遠山の色は淨く、日暮に及んで長河の流は急なり、纜を解いて舟も君も已に遙かに去る、送る者は君を望んで歸らんとせず、猶佇立して之を惜しむ、

【餘論】此の篇は、特に右丞の本領を見るもの、天寒の十字、景を敘すること自然にして、山の淨、河の急、目前に見るが如し、『唐賢三昧集』之を收む、識ありと言ふべし、

送綰雲苗太守

綰雲の苗太守を送る

手疏謝明王。腰章爲長吏。

手疏して明王を謝し、腰章して長吏と爲る、

方從會稽邸。夏發汝南騎。

方に會稽の邸より、夏に汝南の騎を發す、

按節下松陽。清江響錢吹。

節を按して松陽を下る、清江錢吹響く、

露冕見三吳。方知百城貴。

露冕三吳を見、方知る百城の貴きを、

【注解】手疏、奉する所の表啓なり、腰章、太守たるの印綬なり、長吏、縣令にて、郡長にはあらず、然るに右丞、郡長を以て太守と稱するは未詳と松谷云ふ、今、案するに、右丞が其の時代の縣官を誤る理由なし、意ふに苗は郡長にはあらずして、太守即ち縣令たりしものならん、秦時は秩二千石を以て郡守と稱し、漢の景帝の時、始めて太守と稱し、宋以後、郡を改めて府と爲す、故に知府を亦太守と稱す、按節、鞭を按持するなり、松陽、處州縉雲郡の松陽縣、露冕、後漢の代荊州の刺史郭異、殊政あり、明帝巡狩して南陽に到り、特に嗟歎せられ、賜ふに三公の服、顯赫冕を以てし、勅して拂を去り、露冕し、百姓をして此の衣服を見しめ、以て其の德を彰はす、三吳、吳興と吳郡と會稽なり、

【大意】太守に任命せられたるを手疏して其の恩を明王に謝し、其の腰には太守の太守たる印章を帯びて一郡の長吏たることを示す、太守は會稽郡の邸宅より出發して、郡郡の汝南よりも從騎が護衛して行く、而して多くの轡を按排して松陽縣を下る、是の時清江には其の行を響する錢吹の響きが起る、太守の風采は露冕して三吳を見る、三吳の人も太守の德を見る、其の貴さは百城の貴を知り得る

なり、

【餘論】此の篇、送別の詩として、尋常の語、馬上に於て顧眄して成るもの、顧可久評して高古といふ、右丞知るあらば一笑を發すべし、

送從弟蕃遊淮南

從弟蕃が淮南に遊ぶを送る、

讀書復騎射帶劍遊淮陰

書を読み復騎射し、劍を帯びて淮陰に遊ぶ、

淮陰少年輩千里遠相尋

淮陰少年の輩、千里遠く相尋ぬ、

高義難自隱明時寧陸沈

高義自から隠し難く、明時寧ろ陸沈せんや、

島夷九州外泉館三山深

島夷九州の外、泉館三山深し、

席帆聊問罪并服盡成擒

席帆聊か罪を問ひ、并服盡く擒と成る、

歸來見天子拜爵賜黃金

歸來天子に見え、爵を拜して黃金を賜ふ、

忽思鱸魚膾復有滄洲心

忽ち鱸魚の膾を思ひ、復滄洲の心あり、

天寒兼葭渚日落雲夢林

天は寒し兼葭の渚、日は落つ雲夢の林、

江城下楓葉淮上聞秋砧

江城楓葉下り、淮上秋砧を聞く、

送歸青門外車馬去駸駸

歸を送る青門の外、車馬去つて駸駸、

惆悵新豐樹空餘天際禽

惆悵す新豐の樹、空しく餘す天際の禽、

【注釋】淮陰、淮南に同じ、淮水以南の地、唐十道の一、今縣の名、民間江蘇省淮揚道に屬す、高義、『史記廉頗傳』に、從者君之高義也とあり、陸沈、『莊子郭註』に人中隱者、譬無水而沈也とあり、島夷九州、南海島上の夷と、支那全土の室、禹貢と爾雅と周禮と九州を説く、皆同じからず、茲に一一擧げる能はず、泉館三山、泉客の館する所、即ち鮫人の室、及び蓬萊と方丈と瀛洲の三山なり、席帆、島夷を征せんと欲して舟を出すを謂ふ、并服、布葛の衣服なり、鱸魚膾、晉の張翰は秋風の起るを見て、乃ち吳中の鱸魚の膾の美を思ひ、官爵を捨てて去る、滄洲、猶ほ水濱と言ふがごとし、隱者の居る所、雲夢、種種の説ありと雖も、今の湖北省安陸縣の南に在る雲夢澤是なり、本、二澤にして、猶ほ江北、夢は江南、方八九百里、華容以北、安陸以南、枝江以東、皆其の地、併稱して雲夢と曰ふ、新豐、縣名なり、漢の高祖の故城、今陝西省臨潼縣東北なり、

【大意】少壯にして書を読み、復騎術射術を學び、漢の韓信の如く淮陰の城下に遊ぶ、淮陰の少年輩、是同志の者なりとして皆來り尋ね盟を結ぶ、其の高義は自ら隠し難きのみならず、明時に際會して寧ろ陸沈して止むべけんや、島夷九州の外の遠きも、泉館三山の深く難なるも、席帆を懸けて以て彼等の罪を問はざるべからず、而かも彼等を盡く征服して擒とせざるべからず、而して歸來天子に謁見し、其の軍功に因つて爵を拜し、黃金を賜うて功を表せらるべし、功名の下は久しく居るべから



す、忽ち故郷鱸魚の膾の美を思ひ、秋風に復滄洲を慕ふの心を生ず、天は寒うして清し兼葭の渚、日は落ちて晉からんとする雲夢の林、而して江城は楓葉が紛紛として下り、淮上は秋砧が寥寥として響く、我は其の歸游を青門の外に送り、既にして車馬の去つて駿殿として早きを思ふ、惆悵として新豐の樹上に當りて、其の歸宿を急ぐ天際の禽の飛ぶを餘すのみ、

【餘論】此の篇、唯一讀したるときは、意義明白ならざるやの感あり、趙松谷曰く、按ずるに、「刻吻唐書本紀」に、開元二十年九月、渤海靺鞨、登州に寇し、刺史韋俊を殺す、將軍蓋福順に命じ、兵を發し之を討たしむ、又「北狄列傳」に、金思蘭をして、新羅に往き、兵を發し、以て其の南境を攻めしむ、山阻寒凍、雪深丈餘、兵士死する者過半、功無うして還る、詩中云ふ所、鳥夷泉館、席帆間罪、疑ふらくは蕃是の時に於て、諸將に従ひ、海に泛び往攻する者なり、然りと雖も無功にして爵を拜する事なし、木蘭詞に、歸來見天子、天子坐明堂、策勳十二轉、賜物百千強、蓋し詩人溢美の語なり、清潭案す、右丞が自注無きを以て、此の詩の本義本何くに在るや、判然せざるが、松谷の言或は其れ當らん、顧可久は曰く、讀書以下十二句は、蕃が舊日の仕功を敘し、忽思以下六句は、今日淮に遊ぶの意を敘し、送歸以下四句は、自ら送別の意を敘すと、尙後賢の研究を望む、筆力俊偉、漢魏に逼る、

送權一

權二を送る

高人不可友清論復何深。  
一見如舊識一言知道心。  
明時當薄宦解薛去中林。  
芳草空隱處白雲餘故岑。  
韓侯久攜手河嶽共幽尋。  
悵別千餘里臨堂鳴素琴。

高人友とすべからず、清論復何ぞ深き、  
一見舊識の如く、一言道心を知る、  
明時薄宦に當り、薛を解きて中林を去る、  
芳草隱處を空しうし、白雲故岑を餘す、  
韓侯久しく手を攜へ、河嶽共に幽尋せん、  
悵別千餘里、堂に臨んで素琴を鳴らす、

【注解】舊識、「左傳」に、手札、鄭に聘せられ、子産を見る、舊相識の如し、薄宦、職の何進の詩に、薄宦車馬歸裏とあり、下故の宦なり、解薛、薛蓋は隱者の服、中林、林中を倒用する語、

【題義】權二が官吏と爲り之に赴くを送る詩、

【大意】君の如き高人は久しく友とすべからず、君の清論は復た非常に深し、一見して舊相識の感あり、乃ち其の一言を聞いて君の道心を知る、如何にせん此の明時に當り君は去つて官吏と爲る、薛羅の衣を解き合て、林中を出で去る、君の去りし後は、芳草は其の隱處に空しく生え、白雲は依然とし

て故岑の上に餘す、余は韓侯と久しく手を攜ふ、河嶽を共に幽尋せんのみ、君と別れて今より千里を隔つ、乃ち慨然として堂に臨んで素琴を鳴らす、

【餘論】此の篇、權二が宦に赴くを憐むが如く、又惜しむが如く、薄宦の文字、自分を言ふは可ならんも、他人に言ふは不可なるを覺ゆるも、後輩に對して、別に異議無きものなるか、

送高道弟耽歸臨淮作

高道弟耽が臨淮に歸るを送りて作る

少年客淮泗落魄居下邳

少年淮泗に客たり、落魄下邳に居る、

邀游向燕趙結客過臨淄

邀游燕趙に向ひ、客を結んで臨淄に過ぐ、

山東諸侯國迎送紛交馳

山東諸侯の國、迎送紛として交も馳す、

自爾厭游俠閉戶方垂帷

爾しより游俠を厭ひ、戸を閉ちて方に帷を垂る、

深明戴家禮頗學毛公詩

深く戴家の禮を明かにし、頗く毛公の詩を學ぶ、

備知經濟道高臥陶唐時

備に經濟の道を知り、高臥す陶唐の時、

聖主詔天下賢人不得遺

聖主天下に詔し、賢人遺すことを得ず、

公吏奉繚組安車去茅茨

公吏繚組を奉じ、安車茅茨を去る、

君王蒼龍闕九門十二達

君王蒼龍闕、九門十二達、

羣公朝謁罷冠劍下丹墀

羣公朝謁罷んで、冠劍丹墀を下る、

野鶴終踉蹌威鳳徒參差

野鶴終に踉蹌、威鳳徒に參差、

或問理人術但致還山詞

或は人を理する術を問へば、但山に還るの詞を致す、

天書降北闕賜帛歸東菑

天書北闕より降り、賜帛東菑に歸る、

都門謝親故行路日逶遲

都門親故を謝し、行路日に逶遲たり、

孤帆萬里外森漫將何之

孤帆萬里の外、森漫將に何に之かんとする、

江天海陵郡雲日淮陰祠

江天海陵郡、雲日淮陰の祠、

杳冥滄洲上蕩萍無人知

杳冥たり滄洲の上、蕩萍として人の知る無し、

緯蕭或賣藥出處安能期

蕭を緯し或は藥を賣り、出處安んぞ能く期せん、

【注解】淮泗、淮水は西南虹縣界より流れて、徐城縣に入り、泗水は西彭城縣より流れて下邳縣に入る、下邳は今日の江蘇省邳縣なり、燕趙、今日の直隸山西一帯の地、臨淄、唐代青州の臨淄縣、今日の山東省濟南府附近の地、閉戶、後漢の魯恭、大學に居り、魯

詩を習ひ、閉戸して讀書し、人間の事を絶つ、垂帷、前漢の董仲舒、孝景の時、博士と爲り、帷を垂れて讀書す。戴家禮、後漢の時、戴德と戴德が兄の子に戴聖とあり、共に禮に達す、德を大戴禮と爲し、聖を小戴禮と爲す、毛公詩、前漢の毛萇、詩を治めて河間獻王の博士と爲る、子夏が傳ふる詩に依つて訓詁傳を作る、是を毛詩古學と爲す、經濟、經世済民の道なり、陶廣、上古の蜀人、博祖、【爾雅】に一染之を緇と謂ひ、二染之を頹と謂ひ、三染之を緇と謂ふ、淺褐色「ウスマカ」色なり、組は組緇、蒼龍岡、未央宮の東に蒼龍岡あり、北に玄武岡あり、九門、路門、應門、庫門、庫門、庫門、城門、近郊門、遠郊門、關門、之を天子の九門と曰ふ、十二遊、通衢の大道、十二區劃あるなり、駘輪、行不正貌と注す、又俗に亂走を以て駘輪と爲す、北闕、漢の未央宮を北闕と曰ふ、師古曰く未央は南向すと雖も、上書圖見の徒、皆北闕に詣る、賜帛、漢の昭帝、韓福の德を表はし、賜帛五十匹、今以て駘に譬ふ、東園、田一畝なるを富と曰ふ、今以て田園に歸るを謂ふ、遷避、歴意の貌、孟漢、山水遼廣の貌、海陵郡、漢には縣たり、臨淮郡に屬す、晉に郡と爲す、淮陰祠、恐らくは韓信の祠ならん、韓蕭、【莊子】に、河上に家貧しうして、韓蕭を恃んで食ふ者あり、其の子、淵に没じて千金の珠を得と、韓は「ツカマ」蕭は「モギ」なり、

【大意】耽は少年の時、淮酒の間に客と爲り、生活の道に豊ならずして下邳に居る、既にして遊遊して燕趙に向ふ、燕趙義侠の士と結盟して臨淄に過ぐ、而して山東諸侯の國、相互に迎送して紛紛と交も馳す、此より後、其の今日に至るまでの遊俠の非なるを厭ひ、友と絶ち戸を閉ぢ、又帷を垂れ、深く戴家の禮道を研究し、又頗く詩經の義理を沈潜し、又備さに經世済民の道を學び、身を陶唐氏時代に置く、然るに明天子は天下に詔して賢人を召す、賢人は田に居るを許さず、盡く公吏と爲る、耽も亦公吏と爲つて總組を奉するに至る、乃ち今日まで安居したる茅茨を去つて、宮廷に出仕する身と爲る、君王は蒼龍岡に在す、九門十二遊の間を往來して日に其の務を爲す、他の羣公も天子に朝謁し

罷んで、文冠や武劍が前後して丹墀を退下す、然るに耽は野鶴の如き高き性、威鳳の如き質、宮廷なぞに於ては踰躅たらざるべからず、參差たらざるべからず、人若し如何が理人の術ありやと問ふものあれば、我は理人の術を知らず、唯是れ野鶴山嶽と親しむの詞を致す、是に於て辭表を呈すれば、天子之を聽許せるのみならず、在官中の功を勅して帛を賜うて、東菑に歸るを許し玉ふ、乃ち都門に於ける親戚や故舊に謝し、故郷に向つて行路は日に逶迤する、孤帆向ふ所は萬里の外、森森漫漫たる中を何くに之かんとする、指す所は江天の海陵郡、雲日は淮陰の祠に當る、乃ち滄洲は杳冥たり蕩漭たり、世事に營營たる人の知る所にあらず、蕭を緯ねて食ひ、又藥を賣りて活計とす、出も已に偶然なり、處も亦偶然なり、出處共に期したるものにあらざるなり、

【餘論】此の篇、一韻を以て成る、初は耽が諸生の時を敘し、中は公吏たりし時を敘し、終は其の歸隱を敘す、作意明白、右丞が家風を喜ぶもの、此等の詩を學ぶべきなり、

送別

別を送る

聖代無隱者、英靈盡來歸。  
遂令東山客、不得願採薇。

聖代隱者無し、英靈盡く來歸す。  
遂に東山の客をして、採薇を願ふるを得ざらしむ。

既至君門遠。孰云吾道非。  
江淮度寒食。京洛縫春衣。  
置酒長安道。同心與我違。  
行當浮桂棹。未幾拂荆扉。  
遠樹帶行客。孤城當落暉。  
吾謀適不用。勿謂知音稀。

既に君門の遠きに至り、孰れか云ふ吾道非なりと、  
江淮寒食を度り、京洛春衣を縫ふ、  
置酒す長安の道、同心我と違ふ、  
行く當に桂棹を浮ぶべし、未だ幾ならず荆扉を拂はん、  
遠樹行客を帯び、孤城落暉に當る、  
吾謀適に用ひず、謂ふこと勿れ知音稀なりと、

【注解】英靈、陳の江總、隋の李德林を歎稱して曰く、此れ何朝之英靈也、吾道非、史記孔子世家、詩云、兕にあらす虎にあらす、彼の曠野に率ふ、吾道非耶、吾何すれぞ此にする、寒食、冬至より一百五日後、疾風甚雨あり、之を寒食と謂ひ、禁火三日、城中、  
題無し、京洛、東京と洛陽なり、

【題義】『河嶽英靈集』『文苑英華』に送萊母潛落第還鄉に作る、詩を案するに、此の題の然るを知るなり、

【大意】聖代には山中に隠れて處る者無し、英靈の人と稱せらるる者は盡く出でて官に仕ふ、遂には東山に志を養うて高臥せし人も、探薇の歌を誦して居ることを得ざらしむ、然るに君は不幸にして廟堂に上るを得ず、君門と遠ざかるに至る、古は孔夫子も吾道非と歎せられしが、君も此の歎を發せ

ざるを得ず、江淮の間に流寓して寒食の節をも過ぎ、又京洛の衢に春衣を縫ふの期に會ふ、既にして歸を思ひ置酒して留別の意を長安の道に致さんとす、然るに同心の友多く我と相違す、此より去つて當に桂棹を浮べて悠遊すべし、自分の安處處たる荆扉を拂ふも近きにあるべし、君の歸路の狀は如何、遠樹の邊、孤城の下、落日の光暉、一人蕭蕭として行く影を照すならん、君は吾は善謀するが世は用ひすと不平を言ひ玉ふな、天下に知音の者もあり、決して君をして不平に終はらしめず、  
【餘論】此の篇も一韻の作、右丞集中送別詩中に在りて上乘の部に屬するものなり、遠樹の十字、詩中に畫あるもの、『唐賢三昧集』之を收む可、願可久曰く婉曲雅正、

送張舍人佐江州同薛據十韻

張舍人が江州に佐たるを送る、薛據に同ず、十韻

東帶趨承明。官惟謁者。  
清晨聽銀蚪。薄暮辭金馬。  
受辭未嘗易。當御方知寡。  
清範何風流。高文有風雅。

東帶して承明に趨る、官を守る惟謁者、  
清晨に銀蚪を聴き、薄暮に金馬を辭す、  
辭を受けて未だ嘗て易らず、御に當りて方に寡さを知る、  
清範何ぞ風流、高文風雅あり、

忽佐江上州當自潯陽下  
 逆旅到三湘長途應百舍  
 香爐遠峯出石鏡澄湖瀉  
 董奉杏成林陶潛菊盈把  
 彭蠡常好之廬山我心也  
 送君思遠道欲以數行灑

忽ち江上の州に佐たり、當に潯陽より下るべし、  
 逆旅三湘に到る、長途應に百舍なるべし、  
 香爐遠峯出で、石鏡澄湖瀉ぐ、  
 董奉杏林を成し、陶潛菊把に盈つ、  
 彭蠡常に之を好す、廬山は我が心なり、  
 君を送りて遠道を思ふ、數行を以て灑がんと欲す、

【注解】承明、殿の名、未央宮中に在り、宮廷の著作所とす、銀閣、今日の所謂時計、銀製、銅製あり、時來れば銅籠の口より水を吐き以て其の刻を知る、金馬、宣署の門なり、門の旁に銅馬あり、故に謂ふ、當朝、日本語の善き御世に當るとなり、又當は直なり、御は過なりと注して、直事易變に應ずるの謂ひなり、清範、清康規範、多くの役人の標準と爲るなり、風流、古人の遺風餘韻なり、江上州、江西省江州潯陽郡、潯陽江は九江府城北に在り、峴山より出でて、此に至り下流して四十里、彭蠡湖と合流して海に入る、逆旅、逆は迎なり、旅は客なり、賓客を迎止する處、三湘、湘潭と湘陰と湘鄉となり、巴陵縣の東北十二里、百舍、百里一舍の意味、香爐峯、廬山の別峯、其の峯尖圓、煙雲叢散、博山香爐の狀の如きを以て是の名あり、石鏡、廬山の東に在り、照水の出づる所、一圓石あり、照星明淨、人形を照見す、故に是の名あり、董奉杏、一帯賣杏の注を看よ、陶潛菊、陶潛、九月九日酒無し、東籬の菊を摘み把に盈つ、時に白衣の人王安酒を送り來る、即ち酌んで懷を盡す、彭蠡、一名宮亭湖、江州潯陽郡の界に在り、顧水范蠡に作る、異なり、廬山、潯陽郡中の名山とす、周の世には匡俗先生居居し、晉の世には逯法師居居す、高さ二千三百六十丈、周り二百五十里、

【題義】張が舍人の官より進級して江州知事の輔佐となり、潯陽郡に赴くを送るの詩なり、薛據と同じく是の詩を賦す、

【大意】張が今日まで東帶して承明殿に出仕して、其の官として守る役は謁者即ち通事舍人なり、清晨には早く出勤して、銀蚪を聴き、薄暮には官事を了へて金馬門を退辭す、舍人の辭令を受けてより殿正に其の職を守る、聖代の御宇に當りて其の動直なること方に寡し、其の清範は、古の官吏の遺風餘流あり、其の高文は、古の詩經風雅の旨あり、一朝忽ち榮轉して江上州知事の輔佐と爲る、其の赴任の路は潯陽江より下り、中途宿泊して三湘を經過す、此の間里程長くして百舍を経ることならん、既にして香爐峯の遠く雲中に出づるを認めん、又石鏡の邊に至れば、澄湖に清水の瀉ぐを見ん、昔し廬山を慕ひ、名醫の董奉は杏を種えて林と爲し、晉の高士の陶潛は菊を採りて把に盈つ、其の董も陶も共に彭蠡を好むの人、我も亦之を好む、廬山は恆に我が心にある所なり、今や君を送りて其の遠道なるを懸念す、無事なるを祈ると同時に離別の泪を灑がんと欲するなり、

【餘論】此の篇も一韻の作なり、前半は張が舍人としての勤務を敘し、後半は張が赴任の事を敘し、清康なる古人を擧げて以て張の清廉に譬ふ、別に奇警なる文字無しと雖も、章法謹嚴、以て後世の法と爲すべし、



送韋大夫東京留守

韋大夫が東京留守を送る

人外遺世慮空端結遐心

人外世慮を遺れ、空端遐心を結ぶ、

曾是巢許淺始知堯舜深

曾是巢許淺く、始めて知る堯舜の深きを、

蒼生詎有物黃屋如喬林

蒼生詎ぞ物ある、黃屋喬林の如し、

上德撫神運沖和穆宸襟

上德神運を撫し、沖和宸襟穆たり、

雲雷康屯難江海遂飛沈

雲雷屯難を康くし、江海飛沈を遂ぐ、

天工寄人英龍哀瞻君臨

天工人英に寄せ、龍哀君臨を瞻る、

名器苟不假保釐固其任

名器苟くも假さず、保釐固に其の任、

素資貫方領清景照華簪

素資方領を貫き、清景華簪を照らす、

慷慨念王室從容獻官箴

慷慨王室を念ひ、從容官箴を獻す、

雲旗蔽三川畫角發龍吟

雲旗三川を蔽ひ、畫角龍吟を發す、

晨揚天漢聲夕卷大河陰

晨に揚ぐ天漢の聲、夕に卷く大河の陰、

窮人業已寧逆虜遺之擒

窮人業已に寧し、逆虜之が擒を遺る、

然後解金組拂衣東山岑

然後金組を解き、衣を拂ふ東山の岑、

給事黃門省秋光正沈沈

給事す黃門省、秋光正に沈沈、

功名與身退老病隨年侵

功名身と退き、老病年に隨つて侵す、

君子從相訪重玄其可尋

君子從つて相訪はば、重玄其れ尋ぬべし、

【注解】人外、人間世外の意、後漢の尹勣、字は叔梁、篤性好學、人外に屏居し、荆襄門に生ずと、空端、多端、千端の反對、遐心、遠心と同じ、巢許、巢父と許由、巢は堯時の人、許は舜時の人、共に山居して、世利を嘗まず、蒼生、普通の人民、黃屋、漢書に黃屋左纛とあり、天子の車、黃綸を以て蓋と爲す、上德、老子に、上德は德あらず、是を以て德あり、天子の大德を謂ふ、神和、高僧傳に、晉の惠遠、天竺禪師、儀止神和とあり、傲慢の反對なり、屯難、易の語、屯は「ナラム」、難は「クルシム」なり、天工、天官なり、『尚書』に天工人其れ之に代るとあり、人英、『淮南子』に天道に明、地理に察、人情に通じ、大以て衆を容るるに足り、德以て衆を懷くるに足り、信以て衆を「に」するに足り、知以て衆を知るに足る者は人の英なり、龍哀、哀龍に同じ、天子の衣、聖、劉顧の二本、猶に作る、今取らず、名器、名は爵號、器は車服、保釐、保は安なり、釐は理なり、素資、韋大夫の素資なり、方領、『後漢書馬援傳』に、朱勃、方領を衣、能く短歩すとあり、衣領方正なるは學者の服なり、清景は日影なり、華簪、韋大夫の頭冠を謂ふ、官箴、百官が天子の過を戒むるの書なり、雲旗、熊虎を旗に畫き旗と爲し、雲氣に似たるなり、三川、洛陽を言ふ、伊水と洛水と黃河と洛陽を繞る故に是の名あり、畫角、角を以て製し、之に繪あるの笛、天漢、中國天子の官軍、大河陰、黃河の陰なり、窮人、困窮する人民、解金組、官を辭するなり、黃門省、門下省とも謂ひ、黃閣とも謂ふ、給事中は此の省の役人なり、沈沈、秋光の靜寂を言ふ、君子、韋大夫を指す、重玄、『老子』に玄之又玄とあり、是れ重玄なり、



【題義】肅宗の乾元二年七月に、禮部尚書韋陟を以て東京留守と爲す、是の詩即ち其の時の作なり、是より百年前、太宗が高麗を伐つ時、初めて京城留守を置く、其の後、車駕京師に在らざるときは、則ち留守を置く、乾元二年は史思明を討たん爲め車駕を出し、其の留守と爲りしものと思ふ、東京は漢代より洛陽を稱す、而して長安の西京に對するなり、

【大意】人世の外に逃れて世慮を遺れ、又人世とも無き空端に向つて遐心を結ぶが如き、曾て是巢父や許山の淺薄の思想であるなり、其の巢許の考の淺きを知らば、直に堯舜の如き人を救ふに志あるの深厚なるを知るなり、蒼生を救ふ人から蒼生を見れば、詎ぞ物あらんや、黃屋を陋しきものと見ず、直ちに之を喬林の如く清きものと見るべし、上徳は萬物を撫育して精神を運爲し、人外と謂ひ、人中と謂ふ、小事を區別せず、唯冲和を以て宸襟を肅穆にす、或は雲雷の如くに屯難を康んじ定め、或は江海の大も飛沈を自由に遂げ、天子と爲る者は是人中の英なり、袞龍の衣を衣て以て四海に君臨するを瞻る、大夫と爲り、留守と爲るの名と實とを假のものとしせざるときは、天下を安理する固に其の任務であるなり、君が素資は方領を貫く正士なり、又其の風采は堂堂として、日影が華鬢を照して明かなり、平生慷慨の念は唯王室に在り、是の故に天子に遇あれば、從容として規箴と爲る言を獻ず、今や官軍の雲旗は三川を蔽うて、賊を征する爲めの畫角は非常なる音を發す、出兵の晨には堂堂と官軍の威力を揚示し、而して夕には黃河の陰を靡卷するに至る、干戈の爲め困窮せし人民も

意も業已に平事と爲る、捕虜とすべき者は捕虜として之を其の所に遺る、君が爲すべき事を爲して後は軍装を解き、而して衣を東山の岑に拂ふべし、而して大夫は黃門省に給事す、今や秋光が正に沈沈たるの節、余は功名の念も身と共に退き、老病も年年に侵すを覺ゆ、若し大夫が余を訪うて至らば、所謂人外の女の女たる道を尋ね論せんのみ、

【餘論】此の篇も一韻の作とす、先づ人外に安を求むるの非なるを敘し、次ぎに天子の徳を敘し、其の出師に及び、最後に大夫が事を敘し、結末我が情を敘す、風骨遒勁、漢魏に通る、清遠閒澹を以て右丞の全面目を評する者は、宜しく此の篇を精讀すべきなり、

資聖寺送甘二

資聖寺に甘二を送る

浮生信如寄薄宦夫何有、  
來往本無歸別離方此受、  
柳色滿春餘槐陰清夏首、  
不覺御溝上銜悲執杯酒。

浮生信に寄するが如し、薄宦夫何ぞ有らん、  
來往本歸る無し、別離方に此に受く、  
柳色春餘に滿たり、槐陰夏首に清し、  
覺えず御溝の上、悲を銜んで杯酒を執る、

【注釋】浮生、「離騷經」に、是身如泡、不得久立とあり、泡は即ち浮なり、此受、「文苑英華」に正受に作る、宣靈閣註、

古詩 資聖寺送甘二

【題義】資聖寺は長安崇仁坊東南隅に在り、本太尉趙國公長孫無忌の宅、龍朔三年、文德皇后追福の爲め尼寺と爲す、咸亨四年、改めて僧寺と爲す、長安三年七月、回祿す、灰中、經數部を得、一字を損せず、百姓施舍、數日の間獲る所鉅萬、遂に營造故の如し、長安は則天の年號、中宗の嗣聖二十年に當る、右丞此の時、何年の作なるや、明白ならず、

【大意】人生は浮ぶが如く又寄するが如きのみ、郡長と爲り縣令と爲るも、夫れ何ぞ久しきものあらんや、來往の間に生を過ぎ、本適歸する所は無し、而かも別離は今日方に此に受く、柳色は未だ衰へず、晩春に猶鶯鶯たり、槐陰は漸く盛んにして、夏首に清陰盈つ、君を送りて覺えず、御溝上時此の寺にて、悲情を衝みながら杯酒を執る、

【餘論】此の篇、送別の處、僧寺なるを以て、寄、有、歸、受等の佛家の語を運用す、謝康樂を善學せるものなり、

留別山中温古上人兄并示舍弟縉

山中温古上人の兄に留別し、并せて舍弟縉に示す

解薛登天朝去師偶時哲 薛を解きて天朝に登り、師を去りて時哲に偶す、

豈唯山中人兼負松上月  
宿息同游止致身雲霞末  
開軒臨穎陽臥視飛鳥沒  
好依盤石飯屢對瀑泉歇  
理齊少狎隱道勝寧外物  
舍弟官崇高宗兄此削髮  
荆扉但灑掃乘閒當過拂

豈唯山中の人のみならん、兼ねて松上の月に負く、  
宿息游止を同じうし、身を致す雲霞の末、  
軒を開きて穎陽に臨み、臥して視る飛鳥の没するを、  
好し盤石に依りて飯し、屢ば瀑泉に對して歇ふ、「せんや、  
理齊しうして少うして隠に狎れ、道勝れて寧ろ物を外に」  
舍弟官崇高、宗兄此に削髮す、  
荆扉但灑掃し、閒に乗じて當に過拂すべし、

【注解】無許、隱者の服を解くなり、去師、受業の師の許を去る、時哲、時代の哲士、穎陽、河南府に穎陽縣あるも今は直らに之を指すにあらず、頭水の陽なる意ならん、道勝、「淮南子」に、先王之遺勝故肥とあり、削髮、出家得度を謂ふ、

【題義】山中に在る温古上人の兄に留別するに際し、此の詩を賦し、兄に示すと同時に舍弟の王縉に示すなり、

【大意】余は隱者の服を解きて官吏と爲り、乃ち道を問ふ師の許を去りて時代の哲士と偶行する、此の如きは唯山中の人に背くのみならず、兼ねて又松上の月にも負く、今にして宿昔の事を思へば上

人等と遊止を同じうして、自分の身も雲霞の末席を汚せしなり、其の間に於て或は軒を開いて頰陽を臨み、或は臥しながら飛鳥の没するを視、好し盤石に身を依せて飯を喫し、又屢ば灑泉に對看して身を歌ひ、上人等と同調同理を以て少年の時より隱者の事に狎れ、道の勝れたる事を知れば、總ての外物は決して外物にあらず、皆我が有なり、舍弟も官は幸に崇高なり、宗兄も亦髮を除きて僧と爲る、幸に荆扉を灑掃して、我が間に乘じて過拂することを待ち玉へ、

【餘論】此の篇、四人共に同心同調、澹素澹思なるを敍して、冲古味多し、六朝の大家を學んで、斧鑿の痕を見ず、換骨奪胎の妙、右丞の力にあらずんば、其れ此に至らず、

親別者

別るる者を觀る

青青楊柳陌陌上別離人

青青たり楊柳の陌、陌上別離の人、

愛子游燕趙高堂有老親

愛す子が燕趙に遊ぶを、高堂に老親あり、

不行無可養行去百憂新

行かすんば養ふべきなし、行き去るも百憂新なり、

切切委兄弟依依向四鄰

切切として兄弟に委し、依依として四鄰に向ふ、

都門帳飲畢從此謝親賓

都門帳飲し畢り、此より親賓を謝す、

揮泪逐前侶含悽動征輪

泪を揮うて前侶を逐ひ、悽を含んで征輪を動かす、

車從望不見時時起行塵

車從望んで見えず、時時行塵を起す、

余亦辭家久看之淚滿巾

余も亦家を辭する久し、之を見て涙巾に滿つ、

【注解】青青、漢の古詩に青青河畔草、切切、家語に切切而哀とあり、懸到にして憂思の貌、依依、含つるに思ひざる貌、柳、江文通の賦に、帳飲東都、送客金谷とあり、揮泪、揮は拭ふと同じ、含悽、心中憂思あり、外形に表はる、行塵、江文通の賦に、見行塵之時起とあり、

【題義】陌上に於て離別する人の狀を觀て賦せしものなり、

【大意】陌上の楊柳は春に遇うて青青たり、陌上に柳を折りて離別する人は悽悽たり、我は愛す子が燕趙に向つて遊ぶ意を、何故に愛すると言はば、高堂に猶ほ老親あり、之を養ふには行いて謀を求めざるべからず、而かも行くには家に老親を留め、心に關すること多し、是を以て切切に兄弟に扶養の事を委託し、依依として四鄰の人に後事を依頼す、乃ち都門に於て離別の杯を酌み、而して親賓に對して謝言を敍べ、憂思を含みながら馬車を動かす、既にして車從は去りて、望むも見えずなりぬ、時時に車塵の起るを望見する、之を觀て余も亦家を離れて久しきことを憶ひ出す、其の境遇の同じきを思ひ、雙淚が巾に滿つるなり、

【餘論】此の篇、平平に敘し去りて、而かも情至るの詩、「庚溪詩話」に、車從の十字を擧げて戀戀去るに忍びざるものと歎す、顧可久曰く冲古、

別弟縉後登青龍寺望藍田山

弟縉に別れて後青龍寺に登り藍田山を望む

陌上新別離、蒼茫四郊晦。陌上新に別離し、蒼茫として四郊晦し、  
登高不見君、故山復雲外。高きに登るも君を見ず、故山も復雲外、  
遠樹蔽行人、長天隱秋塞。遠樹行人を蔽ひ、長天秋塞に隱たり、  
心悲宦游子、何處飛征蓋。心悲しむ宦遊の子、何れの處にか征蓋飛ぶ、

【注解】蒼茫、無涯の貌、秋塞、秋日の要塞、國の險を扼するを塞と曰ふ、飛征蓋、漢の劉楨が詩に、單車飛素蓋の句あり、

【題義】弟の縉が宦命にて旅行するを送りし後、獨り青龍寺の山に登り、郷里の藍田山を望んで作る詩なり、青龍寺は長安南門の東に在り、隋の開皇二年立つる所、始め靈藏寺と稱す、武德四年、觀音寺と改め、景雲二年、改めて青龍寺と爲す、前は終南山に對し、登眺の絶勝と爲す、

【大意】君と陌上にて新たに別離し、此の時蒼茫として四郊漸く晦からんとす、乃ち青龍寺山に登る

と雖も君は見るに能はず、故山を望むも是も復雲外に遠し、遠樹は已に行人を蔽ひ藏し、長天は秋塞に隱隱たり、心は悲しむ宦遊の子にあることを、最早や何れの處に向つて征蓋を飛ばせしぞ、

【餘論】此の篇も平雅にして、別の奇處無しと雖も、遠樹の二句十字は、模寫、畫の如く、右丞の本色を見るに足る、

別弟妹二首

弟妹に別る 二首

兩妹日成長、雙鬢將及人。兩妹日に成長し、雙鬢將に人に及ばんとす、  
已能持寶瑟、自解掩羅巾。已に能く寶瑟を持し、自ら解す羅巾を掩ふを、  
念昔別時小、未知疎與親。念ふ昔別時小にして、未だ疎と親とを知らず、  
今來始離恨、拭淚方慙慙。今來始めて離恨、涙を拭うて方に慙慙、

【大意】兩人の妹は日日成長し、雙鬢も將に普通の人に及ばんとす、已に能く寶瑟を鳴らすことを知り、又自ら羅巾を掩ふことを解す、而して昔別時を念へば、兩人共に幼小にして、他人も親戚も知らざりし程なり、然るに今日は我との離別を恨み、涙を拭うて方に慙慙の情を表す、

小弟更孩幼歸來不相識

小弟更に孩幼、歸來するも相識らず、

同居雖漸慣見人猶未覓

同居漸く慣ると雖も、人を見て猶未だ覓めず、

宛作越人語殊甘水鄉食

宛として越人の語を作す、殊に甘しとす水郷の食を、

別此最爲難淚盡有餘憶

此に別れて最も難しと爲す、涙盡きて餘憶あり、

【大意】小弟は兩妹に比すれば更に孩幼、余が歸り來るも誰たるを識らず、同室に居るが故に漸く慣ると雖も、人を見て底物をも乞ふ狀なし、舌根も自由ならざるに宛然として越國人の語を爲すのみならず、食物も亦水郷に産するものを好む、兩妹に別るるも恨みであるが、此の小弟に別るる最も難しと爲す、是の故に涙は盡くるも餘憶は盡きざるなり、

【餘論】此の別弟妹の二首は、殆んど樂天の詩を讀むが如く、右丞の詩としての感は無し「唐詩紀事」に、盧象が詩と爲す、余も亦云ふ是決して右丞の詩にあらざるなり、

別茶母潛

茶母潛に別る

端笏明光宮歷稔朝雲陛

笏を端す明光宮、稔を歷て雲陛に朝す、

詔看延閣書高議平津邸

詔は看る延閣の書、高議す平津の邸、

適意偶輕人虛心削繁禮

適意輕人に偶し、虚心繁禮を削る、

盛德江左風彌工建安體

盛德江左の風、彌よ工なり建安の體、

高張多絕弦截河有清濟

高く張りて絶弦多く、河を截ちて清濟有り、

嚴冬爽羣木伊洛方清泚

嚴冬羣木爽かに、伊洛方に清泚、

渭水水下流潼關雪中啓

渭水水下に流る、潼關雪中に啓く、

荷蓀幾時還塵纓待君洗

蓀を荷うて幾時か還る、塵纓君を待ちて洗はん、

【注解】端笏、笏は俗に「シヤク」と稱す、天子以下公卿大夫の束帶の時、帯に挟み持つものなり、端は端正、明光宮、漢の武帝が起つる所、三處に在り、甘泉宮中と建禮門内と未央宮中となり、歷稔、稔は穀物が蕃熟するを謂ふ、轉じて年の義に用ふ、延閣、宮廷圖書館の名、平津邸、漢の公孫弘、丞相と爲り、平津侯に封ぜらる、乃ち客館を啓き、多く賢人を集め、事を此に議す、繁禮、繁文褥禮、「アタラシ」なり、江左、長江以東の地を謂ふ、今日の江蘇省を中心とす、宋齊梁陳の四朝、皆此の地を都城とす、此の地の詩人多く綺麗を尚ぶ、建安、漢末の年號、曹操、曹植、及び郭中七子皆時に妙、多絶弦、蓀が絶妙の詩多きを謂ふ、截河、「孔安國尚書傳」に、河を截ちて又流び流る數里、溢れて衆澤と爲るとあり、伊洛、伊水と洛水、清泚、此も清なり、潼關、華州華陰縣に在り、「左傳」の栢林塞即ち潼關なり、塵纓、纓冠が塵土に汚れたるなり、

【大意】笏を端正に帶して明光宮に出仕し、多年、九重の雲陛に參朝す、詔を奉じて延閣の圖書を檢し、又平津の自邸に在りては多くの賢人と正道を高議す、適意常に輕き身分の人とも同列となり、



慮心にして形式の繁文縟禮の事を削り、君の盛徳は昔江左雅人の風あり、君の詩は建安諸人の體を具す、其の詩に於ける高張は絶弦なるもの多し、又河を裁ちて清き處を濟るが如く、良に清康の政治を施す、今や時殿冬に屬して羣木皆清爽の狀あり、伊水も洛水も方に清泚、而して渭水の上は冰るも水は冰の下を流る、潼關の門は辟きて雪中に在り、余の蓑を荷うて還り、塵纓を君の清話を聞いて洗ふは幾時であるや判らぬ、

【餘論】此の篇も一韻の作とす、洗は銑の韻にあらず、蒼の韻に屬す、端笏以下十句は皆華が人物の正端を敘し、嚴冬以下六句は時景と我が志を敘す、作法分明なり、顧可久曰く古雅正大、

新晴晚望

新晴の晚望

新晴原野曠極目無氛垢

新晴原野曠く、極目氛垢なし、

郭門臨渡頭柳樹連溪口

郭門渡頭に臨み、柳樹溪口に連なる、

白水明田外碧峯出山後

白水田外に明らか、碧峯山後に出づ、

農月無閒人傾家事南畝

農月閒人無し、家を傾けて南畝を事とす、

【大意】新晴に乗じて原野に出て見れば、原野は良に曠く、目の達する限り塵氣垢氣無し、郭門は渡

津の邊に臨み、柳樹は溪口の方に連なる、而して白水は田外に流れて明らかに、碧峯は山の後面より聳え出づ、農月即ち陰曆の四月には閒人は無し、一家總出にて南畝に向ひ耕作に従事する、  
【餘論】此の篇は景開濶、詩も亦一點の氛垢無し、眞に是有聲畫なり、

晦日游大理韋卿城南別業四首

晦日大理韋卿が城南別業に遊ぶ 四首

與世澹無事自然江海人

世と澹として無事、自然江海の人、

側聞塵外游解駝靴朱輪

側に聞く塵外の游、駝靴を解きて朱輪を靴す、

極野昭暄景上天垂春雲

極野暄景昭かに、上天春雲垂る、

張組竟北阜汎舟過東鄰

組を張りて北阜を竟め、舟を汎べて東鄰を過ぐ、

故鄉信高會牢醴及佳辰

故郷高會を信じ、牢醴佳辰に及ぶ、

幸同擊壤樂心荷堯爲君

幸に擊壤の樂を同じうして、心に荷ふ堯を君と爲さん、

【注解】側聞、直聞の反對、解駝、馬を車より離すなり、靴朱輪、朱色の車輪を靴するなり、松谷曰く靴は履の訛なり、靴は車の下に在り、輪を止むる木、張組、組は鞍なり、北阜、北方の阜邱、東鄰の文字に對す、高會、大會と同じ、牢醴、牢は美酒、醴は美酒、擊壤、帝堯の世、民帝堯を頌して擊壤して歌ふ、

【題義】晦日に大理寺卿なる大官、即ち韋公が城南の別荘に遊び、以て其の志を發ぶるなり、  
 【大意】世事と澹泊なるが故に其の人無事なり、無事なるが故に自然と其の人江海即ち世外の人と同じ、側へ聞く晦日に塵外の遊を爲すと、塵外の遊には馬車なぞにて大官の威勢を示す要無し、塵外の景は如何、極野は晴天にて隨景が昭かに看、上天には春雲が樂として垂る、是に於て陸には組帷を張りて北阜を竟め、水には舟を泛べて東郷を過ぎ、故郷に知己の大會あるを信じ、牢體を供へて以て此の佳辰に及ぶ、余も亦幸に擊壤の樂を同じうするを得、心中堯の如き明天子を上に戴くを希ふとなり、

【餘論】此の詩の題目、顧可久本に城南別業の下に四聲依次用とあり、乃ち平聲、上聲、去聲、入聲と次第して作る、是の詩は其の平聲に屬す、但し、雲と君とは今體の詩に於ては十二文に屬し、十一真と通用せず、古體に於ては通用すること普通なれば、妨げ無し、

郊居杜陵下永日同攜手

郊居杜陵の下、永日同じく手を攜ふ、

人里藹川陽平原見峯首

人里川陽藹たり、平原峯首を見る、

園廬鳴春鳩林薄媚新柳

園廬春鳩鳴き、林薄新柳媚ふ、

上卿始登席故老前爲壽

上卿始めて席に登り、故老前んで壽を爲す、

臨當游南陂約略執杯酒

當に南陂に遊ぶべきに臨んで、約略杯酒を執る、

歸與緇微官惆悵心自咎

歸らん與微官を緇けん、惆悵心自ら咎む、

【注解】杜陵、古の杜伯國、漢の宣帝を葬むる所、因つて杜陵と曰ふ、長安縣の南五十里、永日、「毛詩」に、且以永日とあり、上卿、「左傳」に、王、上卿を以て管仲を稱すとあり、故老、「毛詩」に召彼故老とあり、爲壽、下より上に對し、身より貴に對し、少より長に對し、應を奉じ、酒を進むるを皆壽を爲すと云ふ、緇は黜に同じ、微官、小官、薄官、皆同じ、

【大意】韋卿の別荘は杜陵の下に在る、永日に手を攜へて同遊する、而して一面に人里を見れば川陽が藹々たるあり、一面に平原を見れば峯首の聳え出づるあり、卿の園廬に飼養する春鳩が鳴くを聞き、林薄には新柳の條枝が媚びる如く垂る、上卿たる主人公は自席に著けば、客たる者の年長者が前んで以て酒を獻す、又南の方の陂に遊びに運動するときは、約略即ち大概は杯酒を執る、我も亦歸與を歌うて微官を緇けんと思ふ、而かも惆悵として我と我が心とが咎むる感をする、

【餘論】此の篇の結句、歸與緇微官、「文苑英華」に、歸輻緇微官とあり、「顧可久本」に、車輻緇微官とあり、今「趙注本」に依つて歸輻を取るも、意義としては「文苑英華」が極めて通ずるを覺ゆ、要に後賢の叱正を望む、

冬中餘雪在。墟上春流駛。  
風日暢懷抱。山川多秀氣。  
雕胡先豐酌。庖脰亦雲至。  
高情浪海嶽。浮生寄天地。  
君子外簪纓。埃塵良不啻。  
所樂衡門中。陶然忘其貴。

冬中餘雪あり、墟上春流駛し、  
風日懷抱を暢べ、山川秀氣多し、  
雕胡先豊に酌み、庖脰亦雲のごとく至る、  
高情海嶽に浪にし、浮生天地に寄す、  
君子簪纓を外にし、埃塵良に簪ならず、  
樂しむ所衡門の中、陶然として其の貴きを忘る、

【注解】冬中、『後漢書周舉傳』に、每冬中輒一月寒食とあり、駛、急駛なり、庖脰、卷之一登樓歌の注にあり、衡門、貴者の家の門、

【大意】冬を経て解けざる餘雪が尙在り、墟上の春流は良に急駛の狀あり、風日に當り懷抱を暢ぶるに宜し、山も川も秀氣殊に多し、是に於て供せらるる雕胡の飯や、美酒を食ひ且飲み、其の上料理が雲の如く多く陳なる、韋卿の高情は海嶽を浪にする程高く、僕は此の浮生を天地の間に寄せて、幸に君子の知己が簪纓を外にして交はらる、埃塵なぞ良に説くの要なし、樂しむ所は衡門の中に處して、陶然として其の貴き身を忘れ玉ふ、

高館臨澄陂。曠然蕩心目。  
澹蕩動雲天。玲瓏映墟曲。  
鵲巢結空林。雉雊響幽谷。  
應接無閒暇。徘徊以躑躅。  
紆組上春隄。側弁倚喬木。  
弦望忽已晦。後期洲應綠。

高館澄陂に臨み、曠然として心目を蕩す、  
澹蕩雲天を動かし、玲瓏墟曲に映す、  
鵲巢空林に結び、雉雊幽谷に響く、  
應接閒暇無し、徘徊以て躑躅す、  
組を紆げて春隄に上り、弁を側て喬木に倚る、  
弦望忽ち已に晦、後期洲應に綠なるべし、

【注解】玲瓏、明暗の貌、雉雊、雉子が鳴くを響と言ふ、鵲巢、鵲巢と同じ、行きて進まざる貌、紆組、紆は屈なり、組は腰なり、側弁、弁に冠冠、武官の具、弦望、弦は月中の名、月形が弓弦の如きなり、望は月滿の名、晦は灰なり、火死して灰と爲る、月光盡きて之に似たるなり、

【大意】高館は澄陂に臨んで在り、其の望は曠ければ心目も共に蕩然たり、心目を蕩するのみならず、又雲天をも澹蕩の氣が動かすときなり、或は明或は暗く墟曲に映す、此の如き景に添ふるに鵲巢が空林に結ぶを見、又雉子が雊いて幽谷に響くを聞く、一景一情應接するに閒暇無きなり、此の中に徘徊し或は行き或は止まる、組綬を紆屈して春隄に上り、懸弁を側てて喬木に倚り立つ、既にして今日は最早や月の最終日なり、後期を約するに其れは洲の色が綠蒼の時なるなり、

【餘論】以上の四首強ひて四聲を運用したるかと思はる、第一首は平穩にして高雅なるが、後三首は極めて筆路の滯滞せる形あり、顧可久は雅正の二字を以て評せるが、右丞の本色にはあらざるなり、

冬日游覽

冬日游覽

步出城東門。試騁千里目。

步して城東の門を出で、試に千里の目を騁す、

青山橫蒼林。赤日團平陸。

青山蒼林に横はり、赤日平陸に團たり、

渭北走邯鄲。關東出函谷。

渭北邯鄲に走り、關東函谷を出づ、

秦地萬方會。來朝九州牧。

秦地萬方の會、來朝す九州の牧、

雞鳴咸陽中。冠蓋相追逐。

雞は鳴く咸陽の中、冠蓋相追逐す、

丞相過列侯。羣公餞光祿。

丞相列侯に過ぎ、羣公光祿に餞す、

相如方老病。獨歸茂陵宿。

相如方に老病、獨り歸る茂陵の宿、

【注解】千里目、孫楚の詩、抗我千里目とあり、赤日、何遜の詩、赤日下城闕とあり、平陸、「爾雅」に、大野を平と曰ひ、平高を陸と曰ふ、謝朓の詩、夕陽照平陸とあり、邯鄲、今は縣の名、戰國趙の都、今日直隸省の大名道に當る、函谷、今日河南靈寶縣の南、是を秦の東國と爲す、關城谷中に在り、深險固の如し、故に名く、漢關は河南に屬し、秦關と相去る三百里とす、九州牧、諸

關の知府なり、咸陽、秦の都、今の陝西省西安府、渭城は此に在り、茂陵、司馬相如の家此に在り、

【大意】冬日の景色を遊覽せんと、歩いて城東の關門を出づ、而して試に目の届く限りを見れば、青山は鬱として蒼林に横はり、赤日は平原大陸に影團たり、渭水の北路は邯鄲に向つて走るが如く、關の以東は則ち函谷を出づ、秦の地は都なれば萬方の人皆此に會まる、九州の牧民官は盡く來朝する、雞鳴の盛なるは即ち人の盛んなる所以、咸陽の中は良に繁華なり、文官や武官が互に相追逐し、丞相は時あり列侯の邸に過ぎ、羣公は外臣を餞別する光祿寺に集まる、然るに相如に方に老病に當り、多人と會する能はず、獨り自ら茂陵の家に歸る、

【餘論】此の篇は漢の無名氏の古詩を學んで、別に右丞の一家を成すものなり、顧可久評して古雅正大と曰ふ、眞に當れり、自ら相如を以て稱す、相如此の正大無し、

自大散以往深林密竹。踏道盤曲四五十里。至黃牛

嶺見黃花川

自大散以往、深林密竹、踏道盤曲、四五十里、黃牛嶺に至り、黃花川を見る、

危徑幾萬轉。數里將三二休。危徑幾萬轉。數里將三休。將三休。將三休。將三休。

古詩 冬日游覽 自大散以往深林密竹踏道盤曲四五十里

廻環見徒侶。隱映隔林邱。  
颯颯松上雨。潺潺石中流。  
靜言深溪裏。長嘯高山頭。  
望見南山陽。白日靄悠悠。  
青阜麗已淨。綠樹鬱如浮。  
曾是厭蒙密。曠然消人愁。

【注解】三休、「賈誼新書」に、楚王、使者に訪るに章華の臺を以てす、臺甚だ高し、三休して方ち至る、靜言、陸機の猛虎行に、靜言幽谷底、長嘯高山岑とあり、蒙密、深林が蒙密するなり、

【題義】大散關よりして往けば、深林密竹、蹊道が盤曲して四五十里、黄牛嶺に至りて黃花川を見る、大散關は、秦と蜀と往來の要道に當る、黄牛嶺は湖北の宜昌縣の西、其の麓を流るるが黃花川なり、

【大意】危徑又危徑を幾萬轉するや判らず、僅かに數里間に三度も休ふ、其の屈曲を廻環するが故に、徒侶を或は見或は見せず、隠れたり映れたりして林邱を隔つ、忽ち颯颯たる聲を聞けば、是松上の雨なり、又潺潺たる響を聞く、是石中に流るる水なり、深溪の裏に於て靜言して、高山の頭に出づ

れば長嘯を發す、而して終南山の關を望見すれば、白日が靄として悠悠たる狀あり、青阜の地は麗かにして且淨く、綠樹は鬱鬱として浮ぶが如き形あり、曾ては此の處の蒙密たるを厭ひしが、今日は心目共に曠然として吾が愁を消滅するを覺ゆ、

【餘論】此の篇は、山水紀行詩として、後世、王漁洋などの學ぶ所のものなり、古詩を一二字改めて以て我が詩と爲すは右丞の癖、先輩已に之を議する者あり、而かも右丞の手を経たる句は、古詩より一境地進みし力あれば、古詩直ちに是右丞の詩と見るべし、此の篇、即日即寫、而かも作法井條、眞に畫の如し、

休假還舊業便使

謝病始告歸。依依入桑梓。  
家人皆佇立。相候柴門裏。  
時輩皆長年。成人舊童子。  
上堂嘉慶畢。願與姻親齒。  
論舊忽餘悲。目存且相喜。

休假、舊業に還り、使に便す

病を謝して始めて告歸す、依依として桑梓に入る、

家人皆佇立し、相候す柴門の裏、

時輩皆長年、成人は舊童子、

堂に上りて嘉慶畢り、願りて姻親と齒す、

舊を論じて忽ち餘悲あり、存するを目で且相喜ぶ、



田園轉蕪沒但有寒泉水

田園轉た蕪沒し、但寒泉水あり、

衰柳日蕭條秋光清邑里

衰柳日に蕭條、秋光邑里清し、

入門乍如客休騎非便止

門に入りて乍ち客の如く、騎を休うて便止にあらず、

中飯顧王程離憂從此始

中飯王程を顧み、離憂此從り始まる、

【注解】謝病、疾病を以て休假を乞ふなり、告歸、告は請なり、假を請うて歸るを謂ふ、依依、「詩經」に、楊柳依依、是れ柔弱の貌、「楚辭」に、懇懇兮依依、是れ舍つるに忍びざる貌、今江情に勝へざる貌なり、桑梓、「詩經」に、維桑與梓、必恭必敬止とあり、父母の種うる所を以て恭敬を加ふるなり、後人因つて以て郷里の稱と爲す、成人、「論語憲問」に、子路問成人、是れ學徳完全の人、今は二十歳以上の人を謂ふ、嘉慶、「韻語陽秋」に、唐人與親別而復歸、謂之拜家慶とあり、兩親が無事の顔を見て、お日出度と申すことなり、姻親、姻家親戚なり、齒は齒次、年齢順に座席に就くなり、王程、劉孝綽が水滸依に與ふる書に、王程有限、時及王程とあり、休假に制限あるを謂ふ、

【題義】 休假を求めて舊里の別業に還り、使者を遣りて其の事を弟妹に便するなり、

【大意】 病に因りて始めて歸休を請ひ、依依として故家に入れば、家人は皆門前に佇立し、舊知の者は柴門の裏に相候し來る、嘗て同年輩たりし者は皆長年と爲り、嘗て童子でありし者は皆成人せり、自分は堂に上りて先づ兩親の無事を祝し、姻家や親戚の者を顧みて順序に坐し、舊年の事を論ずれば忽ちに餘悲を生じ、存在する者を目ては且相喜ぶ、田園は轉た荒蕪の狀あるも、但し寒泉水の水は澄涼

と流る、衰柳は日を逐うて蕭條の色あり、秋光は邑里が一面に清み、自分は考ふ、門に入るも主人たるの氣持は起らず、宛かも客と爲るやの觀あり、騎を休ふも所謂暫時の休息にて長く便止するにはあらず、食膳の半に王程を顧みれば、自然と離憂が湧いて來る、

【餘論】 此の篇は、計敏夫の「唐詩紀事」に、盧象の作と爲す、象江東より、田園移莊に止る、慶會未だ幾ならず汶上に歸る、小弟妹尤も其の別を悲しむ、是に於て此の詩と已に前に出づる別弟妹二首と都合三首を賦すとあり、詩の調より之を見て右丞と相似たるものあり、「紀事」を信ずとせば右丞の集より除くべく、「右丞集」を重んずとせば、「紀事」は抹殺せざるべからず、先賢に何等の斷案も無し、今暫く疑を存す、

早入榮陽界

早に榮陽の界に入る、

汎舟入榮澤茲邑迺雄藩

舟を汎べて榮澤に入る、茲邑迺ち雄藩、

河曲閭閻隘川中煙火繁

河曲閭閻隘く、川中煙火繁し、

因人見風俗入境聞方言

人に因りて風俗を見、境に入りて方言を聞く、

秋晚田疇盛朝光市井喧

秋晚田疇盛ん、朝光市井喧し、

漁商波上客雞犬岸旁邨。 漁商波上の客、雞犬岸傍の邨、  
前路白雲外孤帆安可論。 前路白雲の外、孤帆安んぞ論ず可けん。

【注解】榮澤、榮陽に在る澤名、鄭玄曰く、漢平帝より以後、榮澤塞がりて平地と爲る、榮陽の民、猶ほ其の處を以て榮澤と爲す、  
民國河南の開封道に屬す、趙松谷曰く、今水無し、平地と成る、是榮澤唐時に在りて已に平陸と成る、豈能く舟を汎べんや、蓋し謂  
ふ舟を大河に泛べ、以て榮陽の界に入るのみ、榮陽榮澤、地本相連なる、古文の名を取りて、以て今地の稱と爲す、詩家蓋し多く之  
れ有り、茲邑、榮陽を指す、開關、開も開も來よるの義、『漢書』に、開關且千とあり、里中の門なり、後亦民間を通稱して開關と曰  
ふ、方言、土俗の語なり、一方に開られ、各地に通行する節はず、故に方言と曰ふ、田鳴、穀類を植うるが田、菜類を植うるが鳴、  
漁商、漁人と商人となり、

【題義】 早天に舟に乗りて榮陽の界に入る、今日の地理から言へば、河南の河北道より舟にて黄河に  
頼り、以て河南の開封道に入る、界とは河北と開封との界なり、

【大意】 舟にて夜黄河を下り來り、早天に榮陽の界に著す、茲榮陽は眞に雄藩の稱に背かず、河曲に  
旁うて開關は良に險きも、川中に生活する人多きが故に煙火は眞に繁し、風俗を見るには人に因らざ  
るべからず、方言を聞くには境に入らざるべからず、時今や秋田も鳴も晩成の物熟盛し、著するや  
朝市場開きて人語喧嘩せり、漁人も商人も共に舟中の客、雞犬の聲は岸傍の邨より聞ゆ、而して我が  
行くべき前路は猶ほ白雲の外の遠きに在り、今日舟中にて見聞せし以外に種種と見聞あらん、舟中の

小景安んぞ論するに足らんや、

【餘論】 右丞が詩としては、即景即目を賦せしに過ぎず、唯吐噏清雅と言ふべきのみ、

宿鄭州

鄭州に宿す

朝與周人辭暮投鄭人宿。 朝に周人と辭し、暮に鄭人に投じて宿す、  
他鄉絕儔侶孤客親僮僕。 他郷儔侶絶ち、孤客僮僕を親しむ、  
宛洛望不見秋霖晦平陸。 宛洛望めども見えず、秋霖平陸晦し、  
田父草際歸邨童雨中牧。 田父草際に歸り、邨童雨中に牧す、  
主人東臯上時稼遠茅屋。 主人東臯の上、時稼茅屋を遠る、  
蟲思機杼鳴雀喧禾黍熟。 蟲思機杼鳴き、雀喧しく禾黍熟す、  
明當渡京水昨晚猶金谷。 明當に京水を渡るべし、昨晚猶ほ金谷、  
此去欲何言窮邊徇微祿。 此を去つて何をか言はんと欲する、窮邊徇微祿に徇ふ、

【注解】 周人、周は現今の陝西省長安、鄭人、鄭は現今の河南省新鄭縣、他郷、知人又は友人、宛洛、宛は宛縣、現今河南の臨漳

縣の西、洛は洛陽、現今河南河洛道の治、積粟、三日以上雨暈まざるを暈と謂ふ、時稼、時節の物を植ふるなり、蟲思、文苑英華に、蟲鳴機杼休とあり、蟲鳴が起ると反對に機杼の鳴聲が休なれば、文苑英華の方を取る、京水、太平寰宇記に、京水は鄭州滎陽縣の西二十二里に在りとあり、金谷、太平寰宇記に、河南府河南縣に金谷有りとあり、晉の石崇の故居なり、

【大意】朝に周地の人と辭去し、暮に鄭地の人の家に投宿する、他郷には知己が絶無なれば、寂寞の情に勝へ得ず、天涯の孤客は宿舎の僮僕と親みを加ふるのみ、而して鄭州よりして宛陽と洛陽との方面を望むも見ることはせず、秋日の霖雨は平陸が全く晦く、唯見る田父の草際へ歸ると、鄭童が雨中に咲散する状を、而して舎の主人は東阜の上へ在りて、時節に應ずる穀類を植えて茅屋を遮る、既にして蟲聲が起る同時に機杼の鳴聲は休む、羣雀が啾啾と喧しきは禾黍の熟したるを争ひ啄むなり、明日は此を去つて京水を渡る、昨夜は金谷に宿を求めしなり、此を去つて何を言はんと欲するや、唯言ふ窮邊即ち邊部の地の役人と爲りて微祿の爲に身を徇ふなり、

【餘論】此の篇、全く淵明を學んで其の痕跡を留めざるもの、殊に孤客親僮僕、時稼時節茅屋の句、前人の未だ曾て道破せざるの語、右丞の面目彰彰たり、顧可久曰く、眞景眞意、人所不道、洵に然り、洵に然り、漁洋の「唐賢三昧集」之を收む、黃香石、田父の二句を評して寫景入微とあり、

渡河到清河作

河を渡り清河に到りて作る

汎舟大河裏積水窮天涯

舟を汎ぶ大河の裏、積水天涯を窮む、

天波忽開拆羣邑千萬家

天波忽ち開拆し、羣邑千萬家、

行復見城市宛然有桑麻

行くゆく復城市を見る、宛然桑麻あり、

迴瞻舊鄉國森漫連雲霞

舊郷國を迴瞻すれば、森漫として雲霞に連る、

【注解】積水、海の異稱なるも今は黃河を謂ふ、「荀子」に、積水成淵、數龍生焉とあり、開拆、拆は拆と同じ、ヒラクシなり、ナケルシなり、宛然、詩經卷風に、宛在ニ水中中央、注に宛然坐見顯とあり、

【題義】黃河を渡りて、舟清河に到達せるとき之作、清河は河南の河北道貝州清河郡なり、

【大意】舟を大河即ち黃河の裏に汎べて出帆すれば、森漫たる積水は天涯を窮める、而して天波が忽ち開拆たる處、所謂清河郡の城邑が千萬家あるを認む、上陸して行くゆく更に城市の有るを見る、其の處には井然として桑麻の林あるを見る、是に於て自分は舊郷國を憶ひ出し、目を其の方へ迴瞻すれば、唯積水の森漫として雲霞に連るを見るのみなり、

【餘論】顧可久、此の篇を評して情景曠遠雄渾と、當れり、

苦熱

赤日滿天地。火雲成山嶽。

草木盡焦卷。川澤皆竭涸。

輕執覺衣重。密樹苦陰薄。

莞簟不可近。絺綌再三濯。

思出宇宙外。曠然在寥廓。

長風萬里來。江海蕩煩濁。

却願身爲患。始知心未覺。

忽入甘露門。宛然清涼樂。

苦熱

赤日天地に滿ち、火雲山嶽を成す、

草木盡く焦卷し、川澤皆竭涸す、

輕執も衣の重きを覺え、密樹陰の薄きを苦む、

莞簟近くべからず、絺綌再三濯ふ、

思は出づ宇宙の外、曠然として寥廓に在り、

長風萬里より來り、江海煩濁を蕩す、

却つて願ふ身の患と爲るを、始めて知る心未だ覺らざるを、

忽ち甘露門に入れば、宛然たり清涼の樂。

【注釋】火雲、隋の盧思道が「納涼賦」に、火雲赫而四舉とあり、焦卷、魏の陸機が「文選」に與ふる書に沙磧焦燥、草木焦卷とあり、輕執、輕細なる熱絹なり、莞簟、「詩經小雅」に上莞下簟とあり、「キムシロ」と「マカメシロ」となり、絺綌、葛の精なるものを織ると曰ひ、盡なるものを略と曰ふ、密樹、カラリと開けたる貌、莞簟「楚辭」に上寥廓而無天とあり、曠然古曰く、寥廓天上寬廣之處と、長風、晉の陸機の詩に、長風萬里舉とあり、身爲患、「老子」第十三章に、吾所以有大患者、爲吾有身、及吾無身、吾有何患とあり、心未覺、覺ば覺悟、迷惑の反對、佛教の通説なり、甘露門、玄妙の眞理を甘露門と謂ふ、「法華經譬喻品」に、譬開甘露門、廣度

於一切とあり、清涼、佛教に、清涼世界あり、曾て煩悶無き國なり、

【大意】天地一面赤日が充滿せり、火の如きの雲が山嶽の形を成して現る、草木も木も盡く焦げ卷く、川も澤も水が竭き涸る、身體に著けて居る輕執すら猶ほ重き感を覺え、鬱密たる林樹も猶ほ陰の薄きを苦しむ、莞簟は夏日近くべきものなるが、それすら近くこと能はず、絺綌は汗の爲め汚れるが故に一日に再三濯ふに至る、是に於てか我が思は此の苦熱の宇宙外に出て、曠然たる所の寥廓に入らざるを得ず、寥廓の中は長風が萬里より來りて、江海に於て煩濁を蕩盡する如くならん、却いて願みるに此の如く炎熱に苦しむは、畢竟此の一身の爲に患ふるなり、心の置き處に依りて身の患と爲らざることを今まで覺らざりしなり、心の觀察の如何に頼つて忽ち甘露門に入れば、宛然として身は清涼國に在りて樂しむことを得るなり、

【餘論】此の篇、右丞得意の仄韻を以て成る、始めは苦熱の狀を敘し、終りは老子と佛道との身心二物を思と覺との二に歸し、結ぶに樂の字を以て題目の苦を奪ひ取る、余謂ふ此の如き詩は一句として見るべきにあらず、一篇構成上より其の價値を認むべきものなり、

納涼

喬木萬餘株。清流貫其中。

喬木萬餘株、清流其中を貫く、

納涼

前臨大川口豁達來長風  
 漣漪含白沙素鮪如游空  
 偃臥盤石上翻濤沃微躬  
 漱流復濯足前對釣魚翁  
 貪餌凡幾許徒思蓮葉東

前は大川口に臨み、豁達として長風來る、漣漪白沙を含み、素鮪空に遊ぶが如し、偃臥す盤石の上、翻濤微躬に沃ぎ、漱流に濯ぎ復足を濯ふ、前は釣魚の翁に對す、餌を貪る凡そ幾許ぞ、徒らに思ふ蓮葉の東

【注解】豁達、魏の劉楨の詩に、華館寄流波、豁達來長風、とあり、漣漪、小波、細波なり、『詩經魏風』に、河水清且漣漪とあり、吾の左思が吳郡賦に、濯明月於漣漪とあり、素鮪、鮪は和語の「マケロ」なり、沃、波が我に沃ぐなり、微躬、膝の比約の詩に、偃臥息微躬とあり、漱流、『晉書』隱逸傳に、漱流而微、其清、養、巢而翰、其細とあり、貪餌、『楚辭』に、貪餌而近、死兮とあり、蓮葉東、漢の古詩に、魚戲蓮葉東、魚戲蓮葉西とあり、『抱朴子』に千歳の龜、五色具ばる、蓮葉の上に浮び、或は叢菁の下に在り、時に白雲上に在るあり、蟹するときは氣を食ふ、

【大意】雲を衝く喬木が萬餘株ある、其の喬木の間を流る清き水あり、前面は大川の口頭に臨む、其の口頭よりは豁達として長風が來る、風を受ける少き處は小波が白沙を含んでただ清し、素鱗を翻す鮪魚は水中を游泳する状態に遊ぶが如し、自身は盤石の上に偃臥して見れば、翻濤が我が小さな躬に沃ぎ來る、又口を清流の邊にて漱ぎ、足を清流に濯へば、我が面前には一人の釣魚の翁あり、其の捕ふる魚の多からんことを貪ること幾許ぞや、余は徒らに蓮葉の東の故事を思ひ出すのみなり、

【餘論】此の篇を読んで直ちに憶ひ起したるは、柳子厚の小邱西小石潭記の文章なり、潭中魚、可三百許頭、皆若空游無所依、日光下徹、影布石上、右丞と柳柳州は殆んど同時の人、互に大家剽竊する如きことあるべからず、偶然暗合して此に至りしものならん、

王右丞集卷四終



王右丞集卷五

古詩三十二首

濟上四賢詠 三首

濟上四賢の詠 三首

崔錄事

崔錄事

解印歸田里賢哉此丈夫

印を解きて田里に歸る、賢なる哉此の丈夫、

少年曾任俠晚節更爲儒

少年曾て任俠、晩節更に儒と爲る、

遷世東山下因家滄海隅

世を遷る東山の下、因つて家す滄海の隅、

已聞能狎鳥余欲共乘桴

已に聞く能く鳥を狎らすことを、余共に桴に乗らんと欲す、

【注解】濟上、濟水の上の意ならん、濟水は源河南の濟源縣の西王屋山より出で、東南に流れ、豬流河と爲り以て黃河に入る、四賢、皆其の事歴を詳らかにせず、崔錄事、錄事は官名、晉始めて錄事參軍を置き、兼曹文簿を總録することを掌る、漢の官主簿と同じ、後各署に皆錄事の職あり、從七品、或は從九品とす、解印、錄事の官を辭するなり、賢哉、晉の裴登陽の詩に、行人多頌、賢哉

古詩 濟上四賢詠三首・崔錄事

此丈夫とあり、任俠、『史記』に、季布者楚人也、爲氣任俠、有名於楚、如淳曰く、相與信爲任、同是是爲任、所謂權行州里、力折公卿者也とあり、卿鳥、『列子』に、海上の人、鶴を好む者、毎且海上に至る、鶴至るもの百數、其の父曰く、取りて來れ、吾之を玩ばん、明日、海上に至る、舞うて下らず、鶴の江海が詩に、物我但忘懷、可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>狎<sub>二</sub>鶴鳥<sub>一</sub>とあり、

【大意】錄事の官を罷めて田里に歸る、賢なるかな此の丈夫や、少年の時は任俠を以て處り、晩年に至りては儒行を以て處る、逐世の場處は東山の下なり、東山の下は即ち滄海の隅に當る、已に人世の貪欲無ければ鳥も能く狎る、余も其の友と爲りて共に椀に乘りて濁世と別れんと欲す、

【餘論】顧可久此の篇を評して、正大古雅と曰ふ、余は此の詩を以て、韓文公の送楊少尹序と對讀せんと欲するものなり、

成文學

成文學

寶劍千金裝登君白玉堂

寶劍千金の裝り、君が白玉堂に登る、

身爲平原客家有邯鄲娼

身は平原の客と爲り、家に邯鄲の娼あり、

使氣公卿座論心游俠場

氣を使し公卿の座、心を論ず游俠の場、

中年不得志謝病客游梁

中年志を得ず、病を謝して梁に客游す、

【注解】文學、官名なり、『唐書百官志』に、東宮に文學三人あり、正六品下にして、經籍を分知し、文章を侍奉す、王府に文學一人あり、從六品上、典籍を掌校し、文章を侍從す、諸州文學に至りては、德宗の時改めて博士と稱す、德宗以前此の稱無しとあり、寶劍、劍の珍愛すべきものを謂ふ、『史記吳世家』季札と徐君の事に出づ、白玉堂、古詩に、黃金爲<sub>二</sub>君門<sub>一</sub>、白玉爲<sub>二</sub>君堂<sub>一</sub>とあり、平原客、『史記』張敖趙の武靈王の子を謂と名く、平原に封ぜらる、故に平原君と號す、趙に相たり、賓客を好み、至る者數千人、邯鄲娼、邯鄲は趙の都、今日直隸大名道に屬す、「古辭」に、上有<sub>二</sub>雙尊酒<sub>一</sub>、作<sub>レ</sub>使邯鄲娼とあり、娼亦俠氣あるなり、使氣、『南史』に、傅幹負<sub>レ</sub>才使<sub>レ</sub>氣、凌<sub>レ</sub>侮人物とあり、客游梁、『史記』に、司馬相如、武騎常侍と爲る、其の好みにあらざるなり、會<sub>レ</sub>景帝辭賦を好まず、是の時梁の孝王來朝す、游說の士、齊人鄒陽、淮陰枚乘、吳莊忌夫子の徒を從ふ、相知見て之を悦び、病に困つて免ぜられ、梁に客游す、梁の孝王、諸生と同合せしむ。

【大意】寶劍に千金の裝を施し、以て我を用ふる君が白玉堂に登る、是に於て此の身は平原君の如き客を好む者の食客と爲る、然るに邯鄲は自然主義上下に瀟漫し、飲むに美酒あり、侍するに美娼あり、或は意氣を公卿の座に吐き、或は心骨を游俠の場に論じ、而かも遂に中年に至るまで眞の志は得る能はず、古の相如の如く此を去つて他に往くの身と爲る、

【餘論】此の篇は右丞の詩として最下に屬するもの、顧可久の評して、雄渾亦自有<sub>二</sub>俠氣<sub>一</sub>と曰ふは、右丞知るあらば一笑を發すべし、『文苑英華』、『河嶽英靈』收むと雖も、何ぞ必ず名篇とせんや、

鄭霍二山人

鄭霍二山人

翩翩繁華子，多出金張門。

翩翩たる繁華の子、多く金張の門に出づ、

幸有先人業，早蒙明主恩。

幸に先人の業あり、早く明主の恩を蒙る、

童年且未學，肉食鶩華軒。

童年且未だ學ばず、肉食鶩華軒を驚す、

豈乏中林士，無人獻至尊。

豈中林の士に乏しからんや、人の至尊に獻する無し、

鄭公老泉石，霍子安邱樊。

鄭公は泉石に老い、霍子は邱樊に安んず、

賣藥不二價，著書盈萬言。

藥を賣りて價を二にせず、書著はして萬言に盈つ、

息陰無惡木，飲水必清源。

陰に息うて惡木無く、水を飲めば必ず清源、

吾賤不及議，斯人竟誰論。

吾賤にして議するに及ばず、斯人竟に誰か論せん、

【注解】山人は隱者の稱、唐の蕭宗、李泌に官を授けんと欲す、固辭し、願はくは客を以て從ひ、入つて同處を議し、出でて輿聲に陪せん、衆指して曰く、實を著する者は聖人、白を著する者は山人と、翩翩、『史記』に、平原君翩翩而世之佳公子也とあり、自然主義の樂を致すの謂ひ、元來鳥獸の輕疾の貌を謂ふなれば、自由我儘の意を含む、繁華子、晉の阮瞻の詩に昔日繁華子と、呂經濟の注に、繁華喻人美盛如春花之繁とあり、要するに富貴の家の子弟と言ふことなり、金張、金氏と張氏の二家は帝室に親近して、其の寵貴外戚に比すと、『漢書』にあり、先人業、『國語』に、朝夕處事、猶恐忘先人之業とあり、明主、天子の尊稱、華軒、車の美

なるもの、唐の江淹の詩に、金張車馬、許史華軒とあり、中林士、林中士の倒用なり、遷世の高士の稱、齊の王康琚の詩に、今雖盛明世、能無中林士とあり、至尊、天子の尊稱、邱樊、『南史隱逸傳』に、若使遇見信之主、遂時來之運、豈其放情江海、取逸丘樊とあり、即ち一邱一樊、小さく且詩さ處の義なり、賣藥、『後漢書』に、韓伯休は常に藥を名山に採り、長安の市に賣り、口、價を二にせず、三十餘年、時に女子あり、藥を求む、伯休價を守りて移らず、女子怒つて曰く、公は是れ韓伯休ならずや、那ぞ價を二にせざるや、伯休歌じて曰く、我本名を避けんと欲す、今小女子、昔我有るを知る、何ぞ藥を用ふるを爲ん、乃ち連れて翻説山中に入る、惡木、晉の陸機の詩に、福不飲惡泉水、熱不飲惡木陰とあり、

【大意】自由で享樂に耽る者は、皆金や張や富豪の家門より出づ、此等の徒は各の其の先人の功業に依つて、男爵であるの、子爵であるのとして天子の寵恩を蒙る、此等の徒は小學も中學も未だ其道を踏まざるに、口に味ふものは美食、身を運ぶものは華軒、然るに此等の徒以外に、立派なる高尚なる士無しと言ふべからず、惜い哉其の人あるも至尊に奏上する者無し、鄭公は其の人なるも、泉石即ち世外に老いと欲し、霍子も亦其の人なるも、邱樊是も即ち世外に安住する、昔年藥を賣りて名を逃れた人と同じく、其の著書は萬言にも盈たんと欲する學者なり、而して道を守ること正直、惡木の陰には息はず、源泉の水は飲まず、息へば必ず良木の陰、飲めば必ず清泉の水、我は奏上したくも其の資格を有せず、然らば則ち斯の人は竟に誰と論せんとするや、

【餘論】此の篇は三首中に在りて、余は第一に推すものなり、翩翩以下六句、濁富家の子弟輩の世用を爲さざるを言ひ、七句以下、鄭公と霍子を言ふに、古の高隱を以て之に比し、其の賢者と俗物とを

軒輊し去る、右丞の才にあらずんば、此の如き妙句あるべからず、顧可久が高古俊偉と評するは、其れ真に當れり、其れ真に當れり、

偶然作六首

偶然の作六首

楚國有狂夫茫然無心想

楚國に狂夫あり、茫然として心想無し、

散髮不冠帶行歌南陌上

散髮して冠帶せず、行歌す南陌の上、

孔丘與之言仁義莫能獎

孔丘之と言ふ、仁義能く獎むるなし、

未嘗肯問天何事須擊壤

未だ嘗て肯て天に問はず、何事ぞ擊壤を須ひん、

復笑採薇人胡爲乃長往

復笑ふ採薇の人、胡爲ぞ乃ち長往する、

【注解】楚國、「高士傳」に、陸通、字は接輿は楚人なり、美性を好み窮悴以て食を爲す、楚昭王の時、通、楚政の常無きを見て、乃ち伴狂して仕へず、故に時人之を楚狂と謂ふ、散髮、頭髪を自然に任すなり、『後漢書袁安傳』に、陸散髮絶世とあり、孔丘與之言、孔子、楚に過く、楚狂接輿、其の門に憐んで曰く、風兮風兮、何如德之衰也、來世不可待、往世不可追也、天下有道、聖人成焉、天下無道、聖人生焉、孔子車より下り、之と言はんを欲す、趨りて之を避け、之と言ふを得ず、仁義莫能獎、孔子は一生仁義を獎勵する人、而かも趨りて言ふを欲せざる人、如何にして仁義を獎勵することを得んや、擊壤、堯の世、採薇、周の世、

【題義】偶然作は偶成と同じ、日常に思ひ居りしことにはあらず、思ひがけなくして出來たる詩の題目を偶然作と稱するなり、

【大意】嘗て楚の國に一狂夫あり、其の人茫然として無心無想の如きなり、其の風采を見れば常に散髮して冠帶を著けたること無し、時時南陌の上に行歌して、孔丘と邂逅することあり、孔子は自分の主張する仁義の道を以て狂夫を獎勵せんと欲したるも、狂夫は孔子の如く事の判じ難きに至りて必ず天に問ふの態を嫌ふ、是の故に未だ嘗て天に問うたこと無し、又昔擊壤して堯の徳を稱歎したる民あるも、其れにも敬ふことはせず、復世の無道なるを憤りて山中に薇を採りし人の事をも笑ふ、笑うて曰ふ、彼は胡爲ぞ乃ち無益にして長往せしぞや、

【餘論】此の篇は、偶然作と題にはあるが、楚狂を詠する「詠史」とも見るべし、人は窮達の二道に於て心想を紛亂するもの多し、其の窮達を意に介せざるときは、心想の紛亂せらるること無し、此の篇、楚狂を借用して以て其の意を諷ふものなり、

田舍有老翁垂白衡門裏

田舍に老翁あり、白を垂る衡門の裏、

有時農事閒斗酒呼鄰里

時ありて農事閒なり、斗酒鄰里を呼ぶ、

喧聒茅簷下或坐或復起

喧聒す茅簷の下、或は坐し或は復起つ、

短褐不爲薄。園葵固足美。

短褐薄しと爲さず、園葵固に美とするに足る。

動則長子孫。不曾向城市。

動もすれば則ち子孫を長ず、曾て城市に向はず、

五帝與三王。古來稱天子。

五帝と三王と、古來天子と稱す、

干戈將揖讓。畢竟何者是。

干戈と揖讓と、畢竟何者か是なる、

得意苟爲樂。野田安足鄙。

得意苟くも樂と爲さば、野田安んぞ鄙むに足らん、

且當放懷去。行行沒餘齒。

且く當に放懷し去りて、行行餘齒を沒すべし、

【注解】垂白、漢書杜欽傳に、誠哀老且垂白と、顏師古の注に曰ふ、垂白者言白髮下垂也、斗酒、晉の陶淵明の詩に、斗酒  
樂比鄰とあり、短褐、「列子」に、衣則短褐、食則藜藿とあり、短褐は麤衣、藜藿、陶淵明の詩に、好味止園葵とあり、  
葵は花卉として「アフリ」なり、菜食として「マサビ」なり、今の詩も淵明の詩も共に「マサビ」を言ふ、

【大意】田舎に老翁あり、白髮を垂るるに至るまで、衛門の裏に生活する、農事の閒暇ある際は、一斗の酒を置きて近鄰の者を呼び共に飲む、野人の常として言談喧嘩、茅簷の下名狀すべからず、坐する者もあり、起つ者もあり、身に纏ふ物は麤服なるも、麤服の感爲さず、口に食ふ物も亦麤菜なるも、麤菜の感爲さず、而して或は小人數の家もあるが、動ともすれば子より孫、孫より玄孫なぞと多き者もある、老翁は一生を此に老いて、曾て繁華の都城に向ひしこと無し、彼の黃帝、顓頊、帝嚳、

堯、舜の五帝、夏禹、商湯、周文の三王など、古來より天子と民之を稱し來る、而かも或は干戈に訴へて位を取り、或は揖讓に依りて位を禪る、畢竟するに孰れか非にて孰れか是なる、各の其の得意を以て樂と爲すからには、野田は野田の樂あり、天子の樂と何ぞ異ならん、決して鄙とするに足らざるなり、要するにそんな事は放懷し去りて、今年來年と年の過ぐるに任せて餘年を没るべし。

【餘論】此の篇は田舍翁の日常生活を敘するに、都鄙と貴賤とを對照し、天子の貴も、田舍翁の賤も、衛門の鄙も、城市の都も、得意を以て樂とするからには、天子の得意も野人の得意も隔つる所無しと斷ず、願可久許して類「陶真率」と曰へるが、陶と并讀細觀すれば、詩の骨氣、陶を凌駕せるを覺ゆ、願本に田舎より城市に至る十句を一篇とし、五帝より餘齒に至る八句を一篇と爲したるもの如きは誤る、十八句一韻一篇の詩なり、

日夕見太行。沈吟未能去。

日夕太行を見る、沈吟未だ去ること能はず、

問君何以然。世網嬰我故。

問ふ君何を以て然る、世網我を嬰ぐが故に、

小妹日成長。兄弟未有娶。

小妹日に成長し、兄弟未だ娶ることあらず、

家貧祿既薄。儲蓄非有素。

家貧しうして祿既に薄く、儲蓄素あるにあらず、



幾廻欲奮飛。踟躕復相顧。  
孫登長嘯臺。松竹有遺處。  
相去詎幾許。故人在中路。  
愛染日已薄。禪寂日已固。  
忽乎吾將行。寧俟歲云暮。

幾廻か奮飛せんと欲し、踟躕して復相顧みる、  
孫登が長嘯臺、松竹遺處あり、  
相去ること詎ぞ幾許ぞ、故人中路に在り、  
愛染日に已に薄く、禪寂日に已に固し、  
忽乎として吾將に行かんとす、寧ぞ歲云に暮るるを俟た  
んや、

【注解】日夕、日と無く夕と無くと使用するあり、又日の夕と使用するあり、今の句は日と無く、夕と無くと解すべし、太行、「太平寰宇記」に、太行山は懷州修武縣の北三十二里に在り、案するに太行は一名、五行山と曰ふ、河南の河北道、山西の冀寧道、及び直隸の界に連亘し、山、百を以て數ふ、地に隨つて名を異にす、實は皆太行なり、沈吟、「後漢書曹褒傳」に、晝夜研精、沈吟專思とあり、又「後漢書曹褒傳」に、郎得書、沈吟十餘日とあり、遲疑して決せざるを言ふ、奮飛、「詩經」に、靜言思之、不能奮飛とあり、毛萇曰く鳥の翼を奮つて飛び去るが如きなり、長嘯臺、「晉書」に、阮籍嘗て蘇門山に於て孫登に遇ひ、與に終古及び嵇康等氣の術を論ず、登皆應之、籍因つて長嘯して退き、半嶺に至りて聞く、聲ありて響風の音、山谷に響くが如きを、乃ち登が長嘯せるなり、「太平寰宇記」に、懷州修武縣に天門山あり、今之を百家巖と謂ふ、巖下、百家を容るべし、因つて名く、劉伶が醒酒臺、孫登が長嘯臺あり、愛染、佛典に散在する語、人間の欲境に於て、愛染するを言ふ、禪寂、心外世界の爲め動かされず、我が身を愛ひ得るを謂ふ、忽乎、「楚辭」に、慎情愔愔、忽乎吾將行分とあり、歲云暮、古詩に、溘溘歲云暮とあり、

【大意】日中にも夕陽にも太行山を望見するも、沈吟して決然として此を去る能はず、若し人が君何を以ての故に然るやと問はば、我は答へん世網が我を嬰ぐが故にと、小妹が日に成長すれば、是教誠

せざるを得ず、兄弟が未だ妻を迎へず、是も迎へざるを得ず、家は貧にして修祿は薄く、然りと云うて儲蓄の餘財平素有るにあらず、乃ち總てを抛擲して幾廻か奮飛せんと欲したるも、踟躕うて復前後を顧みる、而かも冥想して浮び出るは孫登が長嘯臺なり、其の處には松竹が遺跡として猶在るあり、我が今の住處と相距ること遠からず、我が故人は其の中路に在り、其の人は世網と愛染すること日に已に薄く、反對に禪寂の清修は日に已に固し、是に於てか我も亦忽乎として一刻も早く行かんと欲す、夏の晩、秋の末なぞと云ふことを俟たんや、

【餘論】此の篇、寄託する所ありて詠せしものか、又心情を發露せしものか、判斷すべからずと雖も、右丞が一生を通じての蹤より之を察すれば、心情を發露せしものなること疑ふべからず、但魏晉間の詩多くは仙道に託し、梵典に託するもの少なし、「遊仙詩」の多きにても知るべし、然るに右丞は仙に託するより、佛典に託するもの多きは、是れ晉代の名家中、特に靈運より得來るものなり、我邦の廣瀬淡窗なぞも、右丞の詩は淵明より來るの點を知りて、靈運より得來る點を知らず、淵明は儒としての方面のみ、靈運は仙佛を兼ね、余は謂ふ右丞の詩は靈運に屬すべきものと、淵明に屬すべきものと二方面より觀察するの要ありと、此の詩中に愛染、禪寂の文字あり、是れ靈運に於て見る、淵明に於て會て見ざるの文字なり、是に於て乎亦謂ふ、右丞は仙梵の玄趣、晉宋の逸趣を一纏に收め鏡鍊して出し、以て無上妙諦を示すものと、

陶潛任天真其性頗耽酒  
 自從棄官來家貧不能有  
 九月九日時菊花空滿手  
 中心竊自思偷有人送否  
 白衣攜壺觴果來遺老叟  
 且喜得斟酌安問升與斗  
 奮衣野田中今日嗟無負  
 兀傲迷東西簞笠不能守  
 傾倒強行行酣歌歸五柳  
 生事不曾問肯媿家中婦

陶潛天真に任す、其の性頗く酒に耽る、  
 官を棄てしより來、家貧しうして有る能はず、  
 九月九日の時、菊花空しく手に滿つ、  
 中心竊かに自ら思ふ、偷し人の送る有るや否や、  
 白衣壺觴を攜へ、果して來りて老叟に遺る、  
 且喜ぶ斟酌することを得たるを、安んぞ升と斗とを問はん、  
 衣を奮ふ野田の中、今日負くこと無きを嗟す、  
 兀傲東西に迷ふ、簞笠守ること能はず、  
 傾倒強ひて行行、酣歌して五柳に歸る、  
 生事會問せず、肯て家中の婦に媿ぢんや、

【注解】陶潛、號潛、柴桑、九月、白衣、斟酌、以上の字解、余の陶淵明集注に説明せり、老叟は陶明を言ふ、叟は翁と同じ、老人を敬稱する語、兀傲、濶明の詩に、規規一何愚、兀傲逸若穎とあり、兀立傲岸と成語して、其の人自己を高うして物と和せざるを謂ふ、傾倒、種種の義に用ふるが、傾跌即ち傾倒、文字通りの意、心折也と解するときは感佩の意を致すなり、今の義は傾跌即ち「カマブキツマツク」なり、家中婦、趙松谷曰ふ、陶明子に與ふる書に曰く、嘗て卿仲賢が妻の言に感ず、敗絮自ら攜す、何ぞ兒子に媿ぢん、

右丞が青錢家中婦と謂ふは、正しく此の語を體括するなり、婦を帯に作る本あるも、婦を以て勝れりとす、

【大意】陶潛の一生を通覽するに總て天真に任せたり、其の性頗く飲酒に耽る、彭澤の縣令を罷めてより以來、俸錢入らざれば家は貧、家貧なれば酒有ること能はず、九月九日の佳節に當り、菊花だけは我が園中の物、採りて以て手に滿つ、而して自ら思ふ、偷しや誰人か送惠せらるるあらんかと、果せるかな白衣の人壺觴を攜へて來り、此の老叟に遺らる、是に於て大に喜び、互に斟酌して飲む、酒の量が一升なるや一斗なるやは問ふを要せず、乃ち曾中の快を覺え、衣を奮ふ野田の中に、今日に於て我が平生に負く無きことを歎嗟す、兀傲の性東せんか西せんかに迷ふ、然りと云うて尋常農夫として簞笠を守ること能はず、傾倒しながら強ひて東西に行行す、遂に酣歌して五柳の居に歸去す、生計の事は會て問訊せず、而して我は守る所別に在り、肯て家中の婦に媿づる所無し、

【餘論】此の篇は、楚國有狂夫と同じく、濶明を歌ふ所の詠史詩と見るべし、兀傲以下の四句二十字は、廟可久、評して形容醉意と曰ふは當れり、醉意を形容するに依つて意義を爲す、然らざるときは、陶潛は兀傲なるも、決して迷ふ人にはあらず、簞笠も守り得る人なり、守る能はざるの人にあら

趙女彈箜篌復能邯鄲舞。  
 夫婿輕薄兒鬪雞事齊主。  
 黃金買歌笑用錢不復數。  
 許史相經過商門盈四牡。  
 客舍有儒生昂藏出鄒魯。  
 讀書三十年腰下無尺組。  
 被服聖人教一生自窮苦。

趙女箜篌を彈じ、復邯鄲の舞を能くす、  
 夫婿は輕薄兒、雞を鬪はして齊主に事ふ、  
 黃金歌笑を買ひ、錢を用ひて復數へず、  
 許史相經過し、商門四牡盈つ、  
 客舍に儒生あり、昂藏鄒魯に出づ、  
 書を讀むこと三十年、腰下尺組無し、  
 聖人の教を被服して、一生自ら窮苦す、

【注解】 箜篌、『釋名』に、「箜篌は此れ師延の作る所、靡靡の樂なり、後、桑間濮上の地に出づ、蓋し空國の候の存する所なり。師  
 涓、晉の平公の爲に鼓す、鄭衛、其の地を分ちて之を有す、蓋に鄭衛の音と鼓す、之を淫樂と謂ふなり、』『後唐書』に「德宗は漢の武帝、  
 樂人侯調をして作らしめ、以て太乙を祠る、或は云ふ侯調作る所、其の聲、坎坎、節に應ず、之を坎侯と謂ふ、聲訛りて箜篌と爲る、  
 今遽かに是非を斷じ難し、其の形は琵琶の如く又瑟に似て小なり、七絃、撥を用つて之を彈す、邯鄲舞、邯鄲は即ち趙、趙は即ち鄭衛  
 の地、鄒魯の地は享樂の地、劉劭が「趙都賦」に、狀麗妙香、邯鄲才舞とあり、輕薄兒、陳の沈約の詩に、洛陽繁華子、長安輕薄兒  
 とあり、鬪雞、『莊子』に紀渚子爲『王蒙』鬪雞とあり、王は即ち齊王なり、許史、許伯と史高となり、許は漢の宣帝が皇后の父、史は  
 宣帝が外家なり、四牡、『詩經』に四牡孔阜とあり、昂藏、氣宇軒昂を謂ふ、『北史』に、高昂、字は傲曹、幼にして壯氣あり、長ずる  
 に及んで假僮、驢力人に過ぐ、其の父、其の昂藏傲曹を以ての故に之を字名すとあり、鄒魯、鄒は春秋の鄒國、戰國改めて鄒と爲す、

善は周公の封地、而して孟子は鄒人、孔子は魯人、二邑は孔孟の化を以て皆文學興盛の地たり、今日の山東省一帶是なり、尺組、古  
 度は腰にすなり尺なりの組腰を帯びて以て其の位を見す、

【大意】 趙地の婦女輩は箜篌を彈じ、復邯鄲の舞を爲して其の日を送る、又其の夫婿輩を見れば皆輕薄  
 兒のみで、鬪雞などの技に巧妙にして以て齊主に事ふ、而して輕薄兒共は黃金の自由になるまま、淫  
 女の歌と、淫女の笑を買ふに是日も足らず、金の費用なぞ固より論せず、論せざるを以て數ふるの要  
 なし、上流に姻縁の多き徒輩が互に經過して、彼等の門前には馬車が常に充滿して居る、然るに客舍  
 に一儒生あり、意氣軒昂、彼等徒輩の腐敗を慨し、鄒魯の地に出で、聖人の書を讀むこと三十年、而  
 かも腰下には判任官位の徽官の帯ぶる尺組も無く、唯孔子の教、孟子の教と言ふことのみを被服し  
 て、一生を自から窮苦の中に終る、

【餘論】 此の篇、享樂に一生を終る徒と、窮苦に一生を終る者とを對比して、學人の憐むべきを言外  
 に表はす、蓋し此の状態はイツの世も同様ならんと思はる、今日見よ、或者は帝國ホテルのダンスの  
 會、或者は親子三人食ふ能はずして水に赴く、右亦は苦學する學人を憐み、余は食ふ能はずして死す  
 る者を憐む、

老來懶賦詩唯有老相隨。

老來詩を賦するに懶し、唯老の相隨ふあり、

宿世謬詞客前身應畫師。

宿世詩客に謬らる、前身應に畫師なるべし、

不能舍餘習偶被世人知。

餘習を舍つること能はず、偶ま世人に知らる、

名字本皆是此心還不知。

名字本皆是、此の心還知らず、

【注解】宿世、法華經化城喻品に、宿世因緣周の語あり、然るに「唐詩紀事」に當代に作る、當代にあらざれば、此の詩を解釋する能はず、前身、是宿世と同意味の語、餘習、「唐詩華嚴經」に、離一切煩惱心垢及其餘習とあり、殘餘習氣と成語す、不知、顯可久曰く、其我知之意、疊用知韻と、趙松谷曰く、疊用二知字、疑誤と、余は今案す、不知は不期の誤りたるや必せり、二字疊用の例無きにあらざるも、此の篇に於ては誤字なること疑ふべからず、

【大意】年老いてより以來詩を賦するに懶を感ず、然りと雖も老は今日より明日と隨ひ來る、而して自分は詞客を以て居らざるに當代の人は謬つて詞客の稱を爲す、蓋し自分の前生を考ふるに恐らくは畫師でありしならん、其の前生の餘習を今生も捨つる能はざるが故に、偶然にも世人の爲めに名を知らるるなり、其の詞客と謂ひ、畫師と謂ふ名字は本來是であらん、而かも其の是とする心も期したるにはあらず、偶然にも此に至りしものなり、

【餘論】此の篇の三四の二句は、古今有名と爲りしものにて、種種の詩話中に載せらる、而かも宿世を取つて、當代を取らず、宿世と前身と一意なることを知らば、宿世の非にして當代の是なることを

知るなり、「唐詩紀事」に據れば、右丞自ら破墨の山水を畫き、此の詩を題せしもの如し、若し今日に於て此の畫あらば、千萬金を惜しまざる者多からん、

西施詠

西施の詠

艷色天下重西施寧久微。

艷色天下重んず、西施寧ぞ久しく微ならんや、

朝爲越溪女暮作吳宮妃。

朝に越溪の女と爲り、暮に吳宮の妃と作る、

賤日豈殊衆貴來方悟稀。

賤日豈來に殊ならんや、貴來方に稀なるを悟る、

邀人傳脂粉不自著羅衣。

人を邀へて脂粉を傳し、自ら羅衣を著けず、

君寵益驕態君憐無是非。

君寵驕態を益し、君憐是非無し、

當時浣紗伴莫得同車歸。

當時浣紗の伴、車を同じうして歸るを得る莫し、

持謝鄰家子效顰安可希。

持して謝す鄰家の子、顰に效ふも安んぞ希ふ可けんや、

【注解】西施、春秋、越の苧羅郷に新を賣るの女、越王句踐、會稽に敗らる、范蠡、西施を取りて吳王に獻す、吳王夫差、越の爲めに亡ぼさる、范蠡、西施を取りて以て江に沈む、越溪、西施が賤女の時、衣を洗ひし溪の名、浣紗、西施が賤女の時、共に衣を

洗ひし件のの女を誦ふ、效顰、西施、家に在り、一日心を痛めて、眉を蹙む、其の里の醜女輩之を見て、此の如くなれば、是美なるべしと、各の家に歸り、俄かに眉を仰へ、眉を蹙む、見る者驚いて以て逃れ去ると『莊子外篇』に在り、世に之を東施效顰と謂ふ、

【大意】艶色は天下等しく重んずる所、西施の如き艶色の女は寧ぞ久しく微賤に處るものぞ、朝に越溪に於て衣を洗ひし女なりしも、暮には吳王の寵姫と爲る、賤しき日は他の衆女と殊ならず、一度王妃と爲るや、方に其の稀なる艶色なることを悟る、昔は人の爲め薪を賣りし身分も、今日は侍女をして己が面に脂粉を傅けしむ、のみならず、羅衣即ち薄絹の衣も自分で著けること無し、吳王の寵愛は其の驕態を益すばかりなり、吳王の愛憐することは是非を超越してあるなり、當時越溪に在りて共に洗ひし女は、今日は西施と車を同じうして歸ること能はず、持して謝して言ふ、鄰家の女子等よ、妻が顰に效ふと雖も、それは到底希ふべきにあらず、

【餘論】此の篇、表面は西施の美を詠するが如きも、側面は他に寄託するものあるが如し、莊子が效顰説、表面西施に在りて内面は他に在ること學者の皆認むる所、詩も亦寄託する所無くば、亦言ふに足らず、趙松谷曰く、賤日豈殊衆の十字、古今皆佳句と稱す、然れども愚は意ふ、是れ君寵益驕態の十字、尤も工なりと、四言の義、俱に慨詞に屬す、然れども出すに冲和の筆を以てす、遂に覺えず、温風乎耳に入るの音を爲すを、誠に風人の旨に合ふ有る哉、漁洋唐賢三昧之を收む、黃香石評して託意深遠と曰ふ、良に我が心を獲たり、松谷の君憐の二句を佳とするは、余は不贊成なり、賤日の句

の佳に及かず、

李陵詠

李陵の詠

漢家李將軍三代將門子	漢家の李將軍、三代將門の子、
結髮有奇策少年成壯士	結髮して奇策あり、少年にして壯士と成る、
長驅塞上兒深入單于壘	長驅す塞上の兒、深入す單于の壘、
旌旗列相向簫鼓悲何已	旌旗列なりて相向ひ、簫鼓悲しんで何ぞ已まん、
日暮沙漠睡戰聲煙塵裏	日暮沙漠の睡、戰聲煙塵の裏、
將令驕虜滅豈獨名王侍	將に驕虜を滅さしめんとす、豈獨名王に侍するのみならん、
既失大軍援遂嬰穹廬恥	既に大軍の援を失ひ、遂に穹廬の恥に嬰る、
少小蒙漢恩何堪坐思此	少小より漢恩を蒙る、何ぞ堪へん坐して此を思ふに、
深衷欲有報投軀未能死	深衷報するあらんと欲す、軀を投じて未だ死する能はず、
引領望子卿非君誰相理	領を引きて子卿を望む、君にあらずんば誰か相理せん、



【注解】李陵、字は少卿、李廣が孫、李當尸の子なり、諸論を覽す、昔射にして士卒を受す、三代、李廣、李當尸、李陵、漢書李廣傳に、三代之將、道家所忌、自廣至陵、遂亡其宗とあり、結髮、漢書に、施繡結髮、事師數十年、師古の注に、言從結髮爲重事とあり、少年、年二十前後にて三十前後の壯士の事を成す、乃ち武帝の時に八百騎に將として匈奴の地に入る、長驅、史記に、輕卒銳兵、長驅至國とあり、單于、匈奴天子の號を謂ふ、名王、匈奴王を指す、穹廬、氐帳なり、其の上穹廬、故に名く、漢書に、匈奴父子、同穹廬一臥とあり、投軛、北史に、投軛萬死之地、以進一旦之功とあり、子卿、漢書に、蘇武字は子卿、杜陵の人、武帝の時、中郎將と爲り、匈奴に使す、單于捕へて降らんことを動む、蘇武肯かず、是に於て蘇を救はす、十九年間、漢節を持して、變改せず、後、漢と匈奴と和睦し、蘇武は漢に歸るを得、李陵は遂に歸るを許さざるなり

【大意】漢家の李將軍は、三代武人の子なり、結髮の時已に奇策を有す、少年にして壯士の業を成す、乃ち塞上に長驅するの勇兒と爲る、兵を率ゐて深く單于の域に入る、漢の天子の旌旗を翻して陣列相向ひ、漢の簫鼓を鳴らす聲悲壯なり、日暮に及ぶまで沙漠の間に戦ひ、煙塵漠漠の裏に馳驅し、志は驍勇を絶滅せんと欲す、豈獨に名の高き王に侍するのみならん、如何にせん漢の大軍の援助來る無く、遂に匈奴に降參するの恥に嬰る、而かも思ふ、少小より漢恩を蒙り、今降參の身に成りて之を思へば、其れ堪ふる所にあらず、深衷必ず漢の爲め報するあらんと欲す、軛を此の處に投じ未だ死する能はず、今日は領を引ばして子卿が漢に歸るを望む、且言ふ君にあらざれば、陵が心事を相理して呉れるもの無し、

【餘論】此の篇、右丞年十九の作なりと、深く李陵が年少にして、彼の事ありしに感激せしものならん、李陵の降伏するや、必ずしも怯懦にあらざることは、陵と蘇武との唱和の詩に見ても明白なり、

陵若し眞に惜むべきものなれば、蘇武は決して彼に同情多き詩は作らざるものなり、右丞少年にして彼が情を知り、此の詠を成せしものと思ふ、但し本集第一卷に入句の從軍行詩あり、其の五六の句に日暮沙漠陲、戰聲煙塵裏とあり、今の句と全く同じ、同句を甲乙の二詩に用ふるは、大家の技倆として怪しむべきに似たるも、作者、偶然に此に至りしものならん、顧可久の評に、能道二陵意中事、雅正雄渾頓挫とあり、

燕子龕禪師

燕子龕禪師

山中燕子龕路劇羊腸惡、  
裂地競盤屈插天多峭崿、  
瀑泉吼而噴惟石看欲落、  
伯禹訪未知五丁愁不鑿、  
上人無生緣生居紫閣、  
六時自搥磬一飲尙帶索、

山中の燕子龕、路は羊腸の惡よりも劇し、  
地を裂きて盤屈を競ひ、天を挿んで峭崿多し、  
瀑泉吼えて噴き、惟石看て落ちんと欲す、  
伯禹訪うて未だ知らず、五丁愁へて鑿せず、  
上人無生の緣、生長して紫閣に居り、  
六時自から磬を搥ち、一飲尙索を帯にす、



種田燒白雲斫漆響丹壑  
 行隨拾栗猿歸對巢松鶴  
 時許山神請偶逢洞仙博  
 救世多慈悲卽心無行作  
 周商倦積阻蜀物多淹泊  
 巖腹乍旁穿澗曆時外拓  
 橋因倒樹架柵值垂藤縛  
 鳥道悉已平龍宮爲之涸  
 跳波誰揭厲絕壁免捫摸  
 山木日陰陰結跏歸舊林  
 一向石門裏任君春艸深

田を種えて白雲を焼き、漆を斫りて丹壑に響く、  
 行いて栗を拾ふ猿に随ひ、歸りて松に巢ふ鶴に對す、  
 時に許す山神の請ひ、偶々逢ふ洞仙の博、  
 救世慈悲多く、卽心無行作、  
 周商積阻に倦み、蜀物淹泊多し、  
 巖腹乍ら旁穿、澗曆時に外拓、  
 橋は倒樹に因りて架し、柵は垂藤に値うて縛す、  
 鳥道悉く已に平か、龍宮之が爲めに涸る、  
 跳波誰か揭厲せん、絶壁捫摸を免かる、  
 山木日に陰陰、結跏舊林に歸る、  
 一たび石門の裏に向ひ、君が春艸の深きに任す、

【注解】燕子龕、山名なり、連理水上に在り、山城門は其の東に在り、飛龍泉は其の西に在り、唐顯山宮園に出づ、羊腸、路の  
 盤行曲屈、羊腸に就ぶれば夏に蒸し、蟠時、孫神が「天台山賦」に、夢三峭壁之峻峻とあり、峭絶なる峻崖を謂ふ、伯夷、禹王なり、

五丁、山を移し、萬鈞を牽ぐる、五人の力士なり、上人、人間以上に徳を有する人、無生緣、涅槃の眞理は生滅無ければ無生と謂ふ、  
 而かも縁に因りて生滅あり、上人は縁に因りて生長したるなり、紫閣、「太平廣記」に、終南山の紫閣峯、長安城を去る七十里とあり、  
 六時、一日一夜を六時に分つ、日初分時、日中分時、日後分時、夜初分時、夜中分時、夜後分時なり、一飲二食、一飲は佛家の通規、  
 帶業、塵服を謂ふ、種田、種福田の時、佛徒の修業を種福田と謂ふ、又齊民要術に、凡そ粟山深田を開く、皆、七月、草を薙り、乾  
 くときは放火、春に至りて開墾す、其の林木大なるもの之を割殺す、棄死れて腐がす、復ち時種に任ふ、三歲後、根枯れ草朽つ、火を  
 以て之を焼く、新濠、「古今注」に、漆樹は剛斧を以て其の皮を斫り、開きて竹管を以て之を承く、汁、管中に滴り、卽ち漆と成る、山神  
 謂、「法苑珠林」に、盧山の曇邑和尚は關中の人、長八尺、雄武、人に過ぐ、惠遠法師に師事して、苦學精修し、般若を憚らず、山  
 西に於て、別に茅宇を設け、弟子曇果と、思を禪門に浸ましむ、曇果一夜夢に山神來りて五戒を請求するあり、果曰く吾師此に在り  
 往いて請受すべし、後少時にして忽見る一人車拾衣を著け、風姿綽約、從者三十人、率りて五戒を請受するを、邑、果が光の夢を以  
 て、是れ山神なるを知り、是に於て説法受戒す、神觀するに（粟は布施なり）外國の七筋を以てし、禮拜辭別、徒忽に見えずとあり  
 洞仙傳、曹植の時に、仙人攬六箬、對博太山稱、博は局戲の遊なり、卽心、此の心の儘と云ふ義、無行作、無行無作を謂ふ、自然  
 と道に合したるは其の痕跡無きを謂ふ、有行有作の反對なり、積阻、積累險阻と成語す、周の商人も積累險阻の爲め至らざるなり、  
 淹泊、久しく止まるなり、蜀の物貨も久しく止まると言ふは、前の五丁の文字に相應する爲めなり、鳥道、凡そ山路の高峻險絶なる  
 もの、之を鳥道と謂ふ、險崖に僅かに飛鳥の道あるを謂ふ、結之洞、山の險阻を開き、其の土の舍る所は海水なり、海水が埋まれば  
 龍宮は涸れざるを得ず、揭厲、「爾雅」に、深きは則ち瀕り、淺きは則ち揭ぐとあり、捫摸、藤や藟や葛の枝を「ツカミホク」なり、  
 結跏、佛徒の坐する法、左右の足を重ねて坐す、蓋し胡坐「アグラ」にはあらず、

【題義】燕子龕禪師と題するは、燕子龕に住したる禪師なるが故に、右丞が是の題を設けしならん、  
 燕子龕禪師なる名は僧史に見えざるなり、然れば眞の名は知るを得ず、

【大意】燕子龜は山中最も深き處に在りて、此に至るには路險阻にして羊腸よりも惡し、其の下地の方は何年に裂けしや知らず盤厠を脱うて險なり、其の上天の方は何神が插みしや知らず、峭崿を争うて多し、而して瀑泉の堂堂と落つる聲は吼ゆるが如く、瀑布に旁うてある怪石は落下せんとする形を爲す、古の伯禹は善く地理を治めし人、而かも此の處は知らざる所なり、蜀の險道を開拓せし五丁も、此の危険の處は自分の身を愁ふるが故に堅閉せず、然るに禪師上人は無生の縁を以て此の土に生長し、生長して以て紫閣峯に住し、晝夜六時に自ら磬を撞つて修行し、口には僅かなる飲物を取り、身には草木なる袈裟を著け、福田を坼す爲めに惡木を燒き、惡雲を掃ひ、漆樹を斫るの聲は丹壑に響く、行くには栗を拾ふ所の猿と共にし、歸るには松に巢ふ鶴と俱にす、時ありては山神の請求に應じて戒法を授け、偶には仙人と同じく碁を圍むの戲も爲し、而かも自己一身の爲にはあらず、救世の慈悲心を多く抱き、即心にして無行無作の業を積む、是に於て周商も積阻に倦みし處、蜀物も淹泊多き處、巖腹を乍ちに旁穿し、潤唇も時ありて別に新しき處に拓き、橋は倒樹を利用して架設し、柵は垂藤を是亦利用して便宜にし、飛鳥より他の物は通ずる能はざる險道を始めて能く平夷に爲す、之が爲めに龍宮の水は涸れんとするかと思ふ、橋の無き時は跳波を渉るに皆揭厲したり、柵の無き時は絶壁を攀づるに皆捫摸したり、然るに上人の慈悲業に因りて今は之を免る、然るのみならず、山木は日夕陰陰と影を深うし、上人は舊林に歸りて結廬せんとす、上人は一たび石門の裏に向へば、坐禪三昧なれば、春神の深きに任さんのみ、

【餘論】此の篇、起句より以下捫摸までの三十句は入聲一韻、山木以下の二十字、平聲一韻、奇句あり、雄句あり、藍田石門精舍詩と多く相運らざるを覺ゆ、

羽林騎閨人

羽林騎の閨人

秋月臨高城、城中管絃思。  
離人堂上愁、稚子階前戲。  
出門復映戶、望望青絲騎。  
行人過欲盡、狂夫終不至。  
左右寂無言、相看共垂泪。

【注解】羽林騎、此の名は漢の武帝太初元年に置く所、「唐書百官志」を案するに、左右羽林軍あり、後人、天子の禁兵を謂つて、皆之を羽林と謂ふ、日本今日の近衛兵の事なり、離人は家を守る閨人なり、青絲騎、青色の繮にて羽林騎たるの符と爲す、昔の劉琨の時に、未見青絲騎、徒勞紅粉散とあり、狂夫、閨人が其の夫者を指す、

【題義】婦女が男子に對し、愁情を敘ぶるを閨怨と曰ふ、此の詩は軍人の妻の閨怨と謂ふ意味なり、

【大意】秋月皓皓と高城の上に臨む、城中には處處に管絃起りて我が思に入る、夫と離れて家に在る人は唯獨り愁に沈む、稚子は無心階前に遊戯する、堂を下り門を出でて見れば、月影は復戸に映じ来る、此の處を過ぎ去る青絲騎あり、若しや此の中に我夫が居るやと注意すれども、曾て其の人は無し、皆過ぎ盡くす、我が家の狂夫は何處を彷徨して居るにや、終に至らず、侍女共は離人の愁状見るに忍びず、皆無言にして互に相看て泪を垂るのみなり、

【餘論】聞人の情態を寫し出し、之を六朝人に比較して見るに、別に新意あるにあらず、但狂夫の文字を使用したる點は、閨怨詩に於て絶妙と稱せらるる王昌齡なぞの夢想せざる所、夢想せざるのみならず、王昌齡は言ふを欲せざる語なり、女の妬心より發する語、良人の字面より強烈を覺ゆ、劉禹錫の日出三竿春霧消、江頭蜀客緊蘭橈、欲寄狂夫書一紙、家住成都萬里橋と、意を同じうす、顧可久評して緬思之意深至と、當れりと謂ふべし、

冬夜書懷

冬夜の書懷

冬宵寒且永、夜漏宮中發。  
草白靄繁霜、木衰澄清月。

冬宵寒くして且永く、夜漏宮中に發す、  
草白うして繁霜靄たり、木衰へて清月澄む、

麗服映頰、朱燈照華髮。

麗服頰に映じ、朱燈華髮を照らす、

漢家方尙少、顧影慚朝謁。

漢家方に少を尙ぶ、影を顧みて朝謁を慚づ、

【注解】夜漏、漏刻の法、孔竇を漏と爲し、浮箭を刻と爲し、水の高下を見、以て昏明の候を定む、故に漏刻と曰ふ、晝に在りて之を晝漏と謂ひ、夜に入りては之を夜漏と謂ふ、是の漏刻は晝を發せず、唯時刻を計るのみなり、後人之以小鐘を施し其の刻毎に鳴る、之を漏鼓と謂ふ、今乃ち發と曰ふ、漏鼓に屬す、顧の字は盛んなを意味す、繁霜が足き意味なり、『詩經』に正月繁霜とあり、朱燈、齊の鮑照の詩に、朱燈滅朱顏等とあり、華髮は白髮なり、尙少、『漢武故事』に、武帝一日郎署に至り、一老郎の眉眉皓髮なるを見る、問ふ何れの時に郎と爲るや、何ぞ其れ老いたる、對へて曰く、臣性は頰、名は顧、文帝の時、郎と爲る、文帝、文を好み、而して臣、武を好む、貴帝、老を好んで、而して臣獨り少し、陛下、少を好んで、而して臣は已に老ゆ、是を以て三業不遇なり、武帝其の言に感じ、憚んで會稽郡尉と爲す、

【大意】冬宵は寒うして且永く、二更三更と漏聲の屢ば宮中に發するを聴く、宮庭を見れば、草の白く見ゆるは是れ繁霜の靄たるなり、天上を仰げば、清月澄んで木の衰へたるを照らす、宮中の故に麗服を着用して居る身も、衰しい哉、老人の頰顔に映じ、朱色の燈火は老人の白髮を照らす、漢家の天子は少年を尙ぶ、老人は自分の影を顧みて明朝の謁見を慚づとなり、

【餘論】此の篇は、單に衰老を歎嗟するにあらず、側面に頰顧の如く不遇なるものあるを示すなり、詩は顧可久の雅正と評するに盡く、

早朝

皎潔明星高蒼茫遠天曙  
槐霧鬱不開城鴉鳴稍去  
始聞高閣聲莫辨更衣處  
銀燭已成行金門儼駟馭

早朝

皎潔として明星高く、蒼茫として遠天曙く、  
槐霧鬱として開かず、城鴉鳴きて稍去る、  
始めて高閣の聲を聞く、更衣の處を辨すること莫し、  
銀燭已に行を成し、金門駟馭儼たり、

【注解】明星は即ち大白星、「爾雅に明星謂之啓明」とあり、注に、發出東方高三舍、命曰明星」とあり、蒼茫、「カンヤリ」として大なる形容、槐霧、露の何處の時に、城霞且先朝、槐霧鳴氣とあり、更衣、朝賀して衣服を更ふる室の名なり、王充の「論衡」に、更衣之室、可謂臭矣とあり、銀燭、南北朝の顧野王が舞影賦に、耀金波分蘭戶、列銀燭分蘭房」とあり、金門、金馬門の略稱、漢の武帝、學士をして金馬門に待詔せしめ、顧問に備ふ、漢の未央宮の前、銅馬あり、故に金馬門と曰ふ、駟馭、駟從駕馭なり、大官の前導從騎を皆駟馭と曰ふ、

【題義】早朝、宮禁の景色を敘すが主眼なり、

【大意】皎潔たる明星は天に在りて高く、蒼茫たる遠天は漸く曙色を呈す、槐樹に籠もる霧は散開せざるが爲めに暗く、城上を離るる鴉は鳴いて次第に去る、此の時始めて高閣に人聲の起るを聞く、而かも更衣の室を明白に辨する能はず、既にして銀燭の雁行を成すを認む、乃ち知る高官が朝賀の爲め

駟馭を儼にして參内することを、

【餘論】顧可久本に早朝二首と題し、是の詩と別に一首あり、曰く柳暗百花明、春深五鳳城、城鳥睥睨曉、宮井轆轤聲、方朔金門侍、班姬玉輦迎、仍聞道方士、東海訪蓬瀛、譯下の如し、柳暗うして百花明か、春は深し五鳳城、城鳥睥睨の曉、宮井轆轤の聲、方朔金門に侍し、班姬玉輦を迎ふ、仍聞く方士を遣りて、東海に蓬瀛を訪はしむ、顧評して曰く、漢の武帝、仙を好むの事、早朝に因りて事を使ひ、玄宗が政事を廢して荒侈に耽るを隱諷するの意、此賈至に和する詩の意と調尤も高古俊偉、和詩は拘束して、人に遷就するを免れず、此則ち自家の意思縱放乃ち爾り、正大雄渾彩麗なり、余が講本は趙殿成注なれば、研究に志あるの士は、顧趙の二本對照せられんことを望む、

寓言二首

朱紱誰家子無乃金張孫  
驪駒從白馬出入銅龍門  
問爾何功德多承明主恩  
鬪雞平樂館射雉上林園

寓言二首

朱紱誰が家の子ぞ、乃金張が孫なる無からんや、  
驪駒白馬に従ひ、出入す銅龍門、  
問ふ爾何の功德ぞ、多く明主の恩を承く、  
鬪雞を鬪はす平樂館、雉を射る上林園、

曲陌車騎盛。高堂珠翠繁。  
奈何軒冕貴。不與布衣言。

曲陌車騎盛ん、高堂珠翠繁し、  
奈何ぞ軒冕の貴き、布衣と言はず、

【注解】朱絨、朱は正赤色なり、絨は絨裘、又蔽冕、印綬を帯び冠を著けるなり、絨は蔽と同音同義の字なり、金装は前既に辨ぜり、駟駒は純黒色の馬を曰ふ、漢の古詩に白馬從驪駒とあり、銅龍門、門樓の上に銅龍あり、故に以て名とす、編器にも銅龍あり、噴水器にも銅龍あり、門に於ては裝飾なり、何功德、魏の應璩の詩に問我何功德、三入承明廡とあり、平樂館、漢書武帝の元封六年の夏、京師の民、角抵を上林平樂館に觀るとあり、娛樂の爲め會する處ならん、上林園、普通に上林苑と書す、園の爲め園とせしなり、「三種共園」に、上林苑、方三百里、苑中に百獸を養ひ、天子秋を、射獵之を取るとあり、曲陌、曲は周曲、陌は街陌、市中の九陌を曰ふ、軒冕、卿大夫の車服なり、布衣、庶人を謂ふ、漢の桓寬の「鹽鐵論」に、古は庶人耄老にして後絲を衣る、其の餘は則ち僅かに麻衣、故に布衣と曰ふとあり、

【題義】寓言とは寄託する所あるの言なり、「史記」に、莊周、書を著はす十餘萬言、大抵寓言なり、字の表面に顯はるる所は、其の裏面に深き意味を寓するの言、是を寓言と稱するなり、是の故に解すべく、又解すべからざるものあり、此の詩は甚だ解し易し、

【大意】朱絨を以て身を裝ふ公子然たる人は果して誰が家の子ぞ、察するに是れ高貴と姻縁ある金張が家の孫ならん、自身は驪駒に騎りて、而して白馬に乗る大官に従ひ、意氣揚揚として銅龍門に入する、之に何の功德を有して然るや、明主の恩を承くる多きやと問ふ、察するに鬪獵の遊伎に巧な

るを以て平樂館に陪し、雉を射るの弓術に妙なるを以て上林苑に従ふ、市街の南北に車騎盛んなる、高堂の上下に珠翠即ち美服の人繁き、皆是彼等の徒なり、奈何に軒冕は貴きぞ、市井の平民輩とは言語を交へざるや、

君家御溝上。垂柳夾朱門。  
列鼎會中貴。鳴珂朝至尊。  
生死在八議。窮達由一言。  
須識苦寒士。莫矜狐白溫。

君が家は御溝の上、垂柳朱門を夾む、  
鼎を列ねて中貴を會し、珂を鳴らして至尊に朝す、  
生死八議に在り、窮達一言に由る、  
須らく識るべし苦寒の士、狐白の温かなるに矜ること莫

【注解】列鼎、劉向の「說苑」に、累茵而坐、列鼎而食とあり、珍産佳肴を列ねて食ふなり、中貴、中貴人と曰ふ、一種の官名なり、内匡の貴事なる者、「漢書李廣傳」に、上使中貴人從廣、勅習兵、習匈奴とあり、其の後専ら宦官を以て中貴人と爲す、鳴珂、珂は玉に夾ける石、白瑤瑤なり、馬勒、即ち珂にて飾る白色の勒なり、唐代、官一品以下は九子、四品は七子、五品は五子とあり、馬行即ち珂が響くなり、八議、周代の刑法に八議の法あり、一に曰く議親之辟、二に議故之辟、三に議賢之辟、四に議能之辟、五に議功之辟、六に議貴之辟、七に議勤之辟、八に議賢之辟、狐白温、狐腋の白毛、以て裘と爲す、富貴の人にあらすんば衣る能はず、

【大意】君が家は天子と郡して御溝の上に在り、門柳は垂垂として朱門の左右を夾む、燕會を設けて



中貴人を招き、天下の珍味を陳列して食ふ、或は至尊に朝賀するときは玉珂を鳴らして貴威を示す、民衆が若し此等の状を批評するならば生死の分岐點に立たざるべからず、對するも違するも一言譽むると譏るより定まる、されど君等は少しく寒に衣なき士人の苦をも察し、狐白の裘を着けて居る身分の温かきに矜ることを止め玉へ、

【餘論】此の篇二首共に無能なる子弟が、父兄の要路に在るが爲め、各の其の放蕩を盡くして、日夜單に游戲に耽るを諷誡したるものなり、奈何軒冕貴、不與布衣言、此の十字の如きは昭和の今日にも見る所なり、特に官僚の徒に於て多しとす、然りと雖も余は一概に之を論せざるものなり、如何に平等博愛を主とする者も、馬夫や車丁、乃至乞丐の徒と友人の如く之と談話を交ふることは斷じて能はざる所、階級上下の分、自然の致す所、釋迦孔子も亦如何とすべからざるべし、是の故に人は馬夫車丁と爲らんより、大臣大將と爲るべきなり、虛谷の『瀛奎律髓』に、此の後首を載せて虚象の作とし、八議を片議と改む、而して評して曰く古樂府の意あり、格調甚高と、清の紀曉嵐曰く、中の四句對偶と雖も、然も終に是れ俳偶の古體、律格にあらざるなり、語淺く局促る、虚谷以て高格と爲すは尤も非と、余案するに『全唐詩』王維集に此二首を載せ、虚象集に此の後首を載す、而して維には八議とあり、象には片議とあり、今其の是非を定むるは容易ならず、但詩體として見れば、虚谷の之を律格とするは其の誤り明白にして、紀の古格と稱するは正當なり、詩品に於て虚白は格調甚高と謂ひ、曉嵐は語淺局促と謂ふ、是の評は虚白是にして、曉嵐は非なり、顧可久は曰く、雄渾遒古と、方と顧との二家の讀する所を、曉嵐獨り譏る、彼は虚象なるが故に譏りたるなり、若し王右丞なりと知らば、何ぞ此の評あらんや、我邦に刊誤を刊誤したる學者ありし、是に於て乎、彼は我に學ばざるべからざる所あり、

雜詩

雜詩

朝因折楊柳相見洛城隅。  
楚國無如妾秦家自有夫。  
對人傳玉腕映竹解羅襦。  
人見東方騎皆言夫婿殊。  
持謝金吾子煩君提玉壺。

朝に楊柳を折るに因つて、相見る洛城の隅、  
楚國妾に如くは無し、秦家自から夫あり、  
人に對して玉腕を傳へ、竹に映じて羅襦を解く、  
人は東方の騎を見て、皆言ふ夫婿殊なりと、  
持謝す金吾の子、君を煩はして玉壺を提げしめん、

【注】楚國、楚妃は楚の莊王の夫人、秦家、秦家に嫁ぬる美人あり、玉腕、梁の簡文帝の詩に、翠文生玉腕、香汗浸紅紗とあり、羅襦は薄くして短き「ハダギ」を謂ふ、齊の謝朓の詩に、輕歌念綺帶、含笑解羅襦とあり、東方騎、漢の古詩に東方千餘騎とあり、夫婿殊、漢の古詩に昔言夫婿殊とあり、金吾、執金吾は官名、日本今日の警視の如き役なり、

【題義】此の詩は何を歌ふと定め難きもの、皆題して雜詩と曰ふ、「古樂府」に折楊柳と題する辭あり、又陌上桑と題する辭あり、今は孰れに由るとも定めがたければ、雜詩と題する所以なり、要は古樂府の詞を節要して、右丞自ら詠じ、其の眞を守るの意を寓し、朝に源氏と爲り、夕に平氏と爲る徒輩を嘲笑したるものなり、

【大意】此の詩意を説明するには、此の詩の因つて來る根原を知らざれば能はず、根原を知らば、此の詩を説くの要なし、漢の陌上桑に曰く、日は出づ東南の隅、我が秦氏の樓を照らす、秦氏好女あり、自ら名けて羅敷と爲す、羅敷善く蠶桑す、桑を城南の隅に採る、青絲を籠係と爲し、桂枝を籠鈎と爲す、頭上は倭墮髻、耳中は明月珠、細綺を下裙と爲し、紫綺を上襦と爲す、行者羅敷を見る、擔を下りて鬘鬘を持る、少年羅敷を見る、帽を脱して帽頭に著く、咄す者は其の鞞を忘れ、鋤ふ者は其の鋤を忘る、來歸相怒怨し、但坐ろに羅敷を觀る(一)、使君南より來る、五馬立つて踟躕す、使君吏を遣りて往かしめ、問ふ是れ誰が家の姝ぞ、秦氏好女あり、自から名けて羅敷と爲す、羅敷年幾何ぞ、二十尚ほ足らず、十五頗る餘あり、使君羅敷に謝す、寧ろ共に戴すべきや不や、羅敷前んで辭を致す、使君一に何ぞ愚なる、使君自から婦あり、羅敷自から夫あり(二)、東方千餘騎、夫婿上頭に居る、何を用つて夫婿を識る、白馬驪駒を従ふ、青絲馬尾に繫ぐ、黃金馬頭に絡ふ、腰中鹿盧の劍、值千萬餘なるべし、十五府小吏、二十朝大夫、三十侍中郎、四十專ら城居、人と爲り潔白哲、繁繁頗く觀あ

り、盈盈公府に歩す、冉冉府中に趨る、坐中數千人、皆言ふ夫婿殊なりと(三)、古趙の邯鄲に女子あり、秦を姓とし、羅敷を名とす、趙王の家令王仁の妻と爲る、桑を陌上に採る、趙王臺に登り、見て之を喜び、奪はんと欲す、羅敷、箒を彈じ、陌上桑を作り、以て自から夫あることを明かす、趙王乃ち止む、右丞乃ち此の婦の眞を敍し、以て我が志の堅きを見し、金吾の子弟をして、玉壺を提げしむる醜態を嘲けるなり、對人、映竹等の字義解すべく、又解すべからざるものなり、

獻始興公

始興公に獻す

寧棲野樹林寧飲澗水流、寧ろ野樹の林に棲まん、寧ろ澗水の流を飲まん、不用食梁肉崎嶇見王侯、用ひず梁肉を食うて、崎嶇として王侯に見ゆるを鄙哉匹夫節布褐將白頭、鄙しい哉匹夫の節、布褐將に白頭ならんとす、任智誠則短守仁固其優、智に任しては誠は則ち短く、仁を守りては固に其れ優なり、側聞大君子安問黨與讎、側に聞く大君子、安んぞ問はん黨と讎と、

所不賣公器、動爲蒼生謀。  
賤子跪自陳、可爲帳下不。  
感激有公議、曲私非所求。

公器を賣らざる所、動すれば蒼生の爲めに謀る。  
賤子跪いて自陳す、帳下と爲す可けんや不や、  
感激公議あり、曲私求むる所にあらず、

【注解】 寧は、彼物と此物と二物比較し、彼物よりは寧ろ此物を取らんとの義なり。梁肉、良米と美肉なり。「國語」に食は必ず梁肉、衣は必ず文繡とあり、「五言君傳」には僕妾餘梁肉とあり、嵇暉は山路の平穩ならざるが第一義にして、困難の喻は第二義とす、今は困難を謂ふ、大君子、漢の「董仲舒傳」に故不足稱於大君子之門也とあり、黨權、晉の劉琨の詩に、何能降二伯、安問黨與黨とあり、動を「ヤハモスレバ」と訓したる本あり、今取らず、活動すればの實を取る、賤子、右丞自身を謙遜して言ふ、晉の龐休羅の詩に、懸席跪自陳、賤子實空虛とあり、帳下、今日謂ふ所の部下と同じ、「三國志」に、樂進以三膽烈、從太祖爲帳下吏とあり、

【題義】 唐書張九齡本傳に、九齡開元二十三年、金紫光祿大夫を加へられ、始興縣の伯に累封せらるゝとあり、右丞は時に右拾遺に拜せらるゝ、

【大意】 寧ろ野樹林に棲むも、我は綺閣に棲むを欲せず、寧ろ涸水の流を飲むも、玉壺の水を飲むを欲せず、食は命を支ふれば足る、何ぞ梁肉を食はんや、野人と談笑するも、綺羅として王侯に謁せず、意氣や壯なるが如きも、要するに匹夫の節、鄙なる哉と言はざるを得ず、口に斯く放言するも、身には布褐糲糲冉冉と老境に逼る、此の如き生活の愚なるを覺り、反して智に任すときは誠意が短と成る、唯仁を守るの道は固に勝優とする所なり、風説に聞く公は大君子に在すことを、大君子なるが故に黨

と歸との別なく一視同仁の徳を持ち玉ふ、高位に身を置くも職權を濫用する如きことを爲さず、一動、皆蒼生の爲にのみ善謀し玉ふ、是に於てか賤子は恭跪して自陳仕る、大君子の部下と爲るを許し玉ふや不や、幸ひにして公議ありしことを感激す、賤子は曲私の事は毫も求むる所にあらず、唯我が誠を容れらるるに於て満足する、

【餘論】 右丞此の詩を以て九齡に獻す、九齡の容るる所と爲りて直ちに右拾遺の官に拜せらるゝ、右丞の感激察するに餘あり、世上徒らに自ら狷介と稱して、世と特に相反する者、此等の詩を二讀三讀すべきなり、

哭殷遙

殷遙を哭す

人生能幾何、畢竟歸無形。  
念君等爲死、萬事傷人情。  
慈母未及葬、一女纔十齡。  
泱泱寒郊外、蕭條聞哭聲。  
浮雲爲蒼茫、飛鳥不能鳴。

人生能く幾何ぞ、畢竟無形に歸る、  
念ふ君等しく死を爲す、萬事人情を傷ましむ、  
慈母未だ葬るに及ばず、一女纔かに十齡、  
泱泱たる寒郊の外、蕭條として哭聲を聞く、  
浮雲爲めに蒼茫、飛鳥鳴くこと能はず、

行人何寂寞。白日自淒清。  
憶昔君在時。問我學無生。  
勸君苦不早。令君無所成。  
故人各有贈。又不及生平。  
負爾非一途。痛哭返柴荆。

行人何ぞ寂寞、白日自から淒清、  
憶ふ昔君が在時、我に問うて無生を學ぶ、  
君に勸むる早からず、君をして成る所無からしむるを苦  
故人各の贈あり、又生平に及ばず、  
故人各の贈あり、又生平に及ばず、  
爾に負く一途にあらず、痛哭柴荆に返る、

【注解】人生、晉の陶潜の詩、人生無幾何、爲樂常苦晏とあり、等爲死、死は貴賤平等なり、淒清、漢の張衡が「西京賦」に、  
洪源無疆とあり、洪源は無際限の形容、無生は前に辨べり、生平は平生の倒用、平生と爲さば、第七の無生に背あり、負爾の爾は負  
の助語ならんと思へども、或は爾と讀むの通するを覺ゆ、柴荆、晉の謝靈運の詩に、促裝返柴荆とあり、柴荆、荆扉なり、

【題義】殷遙は丹陽の人、天寶間、忠王府の倉曹參軍の官を以て終る、

【大意】人生は長短を説くも果して幾何ぞや、畢竟するに長も短も無形に歸るなり、念ふに君も亦常  
人と等しく今や死す、而して萬事人情を傷ましむ、慈母は避いて未だ葬送せず、一女兒の遺るあるも  
纔かに十歳、君が棺を送るに淒涼たる寒郊の外に向ふ、而して聞く所のは蕭條たる哭聲のみ、天  
を仰げば浮雲は爲めに蒼茫たる色を現し、飛鳥すら鳴かざるの凄狀なり、會葬の人も聲を發せず、故  
に寂寞たり、白日も光明かならず、故に淒清たり、我は記憶する君が在時に、君は問ふ無生の理とは

何ぞやと、其の間や甚だ善なれども、惜し哉其の期を後れて、無生の理を心得する所無くして逝きし  
を、故人は君を哭して、痛悼の言を贈るあるも、其の生平無生の理に君が心を寄せしことを知らず、  
我も痛む爾に負くこと一途にあらざりしを、今悔むも如何ともすべからず、痛哭して復柴荆に返る、  
【餘論】余常に漢の蔡琰の悲憤詩及び胡笳十八拍を讀み、悲慨眞に中心より湧くを覺ゆ、右丞の此の  
篇、蔡を學びしにはあらずるも、至情に出づるの語、人をして泣然たらしむるものあり、顧本に夏に  
一絶を附す、送君返葬石樓山、松柏蒼蒼賓厭還、埋骨白雲長已矣、空餘流水向人間、趙本に儲光  
義の同三王十三維一哭殷遙の五古を載す、今茲に採らず、

歎白髮

白髮を歎す

我年一何長。鬢髮日已白。  
俛仰天地間。能爲幾時客。  
悵惆故山雲。徘徊空日夕。  
何事與時人。東城復南陌。

我が年一に何ぞ長きや、鬢髮日に已に白し、  
俛仰天地の間、能く幾時の客と爲る、  
悵惆す故山の雲、徘徊空しく日夕、  
何事ぞ時人と、東城復南陌、

【大意】我年などは考へて居らざりしも、鬢髮の白きを見て、始めて老境に逼りしを覺る、天地の間

309  
65

を僂仰して、此の世上の客と爲る尙幾年ぞ、帳惆として故山の雲を望み、無爲に徘徊して今日も暮れぬ、我は我の事を務むれば足る、然るに何事ぞや、時流の凡人共と、或は東城或は南陌と奔走する、

王右丞集卷五終



終